

伊勢物語講義

今

913.32
I318i
W

088939-000-1

913.32-I318i

伊勢物語講義

今泉 定介/著

M33

DBL-0003



中等教育漢文講義

今泉定介先生講述

伊勢物語講義

東京書肆

誠之堂藏版

現今世に於ては、伊勢物語の講義、其の必要なる者多し。然るに、其の講義、其の必要なる者多し。然るに、其の講義、其の必要なる者多し。

国会図書館
29.7.2
図書印

336548

伊勢物語講義

講述の目的

此の書は、古來、大に世に行はれたれば、之を解釋せるものも、甚、にほし。其のほかに、これを擧ぐれば

- (一) 伊勢物語愚見抄(五卷) 一條 兼良 (六) 同 拾穂抄(二卷) 北村 季吟
- (二) 同 宗祇抄(一卷) 宗祇 法師 (七) 勢語臆斷 (四卷) 沙門 契沖
- (三) 同 闕疑抄(五卷) 細川 幽齋 (八) 伊勢物語童子問(十三卷) 荷田 春滿
- (四) 同 難義註(一卷) 作者 不詳 (九) 同 古意(六卷) 賀茂 貞淵
- (五) 同 集註(十二卷) 一華堂切臨 (十) 同 新釋(六卷) 藤井 高尙

などなり。此の外、なほ多し、中にも新釋は、出版の時代、最、あたらしければ、説も亦新しく、いはゆる、古註をあつめて、大成せるものともいふべし。故に余もかほやう新釋により、またいかかと思ふふしは、他の古註をも取り、鄙見をも加ふべし。但、余の此の書を講ずるは、中等教育の程度を目的とするれば、綴箋を欲せず、高尙を望まず。唯、簡易にして、讀者の會得しやすからん事を期せり。さて講述の順序は、まづ、語を解し、次に文章の大意を述べ、(語釋のみにて、おのづから、大意の聞てゆる處には、殊更に述べず)歴史に涉れる處には、まゝ、事實をも説明すべし

すべての物語

○伊勢物語講義

中等教育漢文講義

今泉定介先生講義

伊勢物語講義

東京書肆

筑波堂發行

伊勢物語講義

今泉定

講述の目的

此の書は、古來、大に世に行はれたれば、之を解釋せるものも、甚、たほし。其のたほかたを舉ぐれば

(一) 伊勢物語愚見抄(五卷) 一條 兼良 (六) 同 拾穂抄(二卷) 北村 季吟

(二) 同 宗祇抄(一卷) 宗祇 法師 (七) 勢語臆斷 (四卷) 沙門 契沖

(三) 同 闕疑抄(五卷) 細川 幽齋 (八) 伊勢物語童子問(十三卷) 荷田 春滿

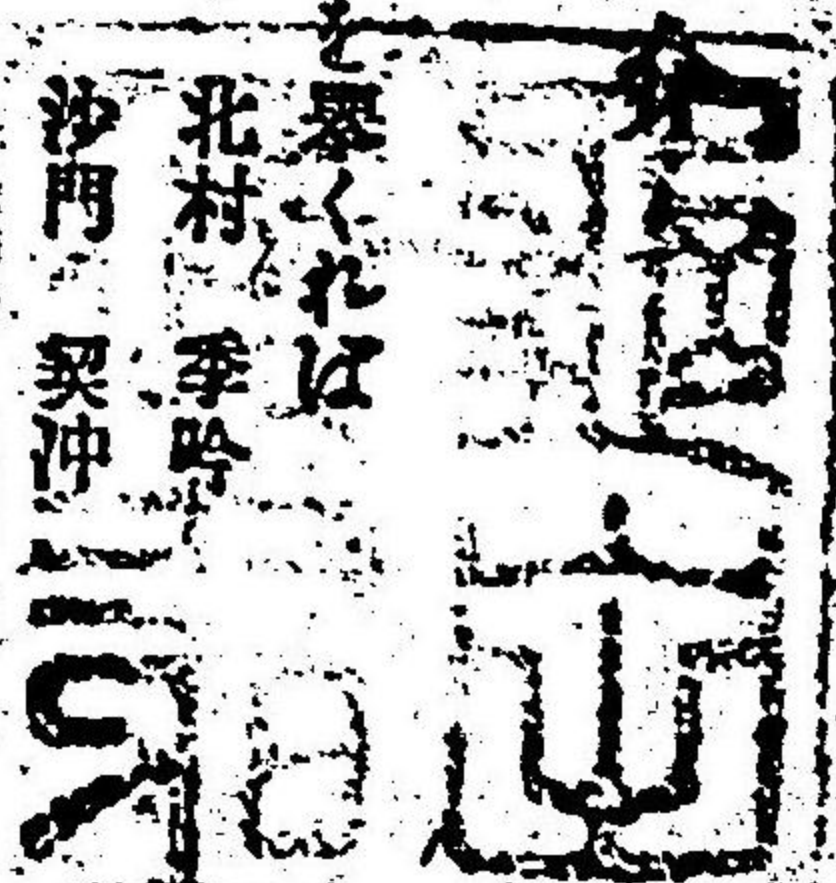
(四) 同 難義註(一卷) 作者 不詳 (九) 同 古意(六卷) 賀茂 貞淵

(五) 同 集註(十二卷) 一華堂切臨 (十) 同 新釋(六卷) 藤井 高尙

などなり。此の外、なほ多し、中にも新釋は、出版の時代、最、あたらしければ、説も亦新しく、いはゆる、古註をあつめて、大成せるものともいふべし。故に余もおほやう新釋により、またいかかと思ふふしは、他の古註をも取り、鄙見をも加ふべし。但、余の此の書を講ずるは、中等教育の程度を目的とするれば、緻密を欲せず、高尚を望まず。唯、簡易にして、讀者の會得しやすからん事を期せり。さて講述の順序は、まづ、語を解し、次に文章の大意を述べ、(語釋のみにて、おのづから、大意の聞てゆる處には、殊更に述べず)歴史に涉れる處には、まづ、事實をも説明すべし

すべての物語

○伊勢物語講義



世に名高き浦島子の話などは、物語のうちであるものなり。もと、物語とは、話説の義にして、さうく日本紀には、談の一字をも訓みたり。されば、物語といふは、平安朝特有のものにはあらざれど、或は人生の盛衰を述べ、或は脚色を設けて、人情を寫し、以て消閑の具とするに至りしは、當時をもて始とす。さてすべての物語の文体と、結構とを見るに、おほむかたは同じけれども、亦おのゝく異なる所なきにあらざり、之を分類せば、左の三種となるべし

- (一) 實事を其のまゝに記録せるもの
- (二) 虚實相半するもの
- (三) 全く虚なるもの

第一に屬せるは、榮花物語の類にて、名は物語といへども、其の實は即記録なり。歴史なり。故に古來これを雜史と稱して、物語と分つ。第二の虚實相半するものは、即、伊勢物語の類にして、大和物語、今昔物語なども亦こゝに屬すべし。第三は、竹取物語、源氏物語の類にして、全く作者の想像により、趣向を構へたる空中の樓閣なるものなり

右に云へる第一類のものは、歴史的の記録にして、第二類と、第三類とは、小説的の記録なり。故に當時の世態人情を知らんとせば、此の第二類と、第三類との物語に據らざるべからず、其の故は、小説は殊に歴史の参考となること多かれはなり。されば、物語を研究する結果は、たゞに文辭に富むのみならず、併せて當時の歴史を明らむる事を得べし。伊勢物語の如きは、殊に然とす。ただ、其の記事、敗徳亂倫の體なきにあらざれども、これやがて社會の真相をうつし出だせるものなれば、ひとより此の書

を責むべきにあらざるなり

さて物語の中にて、ふるきは竹取と伊勢となるべし。此の二書、いづれかふるきいづれか後といふこと詳ならず。文の体は、竹取は、詞のつゞき、そにはの用方、古文の格に近し。伊勢は詞少く、意を合めて、事もなきさまに書きなしたれど、遺勁にして、しかも優美なるは、老練の筆といふべし。此の他住吉、大和、今昔等の物語あれども、まづは源氏物語なるべし。言毎に意を含めて、照應の巧妙なる、文藻の富麗なること、誠に古今に其のたくひを見ざる所なり。

此の書の作者および名稱

此の事は、余なきに「伊勢物語は詞花言葉のみを事とせざる説」といふ一篇の文を草して、國文學雜誌第二十四號に掲けたる事ありき。文中かのづから作者及題號の事に涉れり。又、本書の全篇に、多少の關係あり。故に全文をかゝりて、あらかじめ、讀者に本書の大體を示さんとす

此の物語の詞短くして、趣の長きことは、はやく定家卿も、歌よまん人は、古今和歌集に次ぎて、既ふべき書なりといはれたり。されば、世人もこよなきものにめではやし、先輩の之を註釋せられしものもいと多し。されど、多くは徒に詞花言葉の雅なるを愛づるにとりまりて、深意の潜める處、また、その事實の國史を補充に足るものあるに至りては、之を看破りしものいと希なり。作者もいかに夜の餘の心地しつらん。今その深意のある所と、事實の國史を補充に足る事とを謂はんには、まづ、この物語の作者、并にその時の勢を論せざるべからず。これ余が説の杜撰ならざることを欲すればなり

○伊勢物語講義

四

さて此の書の作者の事につきては、古來、種々説あれども、まづ、清輔朝臣の袋草紙に、伊勢物語和歌二百五十首、業平朝臣所作也、偏非彼人作歌耳、古今間、歌有興書載歟、又不論自他隨便同人歌、様書刻之、若是密事令混之故歟、云々と云はれたるをばじめとして、定家卿は、其の奥書に、只いふかしのみ記して、何人の記とも定められず。平田篤胤氏(古史本辭經)は、もと業平朝臣のれもを旨ありて、自記せられし歌集にて、在五中將物語といひしものなりしを、後人の伝事も取りまじへて、かく名つけしものならんと云はれたり。其の他細川幽齋(伊勢物語關疑抄)伴信友(假字本末)富士谷御枝(北邊隨筆)加納諸平(伊勢物語論)野々口隆正(在五中將日記復古解)海量法師の諸氏その説は、同じくして、皆、業平朝臣の自記せるものならんと云へるは、實にざる事なり。るを春滿(伊勢物語童子問)眞淵(伊勢物語古意)の兩翁は、この物語の中には、業平と同時の人、またるれより後なる天曆の比の人の歌さへ入れたり。はた、二條の後の事などあるは、彼の陽成上皇は、天曆のはじめまでおはしまさんに、御母后の密事を、あらはならでも、文につくりいせんことあるべからず。この書を以て、業平の自記とするは、本を極めざるいまだしき説なりといはれたれど、はやく大鏡にも、二條の后をつれまゐらせて、業平が奈良へ行きかくれしを、堀川大臣國經卿のとりかへしに來り給ふよし見ねたり。且、時代の差違あるは、作者のあたし事を加へて、あらぬまたかきなしたるにこそあらめ。又、二條の后に通はれたることを、いみじき罪にたれもくらしへど、其の代のさきをしらぬ或にて、あらぬ強説なり。實に今の世なごてこそ、ざる事ゆらんには、いみじき事なれど、男女の道いたくみだりがはしき當時なるがうへに、入内したまはぬ凡人にてさへおはするほどのこと

なれば、何ばかりの事にかあらん。又かく密事などをほのめかし、さたかなる事をも、あらぬまたかきなしたるなごころ、物語書の體なれ。もしかゝる事だにもせすば、いかなる書をか、物語といはん。但、業平朝臣と二條の后と、密通の事あるによりて、陽成天皇は、實は業平の子なりなごといふ妄説は、年代をも考へざる僻説なること、土肥經平氏が、春淡浪話に、國史に参照して、時に辨せられたることとし

右の證を論じによりて見たらんに、業平朝臣の自記ならずといふ説は、立つまじけれど、いよく余が説を確にせんために、猶、一二の徴をあげんに、はやく藤原兼範卿の、和歌童蒙抄にも、業平が手づからかみや紙に書ける、伊勢物語の朱雀院の塗籠にありけるには云々と見え、顯昭が古今秘注にも、此の書は古今集より前なるものとしければ、業平朝臣の自記とせしこと著し。されば、信友も、古今集はこの物語をとりて載せられたるなり。そは、其の詞書、集中なべての例に似ず、いたづらなるばかり長くて、皆、此の物語に見えたる詞に、おほかた異ならざるをもて知るべしと云ひ、平田翁は、この物語をもて、平假名文の祖とせられたりき。業平朝臣のみづからかき記したるものとせば、身まかられしは、元慶四年なれば、其の近き世にもせられたりとせんにも、古今集撰はれたる頃よりは、二十餘年前の事なればなり。また、或説に、この物語は、伊勢の御の筆ならんといへり。其の説に云はく、少年十三幼書之、似家集文體、故號伊勢物語、又曰、非彼筆者、何稱伊勢乎と見えたり。されど、此の文体、女のかけるさまならず。男のしかも文に巧なる人のかけるにて、文の体いと老いたりと、眞淵翁のいはれたるが如し。且、非彼筆者何稱伊勢乎といへるは、云ふにもたらぬ事な

○伊勢物語講義

五

○伊勢物語講義

六

もなり、此の物語は、倭事物語といふ、なま／＼なることは、清輔朝臣のはやく云はれたるものぞや。又、眞字本に、村上天皇第八皇子、六條宮具平親王御撰とあるは、本居宣長翁が、玉勝間に云はれたるが如く、後人のさかしらに、かきいれたるものなるべし。但、眞字本と、假字本との優劣は、強ち本居翁の説にも従ひがたし。ろは、藤井高尚の、伊勢物語新釋に云へる如く、互によきめしきところ／＼あればなり。

さて粗云へる如く、この物語は、業平朝臣の時勢どうとまじう思ふ頃、來し方の事をも詠める歌など、心やりにみづからかきおかれし記の、筈の底なごに殘りて、世に傳はりけるを、後に事好める人のあらぬさまに作りなして、初冠より身まがれるまで、業平朝臣の事にて、業平朝臣ならず。隨にそれとわきがたく、書き僻めたるなん作り主の心しらひにて、それやがて袋草紙にいへる、倭事物語の義なりける。されば、孰れを自記のくだり、いづれを加へたる條をも、作者をわきては、當時も猶わきかたかりけん。まして、今の世にして、まゝにわきなんや。あるを、野々口隆正の復古解に、中將自記の章を撰み出でたるは、穿ち過ぎたりとやいはん。かく作者は、巧に書きひがめれば、一わたり見れば、ろの詞花言葉のみこそ雅なれ。その事實は、いとみだりかはしく、健なる人のつまはじきは、のがれざるべし。されど、源氏物語の當時のまを褒貶し、落久保物語の繼母を戒しめしなど、均しく、深き心ありて、かけるものと覺ゆ。ろの故は、三代實錄、元慶四年五月二十八日の條に、從四位上行右近衛中將兼美濃權守在原朝臣業平者、故阿保親王之子、正三位行中納言行平之弟也。阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平、中畧業平、体貌閑麗、放縱不拘、畧無才學、

善作和歌云々と見たり。此の無の字は、有の字の誤ならんと或説にいへり。實に畧無とては種ならぬ心地すれば、有の誤ならん。大日本史の傳には、畧無才學の四字を削られたり。貞觀十四年五月十七日、敕遣正五位下右馬頭在原朝臣業平、向鴻臚館、勞問渤海客、是日客徒賜宴と國史に見えたり。此の日の宴には、客人と言談贈和の遊なごもありしなるべければ、猶無の字は、有の字の誤とする方よけん。かくはかくしき人からなるを、大日本史の贊には、雖居歌仙之一、而輕薄放蕩、名檢掃地としも云はれて、古今集に載せられて、さしも惟喬親王に忠なりしてとは其の傳に載せられざるはいかにや。また、此の物語の深意のある所を知らざる過といひつべきのみ。服部南郭の在五中將の論と云ふに

夫在中將者、談達哉、其文也、不假追琢而巧爲微辭、乃託古昔鄙事、自述諧語、自出割名、嫵婉、蓋亦穢德玩世之徒、豈可引繩墨而論哉、(中畧)至如其好色、牀第不修、世固疾焉、然觀其世、宜淫是競、一時貴遊子弟、乘塙垣、望復關者、握手無罰、目眙不禁、則習尙之使然也、乃病其風俗乎可也、奚獨責在中將爲姪首哉、昔司馬相如、自作傳叙其臨卭之奔、且文辭靡麗、不爲行蔽、古之人乎、亦不足怪已、後世刻剝之流、好揚惡德、令古人無所容足、則莫取諸風雅也、和歌者流、家傳戶誦、而不問其人、可謂厚矣、(中畧)夫小野王、失志自匿也、紀氏雖微、亦傲世、不改其樂也、乃在中將之周旋、其際締交、歎曲終始如一、豈不偉哉云々

と、此の論實に云はれたり

○伊勢物語講義

七

○伊勢物語講義

八

今此の物語を以て、三代實錄大鏡裏書等の書に照しておもふに、この中將、おほやけの事にあづからしめ給はゞ、いとめでかるべきを、當時文徳帝第一の皇子惟喬親王を、儲位に定めたまはんの御心なりしに、外舅良房大臣に憚りたまひて、或は神に祈り、又は秘法を修し給ひしも、御本意を遂げたまはず。遂に染殿の后(良房の女)の腹に生れたまひし、惟仁親王を太子に立て給へり。この時、惟仁親王生れたまひて、僅に九月なりき。是れ藤氏專權のはじめにして、やがて王室の衰頽をまねく基とは成りにしなり。そもいかなる枉律日のあらざる世なりけん。かゝる未曾有のことなるへ出で來にける時なれば、志あらん人は、いかでか憤らざるべき。はた惟喬親王は、第一の皇子におはして、帝もかねて、儲君とたもほしたれば、ゆめ違ふまじきを、良房大臣の權威にたされて、お立ちたまはず。御弟の惟仁親王に越えられ給ひければ、惟喬親王は、いかに憤りたはしてまじけん。封戸をさへ、三度まで辭したまひ、貞觀十四年七月、頓に出家して、沙門となりたまへるさまは、三代實錄に見えたるが如し。此の物語の中に、惟喬親王、小野にすみたまひし時、まゐられたる條に「や、久しくさうらひて、古への事など聞えたり」また「なくく來にける」などあるを按ふに、業平朝臣も、この皇子を御位につけ奉らまほしくほしたることを明けし。然るに、當時王室といへども勢なき、政をさるものは、藤原氏の一族に外ならず。帝の御志も得とげさせ給はぬ勢なれば、朝臣、深くそひはからひの公平ならぬ事を憤りて、遂に身をあらかしたるなるべし。是れ一人の力、よく左右し得べき時勢にあらざりしが故なり。然れども、此の事、おほやけにもはゞかりあかれば、二條の後の御事によりてのみ、世をうとみしやうに書きまさらしたるは、例の作者の心しらひなりけり。又「昔男ありけり、身はさうらや

しなから、母なんみこなりける」と見わたるは、伊豆内親王(桓武天皇の皇女)の御子にて、阿保親王は御父なればなり。是れはたいかなる官位をも給はるべきに、さもあらぬは。時勢にあはざるがゆゑなりと、憤られしことを推して知るべし。又「たにはや、女をば一口にくひてけり」なをいへるは、かくばかり契りしなからひなるを、御兄達やがて昭宣公國經卿などの、いとまきびしく割し玉入るを喻へたるものにて、やがて、當時藤原氏の威權のきびしかりしことを、おもしうくほのめかしたるものとぞ聞こゆし

又、未段に至りて、「むかし男いかなりける事をおもひけるにかよめる」

おもふことはいはでうたゝにやみぬべき、われとひとしき人しなれば

と云はれたるは、實に此の書の骨髓一首の歌にあらはれつゝいふべし。凡、其の器ありて時にあはぬ人は、我有二寶劍といひ、白玉はよししらすとも、われしらはなとよみて、和漢ともに、慷慨悲憤の情は異ならぬものなりけり。彼れにては、演義小説と云ひ、こゝには物語といふ。それ作り出づる人は、身の幸なきをなげき、世を憤るあまりに、昔の全盛なりし世をしのび、今の世の中、咲く花のにはふが如く、榮ゆるを見ては、やうくうつろひなんことを思ひ、或は時めく人をあざみなどして、寓言にかけるもの多し。この書も、唯、當時の聞をはかりて、あらぬさまにかきひがめてこそあれ。藤原氏の專權を、痛く惡みてものせるものなれば、終に我にひとしき人しなればと云ふやうに、誇りに歎きせられしこそ、後の世までも、心やりとはなりつらめ。實にその世のさま、今より思ひやるだにうれたし

○伊勢物語講義

九

○伊勢物語講義

十

また、東降の事は、先輩諸氏は、三代實錄、文德實錄、公卿補任等のたしかなる國史に見えねば、取るに足らぬ作り事なりと云はれたれど、うは國史に肥みすぎたる説と云ふべし。この條にも、あらぬ事まで、書きうへられたるは論なければ、余は國史に漏れたる事の、なか／＼に、この書にのみ傳はりたること、こゝろ覺ゆれ。さるは、眞淵翁、かつて萬葉集を評して、例へば正史は笏を正しくして、朝に立てるもの、如く、萬葉は宴席にうちとけたる如きさまをあらはしたるものなれば、正史を照らして、その事を知らんには、萬葉ばかり便なるはなしと云はれたりき。故に余は、物語書もまた正史のうちを見るには、こよなきものよといひてん。さる卓識なる眞淵翁も、一向にこの物語は、あらぬことのみをものせる如く論せられたるは、いかにや。さて東降の事は、古今集にのせられたるも、この物語と同じければ、さだかなる事實とは知られたり。もとより古今集は、この物語より取りてのせられたるものなるべけれど、業平朝臣の身まがられし、元慶四年より、古今集の成れる、延喜五年までは、僅に二十余年なれば、もしあらぬ僻事ならば、其の時、勅撰の古今集に、そのまゝのせらるべうもあらず。業平朝臣の陸奥の島の八十島めぐられし趣しるせり。且、虚實相半したるものなれば、うけはりては得いふべからねど、古事談にも、業平朝臣、盜二條后將去之間、兄弟達追至、奪返之時、切業平之本鳥云々、仍生髮之程、稱見歌枕、發向關東云々と見えたるなども、何かより所のありしものならん。又續日本後記之、嘉祥三年正月丙辰朔壬戌、授無位在原朝臣業平從五位下、この時、業平朝臣は、二十五歳なり。三代實錄、貞觀四年三月七日乙亥、授正六位上、在原朝臣業平從五位上とあり。この時、三十八歳なり。文德實錄には、一所も所見なし。從五位下にぞく叙せられし人の、かへりて一等を降して、四十歳に及ぶまで、六位にてあられるは、唯に當時執政家の意にかなはざるのみならず。二條后の事などありて後は、しばらく身をはぶらかして、東國に居られるなるべし。「名にしおはゆふこととはん都鳥」の歌などは、遠き東國にありて、その鳥の名につきて、京人と思ひやれる歌なることいふまでもなし。其の他、此の物語中に、東國に流浪して、年を経ぬる證とすべきこといと多し。且、源氏物語、總角卷に、在五が日記とあるを、上田秋成（よしやあしや）は、この物語なるべしといへども、或は東降の時の日記の別にありしかも知りがたし。いづれにまれ、東降の時の日記とは、覺ゆるなり。大日本史には、古今集によりて、東降の事を、其の傳に擧げられたるは、さすがに見識ありと云ふべし

以上論ずる所によりて見れば、此の物語は、いたづらに詞花言葉の雅なるのみならず。また大に事實の取るべきものあることは、知る事を得べし。あはれ、世の物語書を繕く人々よ、其の作者の深意を究めずば、いたづらなる事のみとれもひすてん。ゆめ、このこゝろを念るべからず。此の物語の作者の深意の埋れぬるをいたむあまりに、管見をも省みず。先輩諸氏の説を取捨して、いさゝか、管見をも加へて、かくなん

伊勢物語

(初段)むかし男ありけり。うひかうぶりして、ならのみやこ、かすがの里に、しるよとして、かりにいきけり。

○伊勢物語講義

十一

(語釋) ひかし男ありけりは、冒頭なり。此の物語、凡百二十餘段ある中、おほかたは、此の冒頭の詞あり。今昔物語、宇治拾遺物語などに、毎段、「今はひかし」といふ冒頭を用ひたるに同じさまなり。さて此のひかし男とは、暗に業平朝臣をさしたるなり。○うひかうぶりしては、元服してなり。うひかうぶりととは、初冠の義にて、元服して、初めて冠を着くるをいふ。○ならのみやこは、大和の奈良京なり。闕疑抄に、ならの京に、平城天皇もればし、なり。業平は、平城の御孫、阿保親王の御子にて、奈良京にそだちし人なれば、舊跡なりといへり。○春日の里は、地名。○しるよしして、しるは知行の意。よしは由緒のこと。してはありての意なり。すなはち、春日の里に、業平の知行がありての義なり。○かりは、狩にて、鷹狩なり。

(大意) 徳川時代に、大名の子などが、おとなになりては、鷹狩しがてら、領地を廻り見る風俗のありける如く、業平が初冠して、をどこになりて、即、春日の里の領地を見んために、鷹狩しがてらきたりとたり。

其の里に、いとなまめきたる女はらからすみけり、かのをどこ、かいまみてけり、おもほえず、ふるさとに、いとものはしたなくありければ、こゝちまどひにけり。

(語釋) なまめきたる女とは、若く美しき女の意。綱那また窈窕などの義なり。○はらからは、兄弟をいふ。こゝは、女はらからなれば、姉妹の事なり。○かいまみは、もと、垣間見の義なれど、うつりては、たゞ、物の間より見ることをいふ。○おもほえずは、思ひもよらすなり。○ふるさとに、ふるさと云云は、かやらの古里に、甚、不似合の女にてありければその意なり。はしたなくは、不都合の義なれば、不似合の意味にも用ふるなり。○こゝちまどひにけりは、男の心迷ふなり。

(大意) たゞはらからすみと云ひて、親なしの姉妹なることを知らせたる文の巧なり。さて古里のさびしげなるに、親もなき姉妹に住みたらんは、まことにあはれにて、見る人の心とまるべきさまなれば、これを見たる男は、愛憐の情しきりに起りて、心も迷ひきとなり。

男きたりける、かりぎぬのすうをきりて、歌をかきてやる。其のをどこ、信夫ずりのかりぎぬをなんきたりける。

春日野のわか紫のすり衣、このぶのみだれかきりしられず
となんれひつきて、いひやりける。ついでおもころきこと、やおもひけん。

(語釋) かりぎぬは、狩衣にて、後には、官服にもなりつれど、もとは、鷹狩に着たるなり。○すうをきりては、狩衣の裾を少し切りて、うれに歌をかきつけてやりしなり。○このぶすりは、諸説あれども、臆断に、陸奥の信夫郡より、昔、すりて出だせる名物なりといへるがよき。東鑑にも、信夫毛、地摺千端なさいを事見たり。顯昭の古今秘註にも、陸奥の國信夫郡に、もじすりとして、髪をみだしたるやうにすりたるを、しのぶすりといふといへり。今、福島の名産なる信夫摺は、後世のものなるべけれど、おもふに、いにしへ此のあたりにては、衣を染むるわざをしらで、石の面の平らなるに、色よき草花をならへ置き、布をおほひて、丸き小石をもて、うへより摺りて、草花の色を布へうつし、なるべし。○春日野の歌、春日野は、大和なり。春日野の里の女なれば、彼の野にある紫草にたとへ、

また、今きたる狩衣も、紫にすりたれば、やがて、若葉のすり衣をつけたるのみにて、上の句は、全く序なり。しのぶのみだれとは、信夫摺は、其の模様のみだれてあるものゆゑに、我が心のかぎりなく、思ひ亂れたるにかけていへるなり。○おひつぎては、追續なり。すやにといふが如し。今の語に、唯今まゐらんといふ意を、追付まゐらんといふも、ことと同じかるべし。○ついで云々、ついでに、順序の意なり。をりからの順序が、風流でもしるき事なりと、女の方にも思ひしならんとなり。こゝにて、業平朝臣の侍りに行きし物語は終れり。以下の文は、作者がいふ意なり。(物語文の上にては、これを草紙地といふ)然るに、舊註には、次の源融公の歌を引ききたるを、女の返歌のこゝろにしたりは非なり。

(大意)男、その頃、賞賛せる摺狩衣を着てありしが、姉妹の女を見て、愛憐の情たへ難く、狩衣の裾を切りて、歌をかき、けて贈りしが、其の歌は、おのが今きたる摺衣によそへて、心の亂れたる事をあらはしつる、即妙の歌なりしかば、折につけて、女も風流にねもしるき事と、思ひけんとなり。みちのくのしのぶもちずりたれゆゑに、みだれうめにしわれならなくにといふ歌のこゝろはへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなんまける。

(語釋)みちのくの云々、此の歌は、古今集戀の部に出で、源融公(河原左大臣)の歌なり。さて上の歌に、しのぶのみだれといへるは、信夫摺のみだれといふ心なるよしを知らさんとて、此のうたを引き出でたるなり。大意は、上は序にて、信夫もちずりの如く、我が心の亂れしは、誰ゆゑに亂れそめしならん。我が心から亂れしにはあらず。君ゆゑであるといひて、戀人に贈りし歌なり。但

古今集には、「みだれうめにしを、みだれんとおもふ」とあり。○かくいちはやきは、かやうに、こゝろかきなり。いちはやきは、もと、逸速の意にて、かだやかならず荒ぶる意なれど、轉りては、れだやかならず、こゝろかきことにも用ふ。○みやびは、風流の義なり。○なんしける、なんは、やなどい同じ係辭けるは、結詞なり。

(大意)きのふ今日初冠したる、わかきをこの事なれば、今の世の人ならば、よろづつゝまじくて歌よみかくることもむせじを、昔人は、わかくても、かくこゝろかき風流をしけりといふ意にて、はじめに初冠して、狩にいきけりといへるに照し合はせて、見ん人の心うるや、うにたくみにおもしるく、書きたるなり。

(二段)昔をどこありけり。ならのみやこははなれ、此のみやこは、人の家まださだまらざりける時に、西のみやこは、女ありけり。

(語釋)ならのみやこは、前にいへり。○此のみやこは、平安城の事にて、すなはち、今の西京なり。抑桓武天皇の延暦三年に、奈良の京を離れて、山城の長岡に都をうつされ、同じく十三年に、又平安城にうつされたるなれば、こゝは、長岡の京をいふとも思はるれど、長岡には、僅に十年の間なれば、なほ、平安城といふ方よろしかるべし。○人の家まださだまらざりける時に云々、または、いまだなり。さていまだ家々もといふのは、ざるをいふは、都うつされて後、ほゞ無きを知らせたるなり。かく、わざと、此の京のはじめをいへるは、業平朝臣の歌を、全くあげたれど、其の人ならぬさまに、時代をたがへて、かきなしたるなり。此の物語の心づかひ、皆、しかり。平安城の始は、業平朝臣のう

まれば三十年前の事なり○西のみやて、皇城の太門を朱雀門といふ。此の朱雀門より、羅城門までの道を、朱雀大道といふ。この大道より、東の方を、東の京といひ、(左京、また、洛陽といふ)西の方を、西の京といふ。(右京、また、長安といふ)

(大意) 昔男ありき。此の頃は、奈良の京は、舊都となり、新都の平安城も、極めてはじめつ方なれば、いまだ、皇都市區のわりかたもとのはず、人家も、おぼからぬ時なりしが、西の京に、また一人の女ありけりとなり。さて其の男は、暗に業平朝臣を指せるなり

其の女、世の人はまされりけり。かたちよりは、心なんまさりたりける。

(語釋) 世の人にまされりとは、容貌と心となり。氏姓の尊くまざる義といへるは、わろし○心なんまさりたりけるは、姿も心も、世の人には立ちまさりたるが、殊に心だてよろしく、情ふかく、物のあはれを知れる女なりとなり。なんは、指し示す意の係詞にて、予といふに似て、平穩なり。けるのるはなんの結詞

(大意) こゝは、女の様子の大体をまづいひて、次につばらかに解く文の體なり。古文には、此の體おほし。今人の文にも、「何處ろこに遊びぬ」なまづいひて、あとに、其のくはしき様子をするすは、やがて此の体なり

ひどりのみにあらざりけらし。
(語釋) のみは、一ありて、二なき意をあらはす詞。こゝに、一人ばかりにもあらずとなり○けらしは「けるらし」の約下て、推し測る意の助動詞。今言に「サウナ」など譯すべし

(大意) こゝは、此の物語つくりぬしの心にて、推し測りていふ言にて、彼の女は、外にもまた、思ふ人のあるやうなどの意をあらはせるなり

うれを、かのまめ男、うちものがたらひて

(語釋) それをとは、彼の女を指す○まめ男、まめとは、信實また忠誠などの文字をよめり。こゝもそれらの字の義にて、心のおだくしからぬ男といふ。好色人の心の、おだくしき男は、かへりて女を思ふもせちならず。信實なる人ぞ、心づくしなる戀はするものなり。まじて「世の人に心も貌もまさりたる女」なれば、まめ男の、深く心をとめたるやうに、書きなしたるなり。眞淵翁などの説に、このまめ男といふは、おだくしき男の事を、反對に信實人と云へるならんと解かれたれど、わろし○うち物かたらひて、うちは添入ていふ語にて、意味なし。物かたらふとは、何事にまれ、談話することをいふ

かへりきて、いからちもひけん。時はやよひのつらたち、雨さぼふるにやりける。

(語釋) かへりきては、まめ男が、彼の女の家より歸り來てなり○いからちもひけんは、作者の詞にて、信實男の心中を、想像せる詞なり○やよひは、陰曆三月をいふ。やよひは彌生の義にて、草木のいよく生ひ茂れる月なればいふをぞ○つらたちは、「月立」の意にて、つらつても、翌月に入れるをいふ。なれば、必しも朔日(月の第一の日)の事のみならず。其の月の初旬なるといふ義に廣くいふ。こゝも然り。古註下、二月晦日の夜あひて、朔日の朝歌をつかはせるにやとらへるは、穿ち過ぎてわろし。かへりきてとらへばとて、曉にかへりて、其の日の事をせずとも、よろしからん○

そほあるは、しよぼくある義なり。春雨のよまをいふ○やりけるは、歌なり

(大意) 大体、信實男は、心の中には、たゞいかにほを戀ひしく思ひたりとも、詞下出だしては、
やくいはいぬものなるに「おきもせず」の歌をよみてやりしは、彼の女のひとりのみにもあらぬや
うに見ゆれば、彼を思ひみだれての、しわざならんを、記者の推測なり
おきもせずねもせでよるをあかしては、

春のものとてながめくらじつ

(語釋) おきもせず、ねもせでとは、物思ひ亂れて、終夜ねられぬをいふ。かゝる折のつねで、お
きてもそられぬが故に、あしてつくく物おもふまなり○春のものとては、春のつねとての意
○ながめは、今は唯眺望する意にのみいへど、古言の意は、黙然として、物おもひする事をいふ。そ
れに、こゝは、長雨をかけたなり○つは、ぬをいかに粗かなじく、其の事のしはて、止まる意を示
す詞なりを知るべし○此の歌、古今集、戀の部にあり。さて其の詞がきた「やよひのつらたはか
り、しのびに人に物らいひて後に、雨のそほありけるに、よみてつかはしける」とあり。此の詞がき
によりても、歌の意は、こゝと異ならず。たゞ、わざとはしがきをたがへて、もとのよみ人ならぬま
また紛らしたるは、例の作者の心なり。さて此の歌、かへり来て、すくをいふよりは、二三日のち
贈れりといふ方よろし、うの故は、ながめとは、前にもいへる如く、黙然として、物おもふまなれ
ばなり。直に其の日おくれりては、此の歌の詞にもかなはず

(大意) この歌の一首の意は、夜をほしれきるとも、ぬるともなく、思ひあかし、もし、明けなば、ま

ぎれて思ひ慰みやせんと、曉をまちしに、又をりから打ちくもりたる空のけしきに、春雨が入、しよ
くふれば、いと物おもひ加はりて、いかにともせんかたなし。されど、かくはれくしからぬ
は、春のならひじやと、ながめくらじつとなり

(三段)むかし男ありけり。けさうしける女のもとに、ひじきともらふものさや
るさて、

(語釋) けさうは、戀の字音なり。戀のおもひをかくることをいふ。こゝは、男の心を懸けたる
女をいふ○ひじきとは、和名抄に、鹿尾菜を比類木毛と訓めり。海藻の名なり。これは、海中の石
上に生ずるものにて、長さ二三寸ばかり、鼠尾の如くにして、蒼黒なり。表れば黒くして、味、淡泊
なるものなり。今ひじきといふ。男より、今、この物を女の許へおくることなり

おもひあらばむぐらの宿にねもしなん、

ひじきものには袖をこしつゝも

(語釋) おもひあらばは、我を思ふ心あらばなり。さてこゝを、藤井高尙の新釋には、おもひなく
ばの誤なりとて、改めたり。さて我がかく苦しく君を思ふおもひなくばとの意に解したり。其の
説あしからねど、諸本共におもひなくとある本なければ、しばらく、舊説による○むぐらは、藤にて
草名なり。荒野れよび人家の庭前などにも生ずる草なり。葉細くして長く延び、葉と共に毛あり。
葉はあかねに似て小さく、七八葉車輪の如く、一處に着きて、八九層をなすものなり。むぐらのやど
とは、草のめははてたる家の義○ねもしなんは「寝モシヤウ」なり○ひじきものとは、引き抜き物と

いふ意にて、前の鹿尾菜シメジを含めたるなり。○袖そでをしつゝもは敷き物には、袖そでをしながらも意なり
(大意) 此の歌のすべての意は、金銀珠玉を以て、飾れる家も、何かせん。妹とし居らば、八重やえむぐら茂れるいふせき小屋に、敷物なく、袖をかたしくとも、厭はじとの意なり。高尙は、初の句をおもひなくばと改めて、とて一首の意は、「けさうしても、女のつれなく、とやかく物おもひするにうんじて、つら／＼思ふには、此のくるじきれもひのなくば、君がかくつれなくて、獨、袖をかたしきつゝ、いふせきむぐらの宿にねても、堪へられんぞ、くるじきおもひのあるゆゑに、ひとりねの堪へがたきといふ意なり云々」と説きたり。其の方こそ明らかなり。たと私に改めたるなれば、たしかにそれと定めがたし。いづれにても見ん人のとるにまかす

「二條の後の、まだみかどみかどもつかうまつりたまはで、たゞうとれて、ればしける時のことなり」。

(語釋) 二條の後は、藤原長良公の第二女、御名を高子と申せり。貞觀八年十二月、清和天皇の女御となり給ひぬ。陽成天皇、貞保親王、敦子内親王などの御母に涉らせ給ふ○まだみかどにもつかうまつりたまはでは、いまだ、女御ともなり給はで、家にもられけるをりの事よとなり○たゞうとは、凡人の音便にて、いまだ無位無官におはせる時をいふ、○此の二條の后云々は、後人の側へ書きそへたるが、のちに、本文に混じたるなるべし。男女の間の、いたく亂れたる事なれば、あながちこの事のみ責むべきにあらぬは、いふも更なれど、かく二條の后云々と、きはやかに御名を出だしたるは、この物語のすべての文体にも叶はねばなり。時下、業平朝臣なる事をしらせながら、皆、むかし男ありけり」とやうに、おほめかして、かけるものをや。其の外、時代をたがへ、官位を改め、事實か、またはあらぬ事か、殆、知りがたきまでに、書きひがめたるぞ、記者の心にはありける

(四段) むかしひんがしの五條ごごうにちほきさの宮おはしましける西のたいに住む人ありけり

(語釋) ひんがしの五條は、東の五條にて、地名○おほきさといとは、大后おほきさの意。いはきの音便なり。これは、五條皇太后順子の御事なり。五條の后は、藤原冬嗣公の御女、仁明天皇の御后なり。文徳天皇には御母。清和天皇には御祖母に涉らせ給へり○おはしましけるは、御座まはけるにて、そこに御すまひ遊ばされきとなり○西のたいに住む人ありけり。西の對たいとは、皇太后のおはします御殿の、西むかひにある局やうの所をいふ。そこに住む人を。たれともいはぬこそ、此の物がたりのふりなれ。さるを、こゝは、二條の後の御幼少の頃、こゝにおはせるを指せりといふ説あれど、いかゞ

それをほいにはあらで、ゆきとふらふ人、こゝろさしふか、りけるを、む月のとるかばかりに、ほかにかくれにけり。

(語釋) それを、夫つとにて、前を承けたる代名詞。こゝは、西の對に住む婦人を指せり○ほいは、本意の字音なり。長き事にも、悪しき事にも、己がしかせんと思ひ込みたることを、本意とはいふ。さもあらぬを本意にはあらでといふなり。始より、此の女をと思ひ込みたるにはあらで、何となく、事の序に行きかよひそめて、懇にたづねとひなせするより、かたらひつきて、志の深くなれるを、ほいにはあらで云々と入るなり○ゆきとふらふ人は、往ゆき訪つづふにて、懇に尋ね訪ふことをいふ○人

は、男を指せり。こゝろざしふかりけるをば、男の志、親切なりしとなり。○ひ月は陰曆の正月をいふ。名義は、諸説あり。一説には、陸月にて、正月は、殊に人々の親睦する月なればいふ。又、一説には、生月の約にて、春陽發生の意なりと。また、一説には、元月の約にて、一年の月のはじめなればいふ。いづれかよからん。看ん人の撰にまかす。○をかはかりは、十日計なり。ばかりは、頃の意なり。○ほかにかくれにけりは、女がなり。志ふかく、親切に思ふ男をすて、隠れたるは、密事のあらはれん事をはかりてなるべし。

(文意) 彼の西の對に住める婦人の許へはじめは、わさく通ふにはあらで、事の序に行き通ひたりしが、互に知り合ふほど親しくなるが人情なり。まして、男女の間は、互に親密になりやすきものなれば、此の男も、次第々々に、志ふかく、何事にも、すべて懇切に心を盡くし居たり。さるを、如何なる事情かありけん。正月十日頃に、其の婦人は、男に一言のこと傳もなく、又、一封の書をも贈らずして、外へ移りて、姿をかくしきとなり。さばかり思ふ男をすて、隠れたるは、心あさき女のやうなれども、さにはあらず。心ある男が、かく思ひしめたる女なれば、さる薄情のものにあらじ、然るに、姿をかくしたるは、上ほを憚るべき事のありしがゆゑなりとなり。

ありどころは聞けど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、なほ、うじと思ひつゝなんありける。

(語釋) ありどころは、在處にて、隠れたる婦人のありかなり。○人のいきかよふべき所にもあらざりければは、他人の往き通ふべき所にあらずとなり。其の故は、此の女、然るべきゆかりある人の家

などに、隠れたるなるべければ、男は殊に憚りて、往くこと能はぬなり。○なほは、今言に「ヤツハリ」又「其ノ上」などを譯す。こゝは「ヤツハリ」の意なり。始、行方もしらす、隠れたる時、いとうじと思ひつるが、在處の知れたれば、喜ぶべきに、他人の往き通ふべき所にあらずれば、ヤツハリ愛しとおもひてなり。○うじは、愛の義、思ふまゝならで、心の苦しむをいふ。今言に「ヤツハリ」などをいふに當たるべし。○思ひつづは、思ひながらなり。○なんは、係詞にて、るが結詞なる事、既に前にいへり。此の思ひつゝなんありけるといふ詞にて、愛しとおもひながら、月日経たることを含めたるなり。

(文意) 女のゆくへ知られずして、愛しと思ひをりして、あり所を聞きては、よるこよなきを、いへる通はれねば、やはりうじと思ひきとなり。

又のどこのむ月に、梅の花さかりに、こづを思ひ出で、かの西のたいに、いきて、たちて見、おて見、みれど、こづに似るべくもあらず。

(語釋) 又のどこのむ月は、さきの西の對にて、女に隠し次の年の正月なり。○梅の花は、其の男の家なる庭の梅の花なり。○こぞは、去年をいふ。名義は、或説に、昨日をきつといふに通せり。又一説に、去歳の字音なるべしといふ。いづれかよからん。定めがたし。○西のたいは、西の對にて、前の婦人の住みたる所なり。○いきては、往きてなり。○たちて見、おて見は、立ちつ居つして、見るをいふ。思ひあまりて、心配のさまなり。○みれどは、見れどもなり。あまうくをきやうなれど、古文には、かゝる例多きことなり。下文にも「見かう見みれど」などもあり。同じさまなり。語勢これのために強し。味あべし。○似るべくもあらずは、如何に見ても、去年の梅花に似たりとは、思はれず

となり
(文意) 女に親しみし次の年正月、梅花の盛なる頃、せめて彼の女のありし所だに見んと思ひたちて、西の野に往きて、立ちつ居つ思ひあまりて見れども、去年の梅花の如くならず。是いかなる譯かといふに、梅花の去年に異なるにはあらざるべく、我が親しみし女のあらぬが爲なるべしとの意を含めたるなり。さて梅の花のさかりとしも、此に入らば、歌に「春や昔の春ならぬ」とある、春の文字のためにおける伏線の文なり
うぢなきて、あばらなるいたじきに、月のかたふくまでふせりて、こそを戀ひてよめる。

(語釋) うぢなきては、打ち敷きてなり。打ちは、例の添詞にて、意味なし○あばらなるいたじきあばらは荒れ頽れたるをいふ。いたじきは、板敷なり。床の畳なくして、板のみ敷きたる所をいふ。さてこゝは、荒れ頽れて、住む人の無き所なるをあらはせるなり○月のかたふくは、月の西に傾き落つるまでなり○ふせりては、臥してなり○去年を戀ひては、去年親しみし人を戀ひ慕ひて、せめてもの心やりに、歌を詠みきとなり

(文意) 同じ梅の花ながら、去年のやうに思はれぬは、我が思ふ人のあらぬがためなりと、いろゝるに思ひ亂れて、はては、打ちなきぬ。さて住む人もなく、荒れ頽れて、戸障もなき西の野に臥しながら、月の落つるまで眺めやりて、遂に一首の歌を詠みぬとなり
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身に

(語釋) や春やのやの字は、「や」は「い」を意味にて、打ち返しの詞なり。上の句は、月やむかしの月ならぬ、春やむかしの春ならぬ、月も春も皆むかしのまゝなりとなり○むかしとは、思ふ人に逢ひたりし時を指す○本の身とは、思ふ人に逢ひ見たる時の身といふことなり。さて身にしてみれば、「身ナガラ」の義にて、かく終めたる所に、昔のやうにもあらぬことよといふ意、おのづから含まれたるなり。「たして」といふ語の勢、上の句に、月も春も、昔のまゝなるにといふこと「應して、しか聞こゆるなり。味なきし」

(大意) 此の一首の意は、月やむかしの月にあらぬ、月もむかしのまゝの月なり。春やむかしの春にあらざる、春もむかしのまゝの春なり。然るに、たゞ、我が身ひとつのみは、本のむかしのまゝの身ながら、昔のやうにもあらぬ事よとなり。さて歌は、をさなく詠めどは、古人の教なり。この歌など、まことに幼きまにて、たほかたの人情にて考ふる時は、いはゆる馬鹿々々しきほどなるべし。されど、實際に、悲しくも、苦しきもある時は、かゝる事にまで、思ひ感ふが、人情の常なり。うたはざる思の切なる場合に、あふるゝものなれば、かくをさなきが、却りて、あはれに、身にしみ心地するものなり。ざる理を知らずして、論理的にことわりめきたる事そのみ詠まんとするがゆゑに、今人の歌は、なか／＼に見處なきが多きやかし

とよみて、夜のほのくぐとあくるに、なくなく、かへりにけり。
(語釋) ほのくぐは、夜の明けかゝる頃なり。仄に物の見ゆるほどになるをいふ○なくなくへ、

きつ泣きつゝの義、泣きながらなり

(文意) むかしのなごりを慕ひて、かへりかねたるに、夜が明けては、さすがに、人目をばかせる事なれば、泣きながらかへりけりとなり。あはれなるさま、想ふべし

(五段) むかし男あり。東の五條わたりに、いとこのびていきけり。みろかなる所なれば、門よりもえいらで、もらはへのふみあけたる。つらひちのくづれよりかよひけり。

(語釋) 東の五條は、前に解せり。わたりは、あたりをいふに同じ。近邊の意なり。こも、女は何人ともわからぬさまに書きひがめたるなり。○いとは「甚く」「最も」「極めて」「なごの意なり。○しのびては、隠れてなり。」「世をしのぶ」「また」「人目をしのぶ」「なごいふこれなり。○いきけりは、性きけりなり。○みそかなる所とは、密かに通ふ所といふ意なり。今言に「表はれぬ所」などいふに同じ語なり。○門よりもえいらでは、人の通行する門口より入る事はせずとなり。隠れて通ふなればなり。○わらはへのふみあけたるとは、童子等の遊戯して、踏み穿けたるなり。○つらひちは、築土の音便なり。又、中聲して、ツイチともいふ。土塙のことなり。さてむかしのつらひちは、近世の土塙の如く、かたく築きかため、瓦などをきたるものならねば、崩れ易きなり。大鏡などに、つらひの上へ、なでしこの種を蒔きて、さかりに咲き満ちたる事などあれば、上まで、たゞ、土を築きたるのみなりしなり。

(文意) 昔、一人の男ありしが、此の男、東の五條近邊に、人しれず通ひけり。因より表むきに往くべき處ならねば、門よりは入らずて、土塙の自然にくづれたる所を、童子等が遊ぶとて、たびく踏み越ゆるゆゑに、いとくづれて、道のおきたるをたよりに、此の男かよひきとなり

人しげくもあらねど、たびかさなりければ、
(語釋) 人しげくもあらねどは、内の人も、又、出入の人も、たほからねどなり。○たびかさなりければは、男の通ふ度、しばしくになりければなり

(文意) 土塙のくづれたに修復せぬのみか、童子等の踏みあくるほど衰へたる家なれば、人目まれなるはいふまでもなければ、しかし、通ふこと度々になりければとなり

あるじ、聞きつけて、其のかよひ、ちに、夜ごとに、人をすゑて、まもらせければ、彼のをとこ、いけどもえあはで、かへりけり。さてよめる
(語釋) あるじは、主人なり。原語は「有主」の義ならんといふ。○かよひちは、彼の男の通ふつらひちの崩れたる處をいふ。○人をすゑては、人を置きてなり。○いけどもは、往けどもなり。さてこのいけどもは、いけどもいけども意にて、毎夜の義を含めたる、一種の格を知るべし。○えあはでは、彼の女に逢ふことできずして、歸りきとなり

(文意) 今は主人の耳に入りて、夜ごとに、番人を置けば、男は例の如く往きたるも、まもる人あれば、あやしと思ひてかへり、又いけどもいけども、毎夜人をあきて守らせければ、いづもえ逢はで、かへりぬどの意なり

人しれぬわがかよひちの關守は

よひく／＼ごとけうちもねな／＼ん

(語釋) 人しれぬは「人にしられぬ」といふべきを約めたるなり。文章には、文字の制限なきがゆゑに、かかる詞を用ふべからざれば、歌詞には、まゝある事なり。古今集に「人しれぬおもひをつねにするがなる、ふじの山てうわが身なりけれ」などあるも、こゝと同しく、「人しれぬ」の意なり。關守は、關所を守る役人をいふことなれど、こゝは、土牆を守るものに、うつして入るなり。よひくは、宵々なり。毎宵をいふ。よひは、夜のいまだ深げぬをいふ詞なり。うちには、例の添詞。ねな／＼んは、寝よかしの意。なんは、ねがふ義なり。

(大意) 一首の意は、人にしられぬ、我が通ひぢなれば、關守のねなば、外に咎むべき人なし。此の關守は、毎宵うちも寝よかし。さらば、通ひてあはんものぞとなり。此の歌も、そななきは、心のせちなることをあらはして、なかく／＼あはれおかし。

とよみけるを聞きて、いといたうゑんじけり。あるじ、ゆるしてけり。

(語釋) いたうは、痛くの音便なり。今言に「ヒトク」また「キツウ」などいふに當たる。ゑんじは、怨の字音なり。やはら、うらむをいふ。男が「人しれぬ」の歌を詠みたる事を、娘が聞きて、父のなまけなき事を怒みたるなり。あるじ、ゆるしてけりは、娘のゑんずるに因りて、あるじも心づかしくおもひしかば、土牆の番人をやめて、通ふ事をゆるしけりとなり。

(文意) うちもねな／＼んのわひ歌を、人づてなごに、娘の聞きて、あはれ下いとほしく思ふあまのりに、關守のことを、なまけなしとち怒じたりしかば、あるじもゆるしたるなり。主へも娘も、情あ

かきまに作りなしたしたるは、此の物語の骨髄なり

二條の后のこのびて、まわりけるを、世のきてえありければ、せうとたちの、まもらせたまひけるぞぞ

(語釋) 二條の后は、前に云へり。世のきてえは、世の中への外聞なり。せうとは、兄人の音便なり。兄をいふ。二條の后の御兄たちならば、照宣公、國經卿なり。さて前にもいへるが如く、此の二條の后云々の文は、後人の書きうへたるものなり。或は、業平朝臣が、二條の后のいまだ入内し給はぬ前に通ひけるを、かく書き僻めたるものなるかも計り難し。されど、其の名を公然出だして、かゝんことは、此の作者の本意にあらぬこと、前々よりいへるが如し。

(六段) むかし男ありけり。女のむあふまじかりけるを、年をへて、よばひはたりけるを、かちうじて、女こゝろあはせて、ぬすみ出でて、いとくらきにおてゆきけり。

(語釋) 女のえあふまじかりけるとは、女の方に、ゆゑありて、此の男には、さらば違ひがたきよしなり。〇年をへては、年を歴てにて、幾年にもわたたりてなり。〇よばひは、萬葉集に、結婚をかき、露異記には、伉儷の字を訓めり。言の意は、呼より出でたらん。今世の語に、婦をよふといふも、是なり。ざるを、男女の情を通せんために、夜に隠れて、這ひわたる意にいふ事とされるは、其のわづの似つかはしきが故なり。又、此の夜延の意より轉りて、すべて、戀する人の、女のもとに往くをいふ。こゝも然り。〇けるをのぞは、今言に、かゝる義に心得べし。〇からうじては、辛の字の義なり。今言に

「ヤット」と譯す○女の心あはせてとは、始より、女も此の男をきらひて、逢はぬにはあらず。逢ひかたき事情ありて、逢はざりしが、年を歴て、通ふことの、あはれに絆されて、女も今は心を合はせたるさまなり○ぬてゆくとは率て往くなり。今言に、つれてゆくといふに同じ。暗夜は、人目を忍ぶに便宜なれば、夜にまぎれてつれて、往きぬとなり

(文意) 事情ありて、逢ひかたき女のありしが、男はよろながら、女のよきに年へて絶えず通ひて、其の召しつかふ人などによりて、とかくいひ入れき。然るに、女も此の男をきらふたはあらず。たゞ、深きゆゑありて、逢ひ難ければ、つれなく答へて、過ぎぬれど、年へていふか、いとほしくして、今は身をすてて、あひなんと女も心を定め、かくては、逢ひがたし。共に外へゆかんとて、しのひ出づるかまへして、ぬすみ出でられたりとなり

あくた川といふ河をいきければ、草のうへにたおきたりける露を、かれは、なれどとなん男にとひけるを、ゆくときは、いとほく、夜も更けければ、

(語釋) あくた川は、芥川なり。延喜式に、攝津の國、島下郡に、阿久刀神社あり。此の處の河なるべし○河をいくとは、河に沿ひて行くをいふ○草のうへにたおきたりける露とは、水のほとりは、草の露も殊にあかければ、似つかはしきなり○かれはなにやは、彼は何なりて、其の深き露の、やみ夜の星の光に、きら／＼と映するを、「白玉かなにや」と男に問ひたりとなり。さるを、下の歌に「白玉か」とある故に、詞を省きて、おのづからしか聞てゆるは、文の妙なり。すべて、古代には、歌にさへると、同じやうなる事を、はしがきにはかゝりき。又、眞淵翁は、いかなる人が露を知らざらんといはれたれを、いかゞ。こゝは、フト見たるまゝに、怪しみたる情にて、これぞ古文の常なる。櫻の花を雪か雲かと思ふも、亦、これと同じ。いかでか、こゝのみを疑ふべき○男にとひけるその下に二句ばかり脱ちたるならん。かくては、文章と、のはすと、上田秋成の、よしやあしやといふ書にさへれど、いかゞ。こゝは、男も答へんとは思ひければ、行くときは、いと遠く、夜もかけければ、いづれ心にたへもせずといふ意を含めたる文なり。此の物語は、詞少く、意を含めれば、かゝる例はおほきずかし。又、このうへ「神なり雨ふれば、たにある所とも知らず、あばらなる谷のありけるに」云々といふ文勢なり。くりかへし見て、其の文脈をさるとるべし

(文意) 芥川といふ河につきて往きしが、こゝは、水邊の事とて、川岸の草にあける露も、こゝのほとは、星の光にさへ相映じて、きら／＼と見えき。女は、フト其の露を見たると、「白玉か」といふは、ほどなりしかば、男に問ひしかど、男は、往くときはまた遠く、殊に夜もかけわたりて、いづれ

おにあるところとも知らず、かみさへいといみじうなり、雨もいたうふりければ、

(語釋) 鬼ある所とも知らず、「あばらなる倉のありける」と、つゞく文勢なり。次の詞も同じく、あばらなるといふ所へかゝれり○かみは、鳴神なり。雷をいふ○いみじうは、すべて、甚すやれたるをいふ詞なり。こゝは「キビシウ」また「ハナハダ」などの義なり○いたうは、痛くの音便なり。「トナク」の意なり。さて當時の書には、鬼の出でたる事、しば／＼とせり。三代實錄には、仁徳

三年八月十七日の夜、武徳殿の東の松原に、鬼の出で、女を食ひし事見え、其のほか、百鬼夜行などの事、諸書に見えたり。眞淵翁は、こゝも狐狸などのしわざなるべしとらはれき。されど、前の作者の傳の處にもいへるが如く、實は業平朝臣が、かくまで、苦心して、かつは、深くかたらひける。高子を、御兄たち、即、昭宣公、國經卿などが、なげなくも、制止めて、取りかへしたるを、例の作者が、書き傳へて、虚か實か、わからぬやうに作りなしたるにてもあらんか

(文意) 夜もやうやう深けわたるに、鳴神さへ甚きびしく、雨も縁をつくが如く、男はともかくも、女へ所詮ゆくべくもあらざりしかば、鬼ある所とも知らず、里はなれたるさびしきところなれども、やどりぬとなり

あばらなる倉のありけるに、女をばおくにちおしいれて、男は、弓、やなぐひをおひて、戸口は、はや夜もあけなと思ひつゝ、おたりけるに、

(語釋) あばらなる倉とは、戸などもなく、荒れ頽れたる倉をいふ。古の郷には、公の稻を納め置く倉、必ありき。それが稻を出だしては、内むなく荒れ頽れてありしなるべし。徳川時代までも、諸國の村里に、年貢米を秋の末より冬にかけて納むる倉あり。それを郷倉といひき。こゝも此の郷倉の類なるべし。○女をばおくにちおしいれて云々、此の「おしいれて」などの詞にても、荒れ頽れて戸なども無きさなる事を知らるべく、又、ほどなく鬼に喰はるべき女なれば、ものおそろしく強ねて、くらき倉の中には入りかねたるさまを知らるべし。○やなぐひは、胡録、また、弓箭の字を調ひ。言意は、矢之代やなぐひの轉ならん。矢を盛りて負ふ具なり。箭やなぐひに似て、輕租なり。十矢を挿す。其の

たちハ、細く高く、筒の如きを壺胡録と唱へ、平たきを平胡録といふ。さて大寶の律令のためには、私に兵器を貯ふる事ハ、違令なりしが、此の制やうやく衰へて、此の物語のなれる比には、諸族諸國に勢をなし、盗人も多かりしかば、都の内にてすら、遠く行くにも、夜行なをするにも、たゞ人さへ弓箭を負ひたるなり、此のこゝ、今昔物語などに多く見えたり。殊にこゝは、女を偷てみ、行くさまなれば、男も弓矢刀などを帯びたるは、時世のありさまに適へるのみならず。こゝの女勢にも適へりといふべし

(文意) 何處の村里にても、郷倉は火をさけて、殊に里はなれたる、河邊などの、いとさびしき處にあるがつねなるに、其の郷倉の稻を出だして、守人もなく、戸なども荒れくづれたるを幸に見つけ、女は恐ろしかるを、無理に奥へおし入れて、我は戸口に用意しつゝ居て、夜の明くるを待ちまじなり

はや夜もあけなと思ひつゝ、おたりけるに、鬼はや、女をばひと口にくひてけり。あなやといひけれど、神のなるさむぎにえきかきりけり。

(語釋) はや夜もあけなは、早く夜も明けよかしなり。なんは願の辭なり。○鬼はやは、鬼がせハヤの意なり。此のはやも、早く、疾くはやの義なること言ふも更なり。鬼の事は、前はには入り、さはやく鬼一口にくひたりといひて、つぎにあなやといひけれどあるは、異様なるが如くなれど、然らず。これはまづひとわたり云ひ終りて、たちかへりて、事の上はこそまかにいふ文法なり。かゝる類、文章にはいとほし。○あなやは、あなも、やも歎息の辭なり。今言下「アッヤア」と叫ぶて阿あなと

神のなるさわざは、雷鳴の音の烈しきさまにまぎれてなり○えきかきりけりは、たゞに聞かざりけりといふとは異なり。奥なる女をおぼつかなく思ひて、氣はつけたれどもその意を含めたるなり。

(文意) さらぬだに、物さびしく里はなれたる郷舎なるに、夜よ入深け、雷さへいたく響きわたしかば、男は弓やなぐひ負ひて、たけき装はしたれども、向心には恐ろしく、うさましく思ひて、はやく夜も明けよかしと思ひつゝ居たるに、鬼は、はやく、女をば、一口に食ひて、形だになし。女は定めし「アリアア」と大聲を揚げて、叫びしなるべけれど、神鳴の烈しき音にて、氣は始終つけ居しが、其の聲だに聞こえず。まことに口をしきことなりきとなり

やうやう夜もあけゆくに見れば、おてこし女など、あしすりをこして、なげどもかひなし。

(語釋) やうやうは、次第次第に、又、マンマンになど譯す、こしは「ソロソロ」なさい方、最、よくあたるべし○おてこしは、率て來したり。引きつれて來たる女はなしとなし○足すりは、左右の足をすりて、泣くといふ。すべて心の切なる時のわざにて、今の世にも、いと詞なり。殊に小兒などは、つねにこのわざをするなり。

(文意) 今まで辛苦したるかひもなく、武装して守れるせんもなく、夜あけて見れば、女の形だになし。口をしき遣らんかたなく、立ちをどり、足すりして泣きさけびしめども、今更せんかたなしとの意なり

白玉かなにぞと人のとひし時

露とこたへてけなましものを

(語釋) 白玉かなにぞと人のとひし時は、前の草の上の露を電の光に見て「かれはなにぞ」と問ひし時なり○けなましものをは、消えなんものをなり。けは消えの約言なり。露なりと答へて、我が身もろのはかなき露と共に消え失せなば、かゝるうき目は見ざりしものをと、くやみたるさまなり

(文意) この一首の意は、白玉か何ぞと人の問ひし時、いそかしくて、なにとも答もせざりしを、今思へばいとくやし。其のをり、露なりと答へて、其の露のはかなく消ゆるやうに、命きえなましものを、ながらへをりて、今かく悲しきめを見ることよとなり。思ふ人のなくなりたるかなしみには、かくはかなき事をもいひ出づるは、人情のつねなるべし、またろつまくらうつせるは、例の歌の特色なりと知るべし

「これは、二條の後のいとこの女御の御許に、つかうまつるやうにて、おたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて、おひて出でたりけるを御せうと、ほり河の太政大臣、國經の大納言、また下藤にて、内へまわり給ふ道に、いみじうなく人の在りけるを聞きつけて、とめて、とりかへして、おはしける。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいとわかうて、後のたゞにおはしけるをりのこととかや」

(語釋) いとこの女御とは、文徳天皇の女御、明子、のちに染殿后と申せる方なり。女御とは、中宮

につきたる女官をいふ。今の権典侍の如きもの〇つかうまつるは、仕へ奉るなり〇めでたきは、よ
ろしき意なり。こゝは、容貌の美麗なるをいふ〇ぬすみておひては、偷みて負ひてなり〇御せうと
は、御兄人の音便なること、前にいへり〇堀河の太政大臣は、藤原基經公なり〇下臈とは、奉公の年
尚少くて、まだ賤官なるをいふ。今の世に、賤しく召し使はるゝものをいふも、是よりうつりて、下
臈などの意となれるなるべし〇しみじうは、甚しくなり。ヒドク泣く人のあるを聞きつけて、止め
て取り返したりとなり〇いとわかうては、甚若くてなり〇后のたゞにこれにしけるとは、二條の後の
いまだ、后に立ち給はず、たゞ人にて、おはせる中の事となり〇さて此の條は、後人の書き加へたる
ものなる事、前にもいへるが如し。何となれば、此の文には、業平朝臣の歌を多くあげて、其の人の
事を作れりとは聞てゆれど、時世官位をも、その人ならずかへて、業平ならぬまに書きたがへ、其
の外にも、古人の名をあらはには擧げぬが例なればなり。かく心してかける記者の、天皇の御女の
密事をあらはし、其の御兄弟たちの名をさへ擧げて、耻づかしめ給ふべきにあらす。これ本文の意
にたがひたれば、同じ人の筆ならぬことも、更に論なし。藤井高尚の新釋には、此の條を刪りて載せ
ず。又今昔物語に、昔、業平之妾被、喰、鬼事之語を題して、此の本文の如く、鬼にくはれし事をのみ
書きたり。それらより思ひつきて、後人のかき加へたるにやあらん

(七段)むかし男ありけり。みやこにありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、尾張
のあはひの海づらをゆくに、浪のいとしろくたつを見て

(語釋) みやこにありわびては、都に有り住むてなり。わふは、志を失なひて、思ひ煩らるる事なり

5 ち。こゝも、略に業平朝臣をいふなるべし。前の傳の處にさへるが如く、業平朝臣は、惟喬親王を
立て奉らんと、終始力をつくし、かど、遂に藤原氏の權威にあられて、其の事さへとび得たりしか
は、これらの事實を略に指せるにもあるべし〇あづまは、東國をすまへし。正しくは、あづまの
國をいふべき事なり。されど、省きて、あづまのみもあるよりさへいひき。此の名は、日本政尊が、
確日嶺にて、東南を望みて、彼の橘姫の事を述べし出で、「吾妻はや」を歎き給ひしたこれり。
此の後、山東諸國を吾妻國といふと、日本紀にも見るせり。さて業平朝臣の東降のことは、古今集
にも見ゆて、たしかなる事實とは知られたり〇海づらは、海邊をいふ。つらは、すなへて物の上の平
らかなる部分をいふ詞なり。山づら、河づら、池のつらなを皆同じ、人の面をつらといふも、此の類
なるべし。さて伊勢尾張の間の海邊とは、今の桑名と、宮の驛との間の入海のはてに、道ありて、此
の比は、往來せるなるべし。又次ぎの歌は、後撰集に「あづまへまかりけるに、過ぎゆるかた戀ひし
くおほえけるほどに、河をわたるけるに、浪のたもゆるを見て」業平とあり。これをこゝには、例の
書きひがめて、かくは作りなしたるなり〇浪のいとしろくたつを見ては、磯邊をゆくに、浪の打ち
よせて、高くなつたあがるが、いと白くあがるをいふ

(文意) こゝは聞こえたるが如く、昔、男ありしが、其の男、都にては時をうしなひて、万事悉の如
くならず。よりに、東國へゆきける道すから、伊勢と、尾張との間の海邊をゆくに、浪のしろく立つ
を見て、旅中の感情を歌にあらはせりとなり

5 ち。こゝも、略に業平朝臣をいふなるべし。

うらやましくもかへる浪かな

(語釋) うらやましくとは、事のひとつなるうらへに、又、事のひとつ添ふ意下らふ詞なり。こゝはさらでも旅は過ぎにしかたの戀ひしき下、うらやましくも、浪のかへるを見て、又戀ひしきをひとつ添へたりとなり。○後撰集には、二の句「過ぎぬるかた」をあり。うらやましくもあるべし。○かへる浪とは磯邊に打ちよせたる浪の、引きてかへるをいふ。

(大意) もとやり、旅は過ぎにし方の戀ひしく覺ゆるものなるに、磯邊にたつ浪のかへるを見て、又一層都の戀ひしきを増しぬとなり。

(八段)もかじ、男ありけり。其の男、身はやうなきものに思ひなして、みやこにはをらじ、すむべきところもとめんとてゆきけり。

(語釋) やうなきハ、無益の意とも、無用の意ともいへし。みやつから、世に益なきものに思ひなしてなり。こゝらも前の傳に論じたるが如く、業平朝臣の、到底わが志の行はるべからざる世なることを憤りて、みやつから、身をおもひすてたるをいふにもあるべし。こゝの文意は、聞こえたるが如し。但、こゝハ、諸本異同あれど、今は、高尙が新釋に改めたるに依りぬ。

しなのゝ國あさまのだけに、けふりのたつを見て

(語釋) 信濃の國、淺間の嶽下、煙のたつを見てなり。さて尾張三河の北は、信濃にとなりて、木曾の三坂のほとりは見ゆる事もあるを、京人は、淺間も、其のあたりと思ひて、こゝに書きたりともいふべけれど、なほ考ふるに、此の東降の條々は、各、ことなるを、類を以て、書きつらねたりと見ゆれば、必しも、前文につけずして、こゝは淺間の嶽の見ゆるほどの所にてよめりと見るべし。

しなのなるあさまが、たけにたつ煙

をち方ひとの見やはどがめぬ

(語釋) しなのなるは、信濃にあるなり。○をちかた人とは、遠方の道ゆく旅人なり。遠近を「をちこち」なるといふも、こゝのをちと同じ。さてこゝの遠方人とは、みやつからのうへをいふなり。をちかたといふゆゑは、高山のだけの煙は、遠くより見ゆるものにて、見よがむるは、其の見つけむる時の事なればなり。○見やはどがめぬとは、打ちかへして、強く聞こゆる詞なれば、どがめまいか、いたくどがむとなり。

(大意) おもひもかけず。高山の峯より、煙のたてば、あれはいかたど、遠方人の見よがめマイモノカ、木に見よがむといふ意なり。

もとより、友とする人ひとりふたりして、もろともれいきけり

(語釋) もとよりは、はじめよりの義なり。旅の友は、途中よりつれてゆくこともあれば、はじめよりとこたわれるなり。○いきけりは、往きけりなり。其のほかは、聞こえたるが如し。

(文意) 都よりのつれ一兩人にて、同行したりとなり。

みち知れる人もなくて、まどひいきけり。

(語釋) 道の案内を知れる人もなければ、處々にて、道に迷ひながら、往ききとなり。高尙の説に「かくいへるよしは、信濃の國のあたりにゆきては、又、三河の國に至り、八、橋にて、かきつばたの

咲きたるに、富士の山を見るは、五月のつごもりなるは、都人のあづまのかたの道しらすで、まをひありきたるゆゑなりと、ことわりたけるにやありける」といへり。少し穿ち過ぎたる説なれども、おもしろくて捨てがたし。但、この説に従はば、この東降の條々は、各ことなるを書きつらねたるにはあらで、文脈相通せるものと見るべし。それも、おしからず見ん人よきを選びてよ

みかはの國、やつはこといふところにていたりぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもでたながれわかれて、木やつわたせるによりてなん、やつはことはいへる。

(語釋) やつ橋とは、大なる澤の水、左右にわかれて、數々の小川に流れたるを、田つくらん人の通はれために、木をはしにかけたるが、其のわたりに入つありけるゆゑに、おのづから、所の名どもなりけるなるべし。〇くもでとは、川の蜘蛛の手の如く、いく節にもわかれ流るゝをいふ。〇さて古今集には、「三河の國八橋といふ所にいたりて」とのみなるを、こゝには、其の橋の八つある形をよく云ひしらせたるなり。文意は明らかし

その澤のほとりの木かげにおりおて、かれいひくひけり。

(語釋) こゝに澤とあるによりて、前の蜘蛛手に流るゝ小川は、澤より落ち来る水なる事しられたり。〇木かげにありては、木影に下り居てなり。此の時、かきつばたの盛なれば、陰曆三月の末か、四月の上旬なるべく、さては、日影とすところは、やゝあつければ、涼しき陰によりて、馬より下り居たるなるべし。おもしろくも、水を飲み、かれいひを食ふに便宜なれば、木影により居たるなるべし。

し〇かれいひは、乾飯なり。和名抄に、餉をカレヒと訓めり。イを省きたるなり。餅飯を、モチヒともいふに同じ例なり。カレヒハ、今の糰なり。古代には、宿かす人なくて、旅人は、野にも山にも夜をあかしたりしなり。さる比には、飯をくはず人もなければ、乾飯を袋に入れて、携へありきしなり。さてかく旅人の不便なりしは、通用の貨幣なきがゆゑなり。その比は、米、或は布を以て、交易の媒介物としたりしなり。されば、是は奈良朝以前の風俗にて、其の以後は、錢を通貨と定めたれば、旅人も必しも食物を持ちありきとは見ゆす。續日本紀、和銅五年(元明天皇の朝)の條に、令行旅人必齎錢爲資因息重擔之勞、亦知用錢之便といふこと見ゆたり。息重擔之勞とは、かれいふを持ちありく事の勞をやめて、錢もて飯を買ふやうの事なり。さて後は、やうく錢を用ふる事となりぬれば、平安の京になりては、かれいひを旅に持ちありくやうの事はなければ、昔より言ひ馴れたるまゝに、なほこゝも、乾飯とはいへるなり。されば、こゝは今の世の如く、辨當などに入れたる飯を食ひたるなるべし。但、下賤のものは、中世以後にも、干飯を食せるよし、榮花物語などに見えたりとも、こゝは、いやしからぬ人のさまに書きたれば、なほ、まことのほしいひにはあらずと心得べきなり

うの澤に、かきつばたといふも、おもしろく咲きたり。うれを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめと、いひければ、よめる

から衣きしなれにし。まじれば

はるぐきぬるたびをこころも

(語釋) かきつばたは、燕子花なり。社若の文字をも用ふるは、「ヤブメウガ」の誤用字なりとあり。燕子花は、はなあやめに似て、や、肥大なり。花色、紫なるを常とすれども、淺紅、白等の種あり。夏の初とさかりとす。其の燕子花を見て、ある人がかきつばたといふ五文字を、句の上にて置き、族中の心を詠めといひければ、よめりとなり。文意は明らかなり。○歌の一首の意は、都になれにし妻あれば、はるぐきぬる旅を、かなしく思ふといふことなり。○から衣きしなれしとは、萬葉に、奈良の里を、から衣きならの里といひかけし如く、なれし妻あればといふた、から衣着つなれしといひかけたるなり。「きし」は、着つと、來つとを掛けたり。「つま」は、妻と被とかけたなり。「きぬる」は、來ぬると着ぬると掛けたり。つまし族をしのし。は、二つをぞと脚辭なり。「なる」「つま」「はる」などは、皆衣の縁語を以てし入るなり。五句のわかしらるる下なる字をあきて、かくなだらからよむは、まことに巧なりといふべし。

とよめりければ、みな人かれいひのうへに、涙ちとして、ほとびにけり。

(語釋) かれいひは、前に委しくいへり。○ほとびは、太ひの轉が。潤ひてふくるをいふ。史記に、膠液船解なともあり。但、このかれいひは、眞の乾飯にはあらぬを、涙のかゝりて脹るをいふは、いかゞとて、彼是とき曲けたる説もあれば、わろし。あまりに持り過ぎたりといふべし。眞の縮ならずも、かれいひといふより、涙かゝりて、潤ひふくれたりともうた書くは、文章なり。こ

れをながち、事實にあはずな説きなすは、物語書よまん眼なきなり

(文意) 誰も京の戀ひしきに、此の歌を聞き、更に堪へやらず、うしろに、涙を催しきとなり。道しれる人もなくて、旅中のかなしを、よもと思ひやふる

ゆきくして、するがの國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらんとする道は、いとくらしうほそきに、つたかつらはまげりて、ものころほそく、すらしなるめを見ることもおもふた。

(語釋) ゆきくしては、往き往きてなり。た、ゆきを重ねたるのみにて、他意ある下あらざり。○うつの山は、駿河の國、有渡郡に、和名抄に、内屋の里と見わたる處なり。○わがいらんとする道とは、我がわけいらんとする有渡の山の道をいふ。○いとくらしうほそきは、最暗くの音便なり。○つたかつらは、葛葉なり。樹または岩なごに延ぶ葛草なり。道の暗く細き上に、葛草を延び茂れりとなり。○ものころほそく、ものは添へたる詞なれど、たのづから意を強くするなり。「ものかなし」「ものよびし」などは皆同じ。○すらしは、そらしともいふ。漫の字、また、不覺の字、また、坐の字などを訓ひこしは、不覺の意にて、おもひかけぬからきめ見る意に解して足れり。高尙の新釋に、古意の説も、臆斷の説もわろしめて、すらしなるめは「ほほあるまじきめを見るを」を導なり。「を解せり。とては、すらしを語意、解せりとも覺せず。故に余はかゝりて、古意の説によれり。おほかた、すらしといふ語は、此に掲げたる如く、漫の字、不覺の字、または「故なく」などの義に解せば、誤なかるべし。

(文意) 木の茂りたるさま、道に葦草などの茂れるは、人の往來のまれなるがゆゑなり。都にをりなば、かゝる心ほそきめをも見ざるべきに、道しらぬあづまの方に來たれるゆゑに、我が身に思ひかけぬ、心ほそきめを見ることよと、心のうちに都いせしをくやしうおもひつるなり、能く味ひて其の意をさぐるべし

すぎやうさめひたり。かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば、みし人なりけり。京にその人のもとにて、文かきてつく

(語釋) すぎやうさは、修行者なり。修はシユなるを、約めてスと云ひ、者はシヤなればサとなるなり。此の山中にて、修行者に遇ひたるなり。修行者とは、佛法修行のものなり。山伏などの類なり。さて修行者のことをいへるは、「夢にも人の」といふ歌をかゝんためなり。又修行者のかゝる道には、いかでかといひ、詞つきの謹しみ、かしてまりたるさまなるを思ふに、此の行く人は、身分の輕からぬ人にて、都にあるべく、所ためありきなど、すまじき人なることを知るべし。さては、すゝなるめを見ること、思ひしも、道理なり。又、かゝる山路にて、修行者にあひたりといひて、いよく深山なることを知らせたり。文いと巧にて、一種の畫幅を見る心地せらる〇見れば、みし人なりは、道ゆく人が、修行者を見れば、かねて見しれる人なりきとなり〇ろの人は、切に思ふ人をさせるなり〇つくは、今いふことづくるなり。旅中の辛酸なる事を、いたく心に感じ、都を戀ひしく思ひ出でたる折なるに、都にて知れる修行者に遇ひたれば、一層さかく戀ひしくして、文かきて事づてたりとなり。文意はかのつから明らかなるべし

するがなるうつつの山へのうつつにも

夢にも人のあはぬなりけり

(語釋) するがなるは、駿河にあるなり。ニアをつつめてサとなるなり〇うつつの山へのハ、今、越ゆる山をたゞちに序にねけるなり〇一首の意は、かゝる道なれば、したひ來まざるで、うつつにあひたまはぬは、ことわりなれど、それがしを思ひ給はど、遙かなる道にても、心はかよふものなれば、夢には遇ひ給ふべき事なるに、更に此方を思ひ給はぬゆゑに、夢にも君のあはぬなりけり。つれなしと恨みをいひやりたるなり。すべて、人を夢に見れば、其の人の思ふ心の通ひ來て、見ゆるよしに昔よりいふ事なり。古今集、戀の歌に、「夢にだにあふことかたくなりゆくは、我やいをねぬ人やはする」とあるを見るべし。人が念るれば、心の通ひこぬゆゑに、此方の夢に見ざるよしなり。されば、「人のあはぬなりけり」と。此方のどかにして、恨みをいひやるなり。さて此の歌は、古今六帖に「音にきくうつつの山へのうつつにも、夢にも見ぬに人の戀ひしき」とある歌を、「一二の句は、まうけて、たゞ序にいひたるを、此の文には、うつつの山路の有様を、詞に書きて、さて其の所にてよめる歌をしたれば、上は今越ゆる山のありさまをいひて、即、序をして、下の意をいひくだせる體となりぬ。この解は新釋によれり

ふじの山を見れば、さつきさきのうつつもりた、雪いとしろふふれり

(語釋) ふじの山は、駿河の富士山なり〇さつきさきのうつつもりは、五月の下旬の意なり。つこもりは、月陰にて、必しも晦のこもならぬよしは、前にいへり〇此の處、新釋の辨、まことによし。其の

大要に「はく、てて歌は」かのこまだらに「を」をゆるて、はじの詞には、雪をゆるて「て」をゆるて、昔より人の不審に思ふ事なり。今、これを説き明らかめん。むかしは、歌に「こまかたよめるは、はじの詞には、ねほらかにかけり。三代集の歌の詞書など、昔、ちやうなり。こま歌に、「かのこまだらに」と、こまかたに「ゆるゆる」はじの詞に、しるふとねほらかに「へり。歌を合はせ見てしるふとはあれど、くはしくいはず、かのこまだらなりと知られて、おもしるきなり。又、いさゝか詞は、五月のつゝもりたをいさ詞にかけ、甚しくいへるなり。」つゝもりた「は、」つゝもりなるに「の意なり。たをいへば、俗語に、寒中に「マツバタカ」にて「いさ」を知し。此の「寒中」に「は」寒中なるに「いさ」を意にて、寒中にはだかほめづらければ、寒中といふ語にかけ、標を真はだか、果ぞ加へて甚しくいさことを同じことなり。さて又三河にて、かきつばたの花盛りとあれば、三月の下旬に、四月の中旬までなるべきに、五月の下旬に、富士の山本なるは、道しれる人もなく、まごひありき、こまかして、住み所を求めて、まごこほりたるかゆるなるべし云々と、なほ日圓のあまらたかかりたることは、古意に、委しく辨あり

かこのこまだらに雪のふるらん

時しらぬは、冬は雪あり、夏は降らぬが、當然のことなるに、其の時をしらぬをいさ義なり。五月の下旬に、なほ、雪あれば、かくいさなり○かこのねは、富士の峯の意なり○かのこまだらは、もと、鹿の子の毛の斑なるをいさ。それよりうつりては、すべて、むら／＼白きをいさこといさ

れるなり。さて「マツラ」といふ語は、曼陀羅にて、梵語なり。雑色の義なりといさ。されば、其のまとは、梵語なれど、ふるくより國語のやうに用ひ來たれるなり。かゝる例、古來おほし。例へば、「ナラ」(寺)はもと朝鮮語なれど、おほかたは、固有の國語と思ふべし、これらも同じ例なり○一首の意は、時しらぬ山といさは、富士の峰のこと。此の五月下旬を、何時とおもひてか、かやうに、雪のふるならんといさこゝろなり

其の山は、こゝれたとへば、ひえの山をはたちばかりかたねあげたらんほどして、なりは、こほじりのやうになんありける。

(語釋) こゝれたとへばとは、都にたとへばの意なり。「其の山は」と書き出でたるは、記者の詞にて、其の記者は、京人なり○はたちばかりは、二十ばかりなり○ほとして、今言に「マツキニテ」をを譯すべし。高さしてなさいを意味なり。かゝるねめは、高さをいさ詞なればなり。古意には、比叡山に似て、大なるよしに説かれたれど、いかゞ。さらば、はたちばかり、あはせたらんほとしてなとあるべきなり○なりは、形の義なり○しほじりは、諸説あれど、天野信景(尾張人)が「塵尻」といふ書に、「歌人しほじりを秘とす。我海濱に遊びて、塵籠を見しに、海民塵をやくに、塵邊に砂をまつめて、堆をなし、畦をなす、潮水來たりて、砂畦をひたす、所によりては、潮を汲みて、ひたすなり。日々にかくして、後に砂を積み、山の様を作りて、日にさらす、是をしほじりといへり。實に富士の形に似たり。歌客京に居て、海邊のことをうとく、時ちりて、知れる人なくなれるなり、云々」としるせり。本居宣長翁、この説を評して、此に「へるやう、少し違へるたやとおほしければ、しほじりと

いふ物は、これなり。かのれも、鹽やく漬を所々見した、砂を積みあげて、塚の如くしたる物、いへつともなくありて、まことに、富士の山をたどりあへき形したるものなり。古意には、異字本下、「なりは」を鳴者とかけると取りて、彼の山の鳴澤の鳴る音として、しほじりを、難波の川尻のことなりと云はれたれど、いとく信じがたし。川尻なくば、川じりとこそいふべけれ。しかでか、しほじりとはいはん。されば、川尻をしかいへる例もなく、こはりもたかへることなり。其の上、川尻は、しほじりともいへく、鳴る物にはあらざるを云々といはれたり。又、橘守部は、昔、京の河原院にて、潮を汲ましめ給ひし事は、いとも名高かりつれば、當時、京の人も、しほじりの形をあまねく見しつらん。故に比叡の山と、六條河原の河原院のしほじりとをとり合はせて、こゝにいとははかけるなりけり。古今集雑下、河原の左大臣の君の、身まかりて後、彼の家にまかりてありたるに、しほがまといふ所のいふまをつくれりけるを見てよめり。貫之「君まをけかりたえにししほがまの、浦さびしくも見えわたるか那」であり。さて顯昭の説に、池を掘り、水をたへて、潮を毎日三十石つゝみて、海漁の魚具等をすまじめたり。陸奥の鹽籠の浦をうつして、海人のしほやく屋に、烟をたしせて、もてあそばれたるなりとあり。猶、この事、菅家文章、本朝文粹、源順、河原院賦などにも委しく見えたり云々といへり。以上の諸説によれば、しほじりといふもの形も明らかになり、また此の條の文意も、あつから、明らかなるべし。

猶、ゆきくつて、むぎの國と、しほじりの國との中間に、いと大なる河あり。これをすみだ川といふ。

(語釋) むぎの國は、武藏の國なり。しほじりとは、下總なり。大なる川を書けること、尤もさしる。其の故は、此の川を渡りては、いとく、京は遠くなるべしと思へる意を含めたるなり。京の人のかゝる東國に来て、なほ、此の川をわたりて、知らぬ方へゆかんとする心、おもひやるべし。○すみだ川のあり處につきて、又、諸説あり。まづ、古意にすみだ川は、已に古今集にしかあれば、武藏と下總との間なりとのみ、我も人もおもへり。然るに、更科の日記に、下つちの國と、むぎの國にて、あつる川といふ、かゝみの瀬まつちの津にまかりて、(中畧)野山岳をわくるとより外なく、むぎと相摸の中に居て、あつた川といふ。在五中將のいふこととはんとよみけるわたりなり。中將の集には、角田川とあり。舟にてはたりぬれば、相摸の國にならぬ云々といへり。これによりて思ふに、もとは、相摸の國と、武藏とのあはひなる、あつた川を云ひつらんを、後人、古今集の詞書によりて、むぎと、下總のあはひとは、改めつるなり。此の文にむぎと、しほじりといふもの云々をあらんには、しかで、更科日記にしか書かん。此の歴る所々のついでに依るに、むぎといは年歴たるやうに書けるにも、日記の如くならんと覺ゆといへり。右の古意の説を、齊藤彦麻呂が片廂に駁して、此の川の名、他國の名所を江戸へ附會したるなりといふは、大なる僻説なり。萬葉集にある角田川は、絶伊の國なり。六帖にあるすみだ川は、出羽の國なり。古今集で、伊勢物語なるは、武藏の國と、下總の國との界なり。すみだ川に限らず、國々に同じ地名あまたあれば、とかくいふべきであらざる。更科日記に、ただかならぬ記しよりなるは、委しく知らずして、書きたるゆゑなり。さてこの武藏と、下總との界なる川を、隅田川とも、須田川ともいふは、もとすみだなるを、

便にて、スシメといひ、又、零きて、スダと入るにて、同じ所なり。たどへば、やむことなきを、骨便にて、やんごとなきと云ひ、又、零きて、やんごとなきといふなどと同じ意なり云々といへり。彦麩の説よりし

その河のほとりにもれぬて思ひやれば、かぎりなくとほくもきけけるかなと、わびあへるに、

(語釋) 河のほとりにむれぬて云々、長途のならひ、友だちもあそびまてはなれて、性くものなれど、川のほとりなるとしては、わたし船に同じく乗らんとて、まぢあはせて、一むれにたるを、むれぬてとはいひしなるべし。むれぬては、群居^{ぐんぐ}ての義なり。能く心をつけてかける文なり○思ひやるとは、都のかたをなり。道をゆくほどは、まぎれて居るれを、しばし休みては、つくづくと故郷のとおもひ出づるなり○わびあへるとは、かぎりなく遠く来て、もの心ほそく、故郷の戀ひしくてもせんかたなき事など、いろくの悲しきすぢをいひあへるよしなり。さてかく人々口々に、かなし、つらしなむわびさといふ間に、時うつりて、わたし守がまぢあはれたるさまなり。極めてたまかなるところにまで、意を用ひて、かける文なることよく味あべし

わたし守はや船にのれ、日もくれなんといふに、のりてわたらんすとす。

(語釋) わたし守とは、渡を守る人といふ。それよりうつりて、船頭をいふ。こゝは其のうつりたる方なり。さて船頭が、此の人々に向ひて、いへるなれば、「船にのり給へ日もくれ侍りなん」などいひしなるべし。それを、こゝは、記者みづから道ゆく人の如くに記したれば、船頭の語をわけて、書きたるなり。上なる修行者の詞は、いひたるまゝに、かしてまうたるまにかけ、此の都人は、貴人なることを知らせ、こゝなるは、船頭の詞を、貴人みづから書くよしたにして、記したり。自他自在にして、語明らかなるは、筆の妙といふべし

みな人もわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、しろうき鳥の、はじとあじとかき、鴨のおほきとなる。水のうへにあそびつゝ、しをくぞ。

(語釋) 新釋に、ははく、渡邊重豊の云。「京におもふ人なきにしもあらず」とかけるこゝろは、此の段のはじめに「入る如く、」身をやうなきものに思ひなして、都にはそらじ、すむべき所も定めん」とて、ゆきける身なれば、京にはだしなどはなきさまに見ゆれど、京にたもふ人なきにしもあらずといふ意なりといへり。實にさやうなるべし。此の重豊といふ人は、みぢの口の酒折の宮のみや人にて、はやうより、い下し入書をひどり能くよみけるを、近き年比は高尙に従ひて、もの學ぶ人になり云々」と、此の説まことによし○はじとあじとは、鴨と足となり○鴨は、夏秋、田または澤なごに居る鳥なり。形、水鶏に似て小さく、背長く、頭より翼まで、茶色なり。背は灰黒にして、小き白斑あり。胸と腹としろし。これ鴨の通常なれど、色も形も多少かはれるもあり○しをくぞは、魚を食ふなり。ウチは、古くイナをいひき。此の物語は、しつこも、しをくぞのみかけり。當時のこぞばを、そのまゝに、記せるにやあらん

京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらす。わたし守にとひければ、これなん、み

やこしりしをいふさきなり。

(語釋) これなんといふ詞は、目をつくべし。わたし守が、たゞに都鳥とは答へずして、これなんといへるは、都の人々なれば、都鳥は知りておはせんものを、御存知なきにやといふ意、おのづから含まりたるなり。さて都鳥の事は、説々ありて、一定せず。今、その大要を挙げんに、拾穂抄(北村季吟(古意)加茂真淵(臆斷)僧契沖)などには、皆、都鳥を鷹と定めたり。又、武藏志料にも、都鳥は、古、まぐさぐさの説あれども、白鷗なることを疑なし。京都の人は、海に遠くして、正しく此の鳥を見ずして、只、物にあらざり、人傳下のみ聞けば、それかこれかといふ人あれども、此の白鷗、まことに足と嘴とは赤くして、體は白く、いつくしき鳥なれば、鷹のさかひにめぐらなければ何人か都鳥とは名づけしなるべし云々とあり。高田與清の説に、都鳥の説あまたあれど、鷹といふが、千古不易の確論なるべし。うは鷹にも種類おほくて、形もやゝ別あり。小野蘭山が、本草啓蒙(四十三)下、鷹を鏡前にては子ヨドリ、鏡後にては子ヨサキ、上總にてはウミチヨ、武藏の本牧にてはハマチヨといふ由りあり。これ鳴く聲の猫に似たるがゆゑなり。源氏、若菜の下に「猫ねらう」といふうらたげになければとあり。今、打ち聞くには、「たやうく」となくが如し。鷹も「ミヤク」となく聲の、チヤクとも「ニヤウク」とも通ひて聞かえて、猫の聲にいと近ければ、某猫といふ名をもよひしなり。さて都鳥のミヤは、聲下よりておほせ、ヨドリはヨノコトヲミサユトナなどの小鳥に同じく、大鳥に對し稱なり云々とあり。又鷹にあらざりといふ説は、藤井高尙の新釋に、今は都鳥といへば、鷹の事を定まりたる如くなれど、今も國下よりて、都鳥といふは、鷹とは異なる鳥といふよして、都鳥考

序に、佐渡にて、土人の都鳥といふは、鷹にあらざりし、鴨齋のいへる。又、衣川長秋(宣長翁門人)といふ人は、出雲の大社にまうでし道の記、田鏡の日記といふに、日野川にて、さつそ射たりとて、都鳥をもて歸れり。古今集に、白き鳥の嘴を足とあかき、河のほとりにあらひけりとあり。今見るに、白き鳥とあれども、かしらも、羽のうへとは黒くて、羽の裏、背腹白なり。白きといはれしは、漕子の舟にたどろぎなきてして、飛びしとき、羽の裏、背腹の白きを見て、いはれしなるべし。嘴は紅、足は濃紫の色なり。(中略)嘴と足をつけながら、故郷の人に示さんとして、皮をはがせておきつ。味も小鴨の如しといへり。是等によりて思へば、都鳥は、一むきに鷹をも定めがたし云々とあり。これらはいづれをも定めがたき事なれば、見ん人、よきを撰ぶべし

名にしおはらしこととはん都鳥なり

わがおもふ人はありやなしや

(語釋) 名にしおはらし、其の物を名にたはひてあるをいふ。名高き意に用ふるは、俗なり。此の鳥の名に負ひたる如くならば、都の事をも知りなん。いさや、我がおほつかなく思ふ消息を問はんと意なり。〇〇〇〇〇〇こととはんは、いさやのいはんとて、俗語に「いさや」のまじりたるなり。いさや、いさや、此の詞は、高尙の説に、わがおもふ人はありやなしやといふなれば、尋ね問ふ意は、したためや、あまた聞かえ、師(宣長翁)古今集遠鏡にも、コレヤモノトハウと譯されたり、それはあやまりなり。古の歌文には、問ふこととをいへる事は、いさやといふもあつて、よろせすば、問ふこと

思ひもやまらぬべし云々と入り。此の説よりし〇ありやなしやは、いきて世にありや、なしやの意なり。かぎりもなく遠きもつまの國に下りて、何事も心ほろく、なにかつけても、故郷をおもひ出つるをりなるに、都鳥といふ名なれば、殊に都のことを思ひたてして、我がおもふ人の、安否を尋ね問ひたしとの意なり。人情さもあるべし

(大意) 都といふを名に負ひたる鳥ならば、定めて、都の事を知るならん。いふものはんといひかけて、さてもものいふは、我が思ふ人は、無事なるか、否かといふことなりと、未だこゝろたむる歌なり。都鳥は、必しも、都の事を知れりとはあらねど、かくはかなくいふは、例の古歌のつねにて、未だ人情にも近く覺ゆるなり

とよめりければ、船こづりて、なきにけり。

(語釋) こづりては、皆なり。擧の字をよむ。そこにある船中の人、皆、ことごとくの義なり。其の他は、語釋も、文意も明らかなるべし

(九段)むかし、男、むさしの國までまどひありきけり。さて其の國にある女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人にと心つけたりける。父はなほ人にて、は、なん藤原なりける。さてなんある人にとおもひける。

(語釋) むさしは、武藏なり〇よばひは、よびを延べたる言にて、もと呼の義なり。それよりうつ

りて、男が女の許に通ふ意に用ひたること、前に委しくいへり〇こと人とは、異人にて、此の都人ならぬ他人をいふ〇あはせんは、アアヒセンなり。嫁せしめんとの意なり〇あてなる人とは、上品なる人の意なり。あては、上品、また、貴人などいふ言の古言なり〇むつけたりけるとは、此の都人に心をつけて、娘を此の人に嫁せしめんと思ひきとなり〇なほ人とは、なみくの人にて、種姓たよとからぬをいふ〇藤原なりける、當時藤原氏の專權なる世なりしかは、極めて貴姓なるよしといへるなり。されば、母は都の人の上品なるにとおもふよしなり〇さてなんは、うれでなんの意にて、そのゆゑに、うれがためになどの義なり〇あてなる人とは、此の都人をさせるなり

(文意) 例の男、處々さまよひて、ついに武藏の國まで行きぬ。其の國にて久しく滞在せしかば、ある女の許へ通ひぬ。しかるに、其の女の父の意中には、住所も定めず、まどひありく人なるを嫁ひて、田舎人はかへりて、田舎人こそ婿にもよけれとて、合はせざりけり。されど、その母は、上品なるを好む性質にて、其の土地の田舎人よりは、此の都人にと心をつけたりき。其のゆゑは、父は、氏姓たよとからぬ人なれど、母はよしある藤原の氏人なりしかば、これのつから、其の意もかはりて、かくありしなるべしとなり

此のむこがねによみて、おこせたりける。すむところなん、いるまの郡、みよしの、里なりける。

(語釋) むこがねとは、かねて婿に取らんと思ふ人をいふ。坊かね、后かねなどいふも、是に同じ。拾穂抄、臆断などに、かねは鞆の器量なりといへるは、いとつたなし〇これこそは、送り來たすなり。

其の女の母が詠みて、此の都人の處へ送りこせるなり○すむ所なん云々、前には、たゞ、武蔵の國と
のみあげたるを、歌にみよし野のといはんため、かくことわりたるなり○いるまは、入關の都を
り。萬葉には、イリマとあれど、和名抄には、イヌマとよめり
みよしの、田のもの雁もひたぶるに

君がかたにぞよるとなくなる

(語釋) 田のものは、田面にて、田の上をいふ○ひたぶるは、ひたすらをいふ○も同じへ、一向にあり。
其の方にのみ向くをいふ○下の句は、君が方によるといふことより、鳴くなるをいふ義なり

(大意) 一首のこゝろは、田の面の雁も、一向に君が方に心をよせて鳴くを、我もそれと同じ義
りといへるなり。則、かりを借りて、我が心と、娘の心とのよれるをあらわせるなり。その下に
はは。母がみづからの事をこめたるなり
むてかねかへし

(語釋) むてかねは、則、都人なり○かへしは、返歌なり
わがかたによると鳴くなるみよしの、

田の面のかりをいつかわすれん

(語釋) いつかわすれん、わすることばあらじといふ義なり。母が娘を雁になすらして、いふよ
こしたるゆゑ、かへしにも、娘を雁に見なして、ゆゑ、末かけて、わすれぬといひやりたるなり。
此の歌は、おほかた、前の歌にて、語釋は明らかなり

(大意) 一首のこゝろは、我が方下よるといふことより、鳴くなる、田の面の雁なれば、われもかた
く思ひかはして、何時までも忘れじとなり

となん、ひとの國にてもかゝることは、たねすぞありける

(語釋) ひとの國とは、他人の國の意にて、都よりほかの他國をいふ○かゝることとは、女へ歌を
贈答せるなどの、好色がましきことといふ○たねすぞありけるとは、京にて、放縱なりしが、辛苦し
く、あつまの國にたまひたれど、なほ、好色の事は、たまらざりきとなり

(文意) 都にてはさらなり。他國へたまよか聞にも、かく女に歌を贈るやうの好色めきたること
は、絶えずあらざりきとなり。下の條々に、其の絶えざりしを明らかにし

(十段)むかし男あつまへ行きけるに、友だち、道よりいひをこせける。
わするなよほどは雲わになりぬとも

空ゆく月のめくりあふまで

(語釋) わするは、忘るること勿れの意なり○ほどとは、道のほどにて、里程をいふ○雲わにな
りぬともとは、遠くなりぬとももの意なり。其のゆゑは、遠く隔ちたる處を見れば、雲は下に居る如
く見ゆるものなればなり。其の空ゆく雲の下に居る如く見ゆるまでに、遠くへたつとももの義なり
○空ゆく月の云々は、月は大空をめぐりては、又同じ所へめぐり出づるものなれば、空ゆく月の如
く、同じ都にめぐりあふまでといふ意なり。此の歌は、一首の意も、おのづから、明らかし。さて拾
遺集に、橘の直幹が、人の娘にしのひて、物いひ侍りける比、とほき所にまかり侍るとて、此の女の

もと下、いひつかはしけるをありて、此の歌は、直幹の歌なるを、こゝには、はしがきをかへて、一段とはしたるなり。これ例の作者の、あらぬさまに書きひかめんとせる一端をいふべし

(十一段)むかし男ありけり、人のむすめをぬすみて、むさし野へおてゆくほどに、ぬす人なりければ、國の守にからめられにけり。

(語釋) むさしのは、武藏野なり。○おてゆくは、率て往くにて、つれてゆくなり。○國のかみとは、國守をいふ。國守は、其の國、萬般の事を掌り、非違をも檢察すべきものなれば、人衆を出だして、追ひてからめたるなり。こゝは、まづ、男のうへを一わたりいひをはりて、更に其のくはしきやうを、かける文法なり。既に前にもこの例あり。今人もはじめて、某處に遊びぬなをいひて、更に後下、その遊びたるさまをかくことあり。同じ文法なり

(文意) 例の男、他人の娘を盗み出で、里遠く人なきところをしのひはしらんとて、武藏野へつれゆきしが、國守にもれて、つひにからめられきとなり

女をば、草むらの中にかくしおきて、にげにけり。

(語釋) これは、女の上をいはんために、たちかへりて、男のいまだからめられぬはじめよりいなり。さてにげたれど、はやくからめられけりとは、上文にて、たのづから、明らかなり
みちくる人、この野は、ぬす人あなりとて、火つけんとすれば、女むびて、

(語釋) 道くる人は、道のある處を追ひくる人なり。○あなりは、あるなりの意。○此の處の解、新釋の説よろし。其の大要にいはいはく、ぬす人あなりといふは、こゝに來たれる人は、男の他所にてぬ

らめられたるは知らずして、此の野にかくれてありと思ひてその詞なり。さるを、古意に、心得かねて、大様をいへるものなりといはれしは、違へり。そもく、國の守の、人衆あまた出だして、ぬす人を追ふには、手わけといふこととして、此方、彼方の道をおひゆくべければ、こゝの草むらの中に女をかくしおきて、逃げたる男の、彼方の道にて、からめられたるなり。さるからに、此の道を追ひくる人は、からめられたる事を知らず、尋ねてもぬすびとの見えねば、草むらの中にかくれてあらん、草をやきなば、あらはれつべし。出でなば、からめんとて、火をつけんとするなり云々と○女むびてとは、かくれしのひはてんとせよといふれども、火をつけて、草をやかれては、かくれておられねば、せんかたつきてといふ意なり。さて歌をうたへるなり。むびとは、思ひ煩ふことなるよし、前に委しくいへり、前に引ける新釋の説にて、文意も、明瞭なるべし

むさし野はけふはなやきうわか草の

つまもこもれりわれもこもれり

(語釋) なやきは、莫燒にて、燒くこと勿れの意なり。○わか草は、つまの枕詞なり。○つまもこもれり云々は、夫も我も草むらの中にかくれこもりをれば、今日は燒くこと勿れとあつらひを言なり。さて男は逃げたれど、女の心にては、男も此の近邊に隠れをらんと思ひてなり。さてつまは、今、男より女をのみいふ言となれしを、古は、夫婦、互に通はしむたること、更に論なし。又、此の歌のはじめ、五文字は、春日野はとありて、古今集にては、野邊の歌なるを、むさし野をかへたるは、例の記者の巧なるなり。この一首の意も、あつらひか明らかし

とよむを聞きて、女をばとりて。

(語釋) とよむを聞きては、右のむさし野の歌を女の歌せるを、追手の人が聞きてなり。古は歌をよみては、聲あげて謡ひしものゆゑに、人の聞くなり○とりては、捕へてなり
ともれぬていにけり

(語釋) 此の處、語を省きて、簡潔にかきなせり。「男は見ゆす、哥よむを聞きて、女をば捕へたる所へ、他所にて、男をからめたる人も來あひて、さてこゝより、男女共につれていなき」といふことなり。能く文意を味ひて、此の意をさるべし

十二段(むかし、むさしなる男、京なる女のもとに、きてゆればはづかし。きてえねばくることかきて)

(語釋) 女のもとに云々は、男より、京なる女のもとへ遣はしたる文の中の、主なる詞をとり出で、いふことか書けるなり○聞くゆればはづかしとは、あづまたて、又、女を得たる事をほのめかして、いふことか書けるなり○聞くえねばくることとは、京の女をば、はじめより打すをけて、かたらひける中なれば、はづかしとて、秘しかかはんは、心のへたてあるやうにて、くることいふ意なり。此の文段、まこと下、おもしるべきかきまなり

うはがきて、むさしあぶみとかきて、おこせてのち、おもせずなりれたれば、みやこより女

(語釋) うはがき、上書なり。封表にたり○むさしあぶみとは、武藏より書くべきを、そなたのよみかけてれあぶみいふ心をこめて、むさし鎧を、おもしるくかけるなり。武藏鎧とは、昔、この國より出だせる鎧、名物なりしなるべし。此の國には、むかし、高麗人を多くおかれしなれば、さるものらが作り初めたる高麗やうの鎧をば、後までも出だせるか、一つの名稱となりしなるべし○おもせずなりければとは、京と田舎との文のかよひ、昔は今の世のやうにたやすからねば、おもひながら、久しく音信することを得ざりしなるべし

むさしあぶみとすがにかけてたのむには
とはぬもつらとあぶみとつるべし

(語釋) とすがは、シカシナガラの意なること、前に委しくいへり○かけてたのむとは、鎧は馬の左右の腹にかくるものゆゑに、かけてたのむといはん料の冠詞なり。とすがにといふ詞を、中に隔てたるは、一つの格にて、例おほし○つらとあぶみは、厭ふ意なり。今言もほゝ同じ

(大意) 一首のこゝろは、都とあぶまを隔たりて、久しくわかれ居り、又、他の女を契り給ふやうすなれど、以前またなく睦みあひしことを思へば、とすがに付けて頼みにするには、絶えて音信したまはぬもつらし。又、とひ給ふにつけては、他の女にかよひ給ふよきを聞けば、その事のいとはなれもするよといふ意なり。彼の男より、聞てゆればはづかし、きてえねばくることいひやりつるをうけて、恨みもはてず頼みもやらぬとまの答なり

とあるを見てなん、たへがたきこゝちける。

(語釋) 男、京の女よりの文の中、此の歌のあるを見て、さぞ女のみほろくおもふらんと、思ひやられて、悲しみの堪へがたき心持すとなり

さへばらふとはねばうらむおぼしめさむ

かゝるをりにや人はしねらん

(語釋) としめさむは、問はばうらむをいふなり○おぼはねばうらむは、つらと恨むなり○おぼしめさむ、こゝは、何れ意あるにあらざ○かゝるをりにや、カヤウナル時にや、人は死ぬならんとなり

(大意) とひて隔なく、心をうちあへれば、うらむをいひ、又、おぼはねば、つらと恨む、ほかにいかにせんすへなし。人の死ぬるといふは、かゝる時にやあらんといふ意なり

十三段(むかし、男、みちの國にすゝろにゆきたりけり。そこなる女、京の人はめづらかにやをほにけん。せちたれもへる心なんありける。さてかの女、

(語釋) みちの國は、陸奥の國にて、あるは、ミチノオクノクニといひしを、此の頃は、省きてかくもいひきを見ゆ○すゝろに云々は、何故ともなく、覺せず往き到りけりとなり。すゝろの語釋は前に委しくいへり○うらむなる女は、陸奥の女なり○せちたれは、切になり。心に深くなり。此の外は、語釋も、文意も聞てえたるか如し

なかくくりにひにしなすは桑子にぞ

なるべかりける玉のをばかり

(語釋) なかくくは、例の却りての意なり○しなすは、死なんよりの意なり○桑子は、麗をいふ。麗は、雌雄まゆの中にももるものなれば、うれを羨みて、いへるなり○玉の緒ばかり、玉の緒は、魂の緒の義なり。緒とは、絶ゆるに寄せたる言なるべし。さて玉のそばかりをうらむは、暫時、暫しの間なをいはんが如し。玉のをは、命をいふ言なるべし。玉のその短きといふが常なれば、うれより轉りて、暫時といふ意にも用ひたるものなるべし。さてかひこは、命をいふかゝるも、雌雄うちきり深く、一つまゆの中にももるものなれば、羨みたるなり。此の歌は、萬葉集に「なかくくりに人とおらすは桑子にぞ、ならましものを玉のをばかり」とあるを、少しかへて、例の作者の構へたるなり

(大意) 一首の意は、れほかた聞ておたるが如く、なまじひに、戀に死なんよりは、イッソなひこたふなるべかりける。たとひ、命はしばしの間より生きざるものたるせよと、深く男に送ひがたきを歎きたるなり

歌さへぞ、ひなびたりける。

(語釋) 人からは、もとより、歌までが、ひなびたりとなり。さへは、詞に心つくべし○ひなひは、麗の風をなすをいふ。田舎めくなどいはんが如し

さすがにあはれとやおもひけん、いきてねにけり。夜ふかく出でければ、女、

(語釋) さすがは、前下いへるが如く、シカシナガラ意にて、歌までが田舎メイトは居るけれども、シカシナガラなり○あはれとやおもひけん云々は、男の心を、作者がいふなり○いきてねにけり

りは、女の許に往きて、相率めて寝たりとなり

夜もあけばきつにはめなんくだかけの

まだきに鳴きてせなをやりしる

(語釋) きつといふは諸説あり。一説には、狐なるべしといふ。狐をキツとのみいへるは、萬葉にも見ゆたり。子は、むじなの子と同じく添へたる言ならんといふ。さて狐は、雞を好むものにて、田舎などにては、狐に雞をとらるゝと常おほければ、かくよめるなりといひ、又、一説には、出羽の秋田のあたりにては、木もてつくれる、大なる箱を、家々にすゑおきて、水を蓄ふる器とせり。其の器の名を、きつといふ。其の土地の老人のものかたりに、此のきつ、昔は、おしなべて、家ごとけありしものなりといへり。近き比は、大かた、瓶を用ふることをなりて、きつをすゑおく家は、少く、其の名を知るものも多からず。これ古き東語にて、こゝは、きつといふ器の水中へ、うちめんといへるなるべし。今も雞の啼鳴するを惡みて、しかたせしむるには、雞の腹を水にひたし冷せば、其の事やむといふ云々。この兩説のよしあしは、後述いふべし。○はめ、前のきつの解釋によりて、此の語も解を異にせざるを得ず。もし、狐の説によらば、はめは食にて、食しめんの義なり。又、きつは水器といふ程によらば、はめなんは、水に没る事なり。今も水中へ物を没るゝを、はめ、はむるなといふこれなり。○くだかけは、腐繩なるべし。くだは、惡みていふ詞、かけは、庭鳥の古名なり。庭鳥は、カケロと鳴くより、古くはカケといひき。響なきして、男をかへしたるがゆゑに、腐繩と惡みていへるなり。時鳥を醜時鳥などいふも同じ義なり。○またきは、日本紀に、豫の字を訓みぬ。何に

まれ、其の時よりさきにすることをいふ。○せなは、夫なり。女より男をいふ詞なり。東國にては、今も若き男をせなといふがつねなり。○やりつるは、かへしやりつるの意なり

(大意) きつを狐の事に見れば、一首の意は、夜もあけば、狐にはまじめなん、わろき雞の、いつとも鳴く時よりは、はやく鳴きて、夫をかへしやりつる事よとの意なり。又、きつを、水器とする方ならば、夜あけなば、水器に打ち没なん、腐繩よ、汝が啼鳴せしゆゑに、曉やとれもひて、夫をかへしやりつるがくやく悲しとなり。されば此の後、響鳴させらんやうに、水器に没なんとの義なり。この兩説、いづれにてもよろしけれど、若し秋田あたりの方言に、水槽をきつといふ事、信ならば、其の説れもしろし。いかにといふに、此の歌の初句、夜も明けばとあるには、水槽の方、打ち合ひて聞こゆ。さるは、狐は夜をのみ事として、「夜」のどの「な」の方言もあるに、夜の明けたらば、狐に食ませんといふは、いかなるいひさまなり。よくよく夜もあけばといふ、初句を味ひて、その意をさぐるべし。又、ある人は、きつは、木櫃の中略せるにはあらぬかといへり。これも、一つの參考をすべし。もしきつといふ方言ありとせば、木櫃の説も或は然らんとしへるに、男みやこへなんらぬるとして、

(語釋) としへるを誓けるは、としひて、女は、おかく思ひ入れたるに、いふ義なり。さるに、男は心とあらねば、おらすて、京へ往くとてなり。此の外は、文意、明らか

くり原のあねはの松の人ならば

都のつとれいふとよはめし

(語釋) くり原のあねはは、陸奥の國、栗原郡、栗原の郷なる、姉波といふ地名なり。つとは、茂葉に、髪の字を訓せり。山づと、濱づと、旅づとなどいふ如く、其の所につけたる物を、何にても包みて持ち來たる故の名なるを、轉りては、單に土産といふ意に用ふ。こゝも然り。○いさは、人を誘ふをいふ。今もイザイザなど、人をさうさ時にいふは、此の詞なり。こゝは、いさくをさうさして、都へつれゆかんものをの意なり。

(大意) 陸奥の國、栗原の郷なる姉波といふ所に、名高き松あり。此の松が、もし、人ならば、都人に見せたきものなれば、都への土産にいさといひて、誘ひゆかましを、人ならぬゆゑに、それもできずといふが、歌のおもてにて、したには、此の女の、人らしくは、都へつれゆかんものを、あまりに、田舎ものなれば、うれも得せぬとの意を含めたるなり。

といへりければ、よころこびて思ひけり、くぞ、いひをりける

(語釋) いへりければ、上のあねはの松の歌を、男のいへりければなり。○よころこびては、女がなり。○思ひけり、思ひけりとは、此の男、我を思ひけり。思ひけりといひをりたるは、居りきとなり。歌のしたの意を知らずして、たゞ、表面のこゝろにのみ思ひなして、我を誘ひて、都へつれゆかん心持なりと女の喜ひしさまなり。

(文意) かく歌の深意をも汲み得ずして、得意に、よころこびぬる田舎の女のため、こゝにあらはせるは、次段の用意ある女のため、いとよおもしろく見せんがためなり。

(十四段)むかし、みちの國にて、なでふことなき人の、むすめにかよひけるに。

(語釋) なでふことなき人とは、今言に、ナンデモナキ人などいはんが如し。爾親も、由緒ある人にもあらぬに、其の娘のことの外に、すられたるをいはんためなり。

あやしうとやうにて、あるべき女にはあらず見えければ、

(語釋) あやしうは、奇しくの音便なり。上の段の女とは、甚、異にて、これは用意ある女なれば、由緒なき女としては、あやししく思はるとなり。○とやうにては、其のヤウニテの意なり。即、由緒なき女のやうには見ねばなり。さて其の女の心のおくの、知りかたければ、こゝろみんとて、歌をよみてとられるよしなり。

志のぶ山志のびてかよふ道もがな

人のこゝろのおくも見るべく

(語釋) しの山は、和名抄に、陸奥の國、信夫とある處の山なり。今は、岩代の國、信夫に屬せり。こゝは、名所を、しのびの序におきたるのみなり。○しのびてかよふとは、女の許に通ふなれば、人目をかくれて通ふをいふ。○道もがなは、道もあれかしと願ふ意なり。○人の心は、女のこゝろをいふ。この歌は、道おくかよふなど、山の縁語を以てしたてたるなり。

(大意) 一首のこゝろは、人の心に忍びて通ふ道もあれかし。さらば、わけ入りて、おくを見るべくといへるなり。深き用意ある人は、心の奥の知りかたきものなればなり。さてこの歌の深意は、つひに我によらんのした心ありや、なした。其の心の奥を知りたしとせむ。

女かぎりなくめでたしとおも(む)こゝろもがなむすめにかよひけるに、いからばせん。

(語釋) めでは、愛の字の意味なり。今はめでたしと入は、單に服すべき義にいと、古くは、廣くほめたる意に用ひたり。こゝは、今言に、結構なを譯すべきか〇とるは、然るの意にて、前の「なでふことなき人のむすめ」とあるを承けたるなり〇とかなきは、古く、不善、また、不祥、または、不真などの文字を訓せり。こゝは、よからぬ田舎やせなどいふほどの事に心得べし〇えひすは、蝦夷にて、昔は、陸奥、出羽などはすべておびすといへり〇いかはせんは、都の上き人の蝦夷所に住みつくべきにあらす。さる所に生ひたらし身の、ともに都にのぼらんは、耻づかしくて、せんかたなく思ふよしなり。すべて、この女は、用意ふかきさまなり

(文意) 此の女は、彼の京人をいとめでたしと思ひぬ。されば、心の奥をもめらはさんとは覺ゆれど、猶、わがあづまえひすの、田舎びたる心をめらはしては、いかはせん。いはでやみなんものとなり。京人をやさしくまされりとして、いよく、用意せるさまなり。上の段の愚かなる女は、用意もなく、ひなびたる歌をも、多くよみて、笑へることを悦べる下、此の段には、かくよしある女をいひて、歌の答をもわざとつゝしみてせざるさまに書きなしたり。二條を對にしたる文のさま、妙といふべし。これこの書の得色なる所なり

(十五段)むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代の帝につかうまつりて、時にあひけれど、のちは、世かはり、時うつりにければ、

(語釋) 紀の有常、三代實錄に、元慶元年正月廿三日、從四位下周防權守紀有常卒。左京人、正四位名虎之子也。性情警有儀望、少年十九歲奉侍仁明天皇、承和中權拜左兵衛大尉云々、貞觀九年、

爲下野權守、秩滿爲信濃守、十五年授正五位下、十七年爲雅樂頭、十八年至從四位下、爲周防權守、卒時年六十三とあり〇三代の帝とは、仁明、文德、清和の三天皇をいふ。有常は、十九歳ばかりより、仁明天皇に仕へ奉り、さて妹の腹に、文德の一の皇子、惟喬親王うまれ給へば、時にあひけるなるべし。然るを、文德位につかせ給ひて、其の年の冬、染殿の後の御腹に、惟仁(清和天皇)親王生れ給ひて、やがて太子に立ち給ひしかば、其の後は、有常はさせる榮も聞ておぼすして、清和天皇の貞觀十五年になりて、官位昇れり。仍りておもふに、右の貞觀の中間より前、嘉祥の末の間、時にあはぬやうにてありしが、いとく衰へたるやうに、こゝに記せるは、例の物語なればなるべし〇時にあひては、三代の中で、はじめの御代をさせるなり。一説に、三代の間は、全く時にあひて、其の後に時を失なひしならんといへるは、國史を参照せぬ誤なり。又「つかうまつりて」と句を切りて、時にあひけれど、のちは云々をつゞけて讀むべし。然らざれば、三代時にあひたるやうに聞きまがふ愛あるべし〇世かはり云々は、長恨歌傳の時移事去、榮盡悲來とある文によりて、かけるなるべしよのつねの人のこととあらず。

(語釋) よのつねは、尋常の意なり〇こととは、如しの義なれば、世のつねの人よりも、おそろへたりとの意なり

人がらは、心うつくじう、あてはかなることをこのみて、こと人にも似ず。よのわたらひ心もなく、おつこくても、なほ、むかしよかりし時のころながらに、世

の常のことも知らず。

(語釋) 人からは、人品をいふ〇心うつくしうは、心のきたなからぬをいふ。前に引ける三代實録に此の人をほめて、清誓にして儀望ありといふを、うつしひろめたる文なり〇あてはかなることば、上品めきたることといふ〇こと人にも似ず、他の貧しき人にも似ずなり。他人は、貧しくなれば、權門に媚びて、昇進せん事なき望むはつねなるを、有常は、まづしけれども、しかせぬとなり。これやがて、清誓の性質なるがゆゑなり〇よのはたらひ心なしとは、世を渡るために、物を得んと望む心もなしとなり〇むかしよりし時の云々、はじめ時を得て榮えたりし事は、前にいへるが如し〇ころがらば、心のまゝにさすた同じ〇世のつねことも知らずは、朝夕のつほらぬ家事をも知らずとなり、すべて、貧しきにつけては、種々に心をめぐるして、妻子をも養はんとするが、世人のつねなるを、さるわさとも知らず。昔の時にあひし世をかはらぬとなり

(文意) 有常の清誓に安んずるさまを、こゝにあげたるは、つぎにかゝる人につきそひ居りては、ゆく未おぼつかなしとして、妻の出家せん事をあらはさんかためなり

とし比あひなれたるめ、やうくとしはなれて、つひに、尻になりて、あねのさきだちて、尻になりけるがもとへゆく。

(語釋) とし比あひなれたるめとは、年來、親しみたる妻の義なり〇やうくは、次第次第になり〇とてはなれば、床離にて、夫婦、寢所を異にする意なり、そとより轉りて、すべて夫婦の間、うとくなる事をいふ。次第次第に、疎遠になりて、終に尻になりたりとなり。さて其の間には、さうく

の事もありつらんを、省きたる文体なり〇あねのさきだちて云々、此の妻の姉は、前に尻になりたるがありしかば、其の許へゆきぬとなり。

(文意) 有常は、清誓に安んじて、意をせざる人からなるを、妻は之に反して、かれこれを貧をいふさまの性質なれば、其の必合ひかたや、又、親しむことも六かしく、つひに尻になりぬるよしなり。されば、此の妻、心からすゝみて出家せるにはあらで、年若いたる身なれば、別人に嫁することもかたく、姉の尻になりてあるをたよりに、かしらおろして、うとへゆききとなり

男、まこと、むしほしき事ころなかりけれ。今はとてらくさ、らとあはれははおもひけれど、貧しければ、するはさもなかりけり。

(語釋) 今はとては、今はかきりてとなり〇さくは、往くなり〇するわさ云々、妻を別かるゝ下、ものれくるは、昔は定まれるわさを見えたり。されば、それをするわさのさへら。恐るべきものともさはずして、するわさのさへらに心をつくへし

(文意) 女のかたより心へだつれば、實にむしほしからねど、今はかきりて、出でゆくには、相馴れし年月の事をも、おもひ出でられて、さとあはれとは覺ゆれど、貧しき身なれば、世の普通下、業に與ふるわざだに、心にまかせずとなり

思ひわびて、ねんごろにあひかたらひける友だちのもの、かうく、今はとてまかるを、何事もいさかかなる事もえせで、つかはすこととをかきて、おくれ

君がみけしれたてまつりけれ

(語釋) これやのやは、疑の辭。このは彼のにて、古言なり。これや彼の聞き傳ふる、天の羽衣ならんとなり。○あまの羽衣は、神の服、また、天人の服などをいふ。こゝは、うれに擬へて、ほめていへるなり。○うべこそは、語こそにて、しは例の助辭なり。ウヘハ、肯意にいふ語にて、實にしかあるべしなをいふほどの詞なり。○みけしは、御衣の意にて、古言なり。又ミンでもいふ。○たてまつりければ、衣服なども、むかしは、貴人には、下より調じて、奉りしものなれば、かくいへるなり。さて昔は男女の常に着る衣は、かよはしても着たりしがゆゑに、今、友だちの衣を、有常の妻にもおくれるなり。殊に、にはかの事ゆゑ、我が料にしたてたる衣を、とりあへず、おくりたるさまなり。

(大意) 一首の意は、これや彼のきく傳へてのみありて、我等が、いまだ、見たることなき、天の羽衣ならん。うつくしさいはんかたなく、此の世の物とも見えず。かくよき衣なれば、世にすべれ給へる、君が御衣に奉りしは、まことに然ることなるべし。それをわれらにたまはば、甚、過分なりと、いたく、先方をほめて、喜の情を述べたるなり

よろこびれたへかねて、また

語釋) 聞てえたるが如し

秋やくる露やまがふとちもふまで

あるは涙のふるにすありける

(語釋) 秋や露やのやは、共に例の疑の辭なり、秋はものかなしきものなれば、其秋の來て、露やま

かふと思ふほどに、喜の涙が多くなつる事となり。○まがふは、分けがたく、混することといふ。なれば、こゝは涙があまり多くたれて、露かちもふまでの意なり。○びて一二の句は、秋の來てつゆかどまかふとの意なり

(大意) 一首の意は、心をかなしふる秋の來て、袖をしぼるか、露のおきまがふかと思ふばかり、我が袖のぬるゝは、よろこびに堪へずして、おつる涙にてありけりとなり

(十六段)むかし、年ころおとづれざりける人の、さくらのかかりに、見に來たりければ、あるじ

(語釋) 新釋に、年ころは、月ころの書きあやまりなるべし。年比にては、歌に年にまれなるといへるにかなはずといへり。此の說よし。○おとづれざりけるは、音借せずありけるなり。此の外は、語釋も、文意も聞てえたるが如し

あだなりと名にこそたてれ櫻花

年にまれなる人もまちけり

(語釋) あだとは、かりうめなる事、また、移り易きことをいふ詞なり。○年にまれなる人とは、一年のうち、稀れに來る人の意なり。○此の歌は、古今集、春の上に「櫻の花さかりに、久しくとはざりける人の來たりける時に、よみける。讀み人しらす」とあり。これを、こゝには、例の一つの物語に作れるなり

(大意) 一首の意は、櫻の花は、あだなる移りやすきものと、何人もいへど、あだにはあらずして、

一年の中に、まれに来る人をもまちて、散らであらうと入るなり。さて今は、かく稀れに来る人こそ櫻の花よりも、かへりてあだなれと、怒みたるこころを裏にもたせたるなりかへし

けふこそすはあすは雪とぞふりなまじ

消えずはありとも花を見まじや

(語釋) けふこそすはは、今日來すはなり○ふりなまじは、あるならん意なり○消えずはありともは、雪の如く散れる花が、たとひ、消えずのこりてありともなり○花を見まじやは、花を見えはせじのこころなり○さてこの歌は、古今集に、業平朝臣の歌とあり○さて互にまけじであらざるは、贈答のうたのつねなり

(大意) 一首の意は、今日來たればこそ、花と見れ。明日は、雪を降るべし。其の雪消えずはありとも、花を見まじや。花を見えはせじとなり。さてそれがしを、花よりもあだなりといはるればこそ、そなたこそ、今日こそは、明日は心かはるべければ、この人とも見ぬじといふこころを、例の裏に合めたる歌なり

(十七段)昔、なま心ある女ありたり。男ちかうありけり。女うたよむ人なりければ、こころみんとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもとへやる

(語釋) なま心あるとは、心ある人のやうにて、こころのはぬをいふ。今の世に、ナマイキな女といふナマこれなり○ちかうは、近くの音便なり○うつろへるは、移るを延べたる言なり。菊の花の盛すま

たるをいふ○此の段は、貫之集に、ちかどなりなる所に、方たがへたある女の、わたれるを聞きて、あるほどに、事たかれて、見きくに、歌よむべき人なりを聞きて、これがよむまは、いかでこころみんとおもへども、いと心下しあらねば、深くも思はず、すゝみてもいはぬほどに、彼もこころみんと思ひければ、萩の葉ののみぢたるにつけて、歌をよみてなん、たこせたる「秋はきのした葉につけて目にもかく、よそなる人の心を予見し」貫之「世のなかの人に心をそめしかば、草葉に色も見えずとぞおもふ」をありて、此のつぎに、十首まで贈答のうたあり。これと思ひて作れる物語なるべしと、古意下り入る。以下にかるべし

くれなゐの句ふはうつろひ白雪の

枝もどきをたふるかとも見ゆ

(語釋) くれなゐは、色のうつろひく見ゆるをいふ。香をいふたはあらす。月の下ほひ、水の下ほひなどいふ皆同じ○うつろひは、うつろふをいふ意なり○ををとは、轉じてたわよをいふ。撻むばかりの義なり○うつろひる白きくは、あかき色のまじるものなれば、うれたよそへて、たをよそへるをいへる歌なり

(大意) 一首のこころは、白菊の花もうつろひては、紅下にほあやう事なるが、それはうつろひた、白雪の枝もたわよほたふるかを見えて、紅の下ほ入る色は見えぬとあり。さて色このむ心を聞くと、其の色ある心は、うつろひ、あかきけしき見ゆすをいふこころを、裏に合めたるなり。かへしめるは、かへした、いかやうかして、其の心を見んとてのつねなり

男、しらすよみに、よみける

(語釋) しらすよみとは、まこと、知らぬにはあらず、女の下の情をわさと知らぬかほど、かへし
せるをいふ

くれなねにほふがうへの白雲は

をりける人の袖かどう見る

(語釋) うへは、うのうへの意なり○をりける人とは、白菊を折りける人なり○此の歌は、おくれ
る歌の意を知らずよみに詠めるなれば、さらに返歌のやうにはなきなり

(大意) 一首のこゝろは、うつろへる白菊にて、紅にほへる色のあるがうへに、白雪もふりたる
やうなれば、折りける君が衣のかさねの袖かどう見るとなり

(十八段)むかし、男、みやづかへしたる女のかたに、こだちなりける人を、あひし
りて、ほどもなく、かれにけり。おなじ所なれば、女のめには、見ゆるものから男
は、あるものにもおもひたらねば、女

(語釋) むかし男云々、これ貴人の北の方附の宮仕を、男のしたるなり。それゆゑに同じ所なれば
とはいへり○こだちは、御達などの文字をあてゝ、もとは、貴女をいふことなれど、うつりては、貴
女に仕ふる女房をいふ事となれり。こゝも然り。又上田秋成の説に、ある人、御達の説は、わるし。
古本に、兒達と書けるは、コダチと讀むべき證なりといへるはよろし。古意には、男女とも子と唱

ふる事、その一二をあげん。男子には「いさ子ども、はやく日本へ」ならの都をねるはたが子を「女を
いふは、「阿倍の市路にあひし子らはも」このをかに菜つます子」など、猶おほし。さて國史には、赤
猪子、大葉子、又皇女の御名のみならず、仕ふる女房達にも、杉子、俊子などいふ多し。ひとり、伊勢
は、亭子院(宇多天皇)の皇子を生み給へば、大和物語に、伊勢の御やすむ所とも書けるにつきて、伊
勢の御を稱すること、人、皆おもへど、これも、出羽の子、若狭の子等の例にて、はじめて帝のめされ
ざりしよりの名ならんには、伊勢の子とよびしなるべし。かゝれば、すべて童名といふものにて、今
なほ昔にかはらぬ事と承る。貴女を稱して御といふは、うつろ見はかへしき御宮づかへの人の上
にてこそあらめ、云々とあり。これも一説とすべし○ほどもなくは、幾程もなく、暫時の意なり○か
れにけりは、女にあふことのないなるをいふ○ものからは、ものなからの義なり○男はあるもの
も云々は、男の方にては、一向除れたるが如く、氣にとめざりきとなり。思ひたらねばは、思ひてあ
らねばなり○さて此の一段は、古今集に「なりひらの朝臣、絶の有常がむすめに住みけるを、うつら
む事ありて、しばしの間、晝は來て、夕ざりは歸りのみしければ、よみてつかはしたるをあるを例の
かきひがめて、一條の物語としたるものなるべし

さすがにめには見ゆるものから

(語釋) 天雲は、遠く他所に見ゆるものなれば、よろこば言の枕詞なるを、下まなたと入下しひ
つゝけたるなり○さすがは、例のシカシナガラ義なり○ものからは、ものなからの義なること、

前の歌に解せるが如し

(大意) 一首のこゝろは、天雲のやうによう外にも、人のなりゆくてもかな、さらば、かくれて見えぬやうにもなるべきを、さすかに、目には見ゆるものながらの意なり。されば、眼には、ちかく見る人の、心うとくなりたるをいへるなり

とよめりければ、男、かへし

ゆきかへりそらにのみしてふることは

わが居る山の風はやみなり

(語釋) ふるは、經るなり○風とは、他の男をいふたとへ言なり○はやみは、はやしたの意なり。下の句の裏のこゝろは、我がものなる女のもとなれば、立ち寄らんとおもへと、えよらぬは、又、他にかよふ人のあまたあるゆゑなりといふ意なり○古今集には、この歌は、業平朝臣とあり

(大意) 女の歌に、男を雲にたとへたれば、すなはち、雲になりて、行きかへり、空下のみしてある事は、我が居るべき山の風のはげしきゆゑなりといふ意なり

とよめりけるは、あまた男ある女になんありける

(語釋) 此の女は、他にも多くの男ありし女なりきとなり。こゝは、記者のことばなり

(十九段) 男、やまどにゐる女を見て、よばひてあひにけり。さてほどへて、宮づかへする人なりければ、かへり來る道に、やよひばかりに、かへつのもみぢの、いと

おもしうきを折りて、女のもとに、みちよりいひやる

(語釋) やまどとは、奈良の京あたりをさしていふなり。此の物語は、平安朝のはじめのほどにありつる事をかけるよしなれば、其の心はへて、見るべし。平安朝のはじめの人は、久しく住み馴れし、奈良の都には、親族、または、朋友などもありて、かしてへは、そりくに行きかよふ事たえざりしなるべし。されば、かゝる事もありけるなり○よばひは、女の許に通ふをいふ。委しは、前にいへり○やよひばかりとは、三月比をいふに同じ○かへつは、和名抄に、雞冠木、和名、加倍天乃木とあるこれなり。葉のかたち、蛙の手に似たるゆゑの名にて、かへつての翠言なり○もみぢ、こゝは、芽の紅なるをいふ○いとおもしうきとは、かへつての木は、いろくありて、芽の色も厚薄、種々あれば、其のうちたすぐれたるをいふなり

(文意) 平安の都なる男、奈良の邊の女に通ひけり、さて月日経たりしが、男は仕官の身なれば、いづまでもかくてあるべきにあらずとて、女に別かれて、歸る道に、三月比なりしかば、かへつての芽が紅に出で、誠に見事なりき。かゝるものを見るにつけても、女の事を思ひ出でられければ、折つて女の許へ、道よりかくるとて、歌をうへたりとなり

君がためたをれる枝は春ながら

かくこそ秋のもみぢにけれ

(語釋) たをれるは、手折れるなり○かくこそは、かやうにこそなり○此の歌の意は、新釋に、君にわが心ざしの深きにかなひて、春ながらも秋の如く、色もかく染めたりといふ意なるべし。舊註に

も下、秋といふ言になづみて、女の心のうつろふ事に、心得たるは、いかゞ、いかには、かへしの返りも
づらしげなし。又、女の心を疑ふべきよしも、上の詞に見えずといへり。此の説、まことによし

とてやりたりければ、返事は、京にづきてなん、もてきたりける

(語釋) 返事は、京にづきてもてきたるは、やまを遠く離れてやりたる使なるよしをしらせたる
文なり。されば、京ちかき所のかへてのもみちゆゑに、大やうに、君が里にはといへるなり。此の外
の詞は、聞てえたるが如し

うつろふ色のつきぬらん

君が里には春なかるらし

(語釋) 新釋に、此の歌は、心ざしのあかきを、かへての若葉の色をきたよと入て、いかにおこせたる
を、聞きしらぬ顔して、かくこそとのたまひおこせたるは、御心のうつろひかはれるよしをせしめ
ん。こゝもとては、いかにやうの心とは見えざるべき。うつろふ色のつきぬらん、あやし
よ。君が里には、春といふこともなく、秋なるゆゑにこそといへるなりと、あるにて、語釋も、大意も、
おほかた聞てゆべし

(二十段)むかし男女いとかしく思ひかはして、こと心なかりけり、あるを、
かゝりけん。いこ、かなる事につけて、世の中をうごと思ひて、出でゝいなん
とおもひ、かゝる歌をなんよみて、ものにかきつけける

(語釋) かしくは、能くといふ意なり○こと心は、異心イコトココロにて、思ひかはす心の外に、他心タココロなりけ

りとなり○いかゞありけんは、如何なるゆゑかありけんの義なり。さてこれは、記者の疑へるよ
しの詞なり。すべて、男女の中らひのあしくなるは、他心あるより起るがつねなればなり○世の中
とは、とりもなほさず、男女の中をいふ。うしは、愛の義なり○ものにかきつけけるとは、出でゝ行き
しめにて、夫の見よかしとて、壁、または、障子シヨウジなど、歌をかきけるなり。あるは、恨をのこした
る歌なればやかし

いでいなば心かろしといひやせん

世のありさまを人はしらずて

(語釋) いでいなばは、出でゝ行かばにて、今、夫の家を出でゝ行かばなり○心かろしといひや
せんは、他人が、我を輕卒なりといふかもしれずとなり○世のありさまとは、夫婦の中のありさま
の義なり

(大意) 夫婦の中の有様の、堪へ難き事のあるをば、他人は知らずして、出でゝ行くを、輕卒なりと
おほかたいふべし。まことに、くちをしきかきりなり。これみな、夫の我にしむけ給へるわがよと、
怨をのこせるなり

とよみ置きて出でゝいたけり。此の男、かくかきおきたるを見て、けしう心おか

るべき事もおぼえぬを、なれゝよりにならん

(語釋) けしうは、怪しうといふに同じ○心おかるべき事は、今言にもかくいふ。氣ママリ、又、心
配なる事ありとも、男は心づかぬに、女はひが必より、はらだちて出でゝいたきとなり。さて男の心

つかぬに、女の出で、行きしなれば、上の「さる」かなる事につけて「さる」文も、ますます能く聞
こゆるなり。かゝる處は、ことに、此の物語文に注意すべし

いといたううちなきで、いづかたにもとめゆかんと、門に出で、とみかう見、み
けれど、いづこをばかりともおぼえざりければ、かへりいりて

(語釋) 留守の中で、女の出で、行きしがゆゑに、男はいかゞはせんとまをへるよしなり○とみか
うみは、とかうみめぐらすなり。左右、東西を見廻らすことにて、至極當惑のさまなり○いづこをば
かうとも云々は、何處ならんとも、測り知られぬ意なり。今言に、心當かないさまに同じ。され
ば、尋ねるによしなくて、行く事をやめて、家に入りたるよしなり

おもふかひなき世なりけりとこ月を

あたにちぎりて我やすまひし

(語釋) あたは、眞實やかなる事の反對にて、うつりやすきさなり○我やすまひしは、われやはす
みしの義なり。我やのやは、例の意の反對になる辭なり

(大意) 一首のこゝろは、あまたの年月を、あたに契りて、我やすまひし。いとまめやかた、ちぎり
てこそありつるに、かく出で、いぬるは、おもふかひなき、夫婦の中なりけりとなり
といひて、ながめをり

(語釋) ながめは、今は、たと、眺望の意にのみ用されども、古くは、ものおもふさまをいふ。こゝ
は、一首の歌をよみて、いまだ充分ならぬがゆゑに、空をうらまはめて、ものおもはしむるさまをいふ

り。さて又よみ出でたるよしなり

人はいさおもひやすらん玉かつら

おもかげのみにて見えし

(語釋) 人はいさ云々、人は女を指せり○玉かつらは、玉簪にて、女のかしらにかくるものなれば、
こゝは女の上をひの事なり○見えしは、陰られぬさまをいふなり、つゝとを言はしむる
したるなり

(大意) 一首のこゝろは、女は此方を思ひやすらん、いと知らず。我は、女の上をひの簪にのみ出で
見えし、陰られずとなり

此の女、いとひとしくありて、ねんじわびてにやありけん、いひおこせける

(語釋) ねんじわびては、今言に、こゝろへ兼ねてなごひを同じ。女、はじめ腹たちたる時、少
しの事にか出せるが、心、をさまりては、やうやう、悔ゆる心ものこりて、夫の上をかへせかして、心
まかりまておぼさ云々といふ義に心得えし

今はどてもする、草の種をだに

人のこゝろにまかせずもがな

(語釋) わする、草は、陰るゝといふ事を、陰草にしたて、おもしうくらへるなり○だに、今言
に、なりともといふ義なり○がなは、例の願の詞なり

(大意) 一首のこゝろは、かくわかれては、もとの如く、共に住む事はならずとも、せめて、君の陰

れたまはぬやうになりても、したきものよとなり
かへし

わすれ草うゝとだにきくものならば

おもひけりとはたしものなほ

(語釋) この解は、新釋の説よろし。解釋下、Sはく、一首の意、そなたには、うれがしむ心だ、陰れ草の種をまかせずるがなといはるれを、それはたがへり。わすれ草をうゝるは、あしき事ならず。それかして、あはれずとも、せめてうなたの心だ、わすれ草を種うゝるをなるとも聞かまほし。かやうに聞くものならば、そなたにも、うれがしむおもひけりも、しりまじなまじりてSを意なり。しかりゆゑは、萱草陰(憂)文選養生論の語(と)る事のありて、それを心にうゝるは、古歌下、我が下にもつけたれとていひけんやうに、思を陰れんとてするわらなればなり。かやうに見れば、だにSをてたははもとを得られ、又、聞くものならばSをば、聞かまほしと思ひてとてSを詞なるにも、能く叶へり。Sをば、古註をば、説きひがめたるにならひて、古意、臆勝にも、我がわすれ草をうゝと、うなたに聞かば、れもひけりといれとてSを意にけるは、自他のたがひて、いみじきひが言なり。しれとてSを意を、知りまじなまじりてSをまきは云々

又々ありしよりけり、いひかはして男、

(語釋) ひには、すみてよむべし。まゐりての意なり。こゝは、女はあやまりありしゆゑに、男の心をとり、男もSをかなる事につけても出でし女なれば、又、そやうの事もあらんかと、女の

心をとるがゆゑに、あつして勝りて、互にうはを繕ひて、いひかはすよしなり。思ひかはすを又はすして、いひかはすをいへるに思すべし。よていまだ、女の男の家にかへらるるの事なり。わするらんとおもふ心のうたがひに

ありしよりけりものうかなしき

(語釋) ありしよりけりには、別かれてありし時よりも、まゐりての意なり

(大意) 一首のこゝろは、いさゝかなる事につけても、出でしに人なれば、又やわするらんと思ふ心のうたがひに、行末のみがたければ、わかれてありし時よりも、まゐりてものかなしき思ふとなり

かへし

中そらにたちおる雲のあともなく

身のはかなくもなりぬへきかな

(語釋) 中空とは、Sの山のなかゝる所なく、たよを雲をSを〇たすむるは、たすむつてたよをまじりて〇身のけかなくなるを、死ぬることなり

(大意) 一首の意は、夫の疑ひてSへるを承けて、此方には、君そのみ頼みと思ふた、かやうに疑ひて、隔て給ひては、君が家にもかへられず、中空にたよを雲の、横かゝる處なく、あともなく消ゆるやうに、我もよりの方なくて、命、消えぬべしとなり

とほらひけれ、おのが世になりにければ、うとくなりけり

(語釋) とはいひければは、かく夫に疑はるゝは悲しきよしにはいひければなり○あのが世とは、夫の家に歸りて、もとの如く、妻となり、一家の事を、わがおもふまゝに取り行ふさし。よて別れてある時は、夫を戀ひしく思ひしかど、もとの如く、夫婦となりては、又、急に腹たつくせのさし、中の疎くなれるよしなり

(廿一段)むかしはかなくてたえにける中、なほやむすれざりけん。女のもとより
(語釋) はかなくてたえけるとは、何といふ程としたるゆゑはなけれど、互に恨の積りて、中の絶えたるをいふ。一説に、はかくしくあふ事もなくたえたるなりとさはさか。はかなくは、たしかならず、また、きとせぬなごいふ意なり
うきながら人をばえしもわすれねば

かつ恨みつゝなほぞこひじき

(語釋) うきながらは、憂ながらなり○人をばえしもわすれねばは、人は男とさす。もは例の助辭にて、陰るゝ事を得ればの義なり○かつは、ものゝ二つに渉る所なりを詞なり、こゝは、恨めじきと、戀ひしきとの、ふたつにわたれり

(大意) 一首のこゝろは、つれなくて中たえ給ふは、うき事ながら、君の事を、此方には陰るゝことを得ねば、恨みつゝ、やはり戀ひしくもありとなり
とらゝりければ、さればよとおもひて、男

(語釋) 何といふゆゑなく、互にうらみの重りて、絶えたる中なれば、男も女も、ふつからの罪を

はず、人のとがに思ひなして、女はうきながらといふ歌よみかけ、男は女のかたよりまけて戀ひしとさひおこせたるを、さればよ、女のひがこゝろえなれば、まけて従ひたるなりと思ふ意なり
あひは見で心ひとつをかはしもの

水のながれてたえじとぞおもふ

(語釋) あひは見では、逢ひ見る事はせずなり○さればよと思ひて、しばしこゝろせん心の心に、かへしにかゝる歌をばよみて、やりたるなり

(大意) 一首の意は、はじめの如く、逢ひ見ては、又よしなき事に恨みられて、中たゆる事もあるん、されば、今度は、逢ひ見ることはせず、互に思ふ心ばかりをして、ありなん、しかせば、恨みらるゝ事なくて、たとへば、中島ある河水の如く、一たびはわかれしかども、かく心のひとつにあひていひかはすこと、行末ながく絶えじと思ふ、うらみられしこゝろたれば、逢ひ見る事は、いなとさひやりたるなり

とはいひければ、その夜、いきてねにけり、いじこゝ、ゆくさきの事どもなとらひて

(語釋) こゝろせんとして、逢ひ見る事はせずといひやりたれど、固より深く恨む事のある中にもあらねば、其の夜ゆきて、ねにけるなり。はじめに「はかなくて絶えにける中」とあるを思ひ合はすべきなり

秋の夜の千夜をひとよになすらして

八千夜しねばやあく時のあらん

(語釋) なすらへては、かりになしてといふ意なり。まことに、八千夜を一夜になさるゝものにはあらざればなり。○しは例の助辭なり。○ねばやのやはかに代へて、あらんの下に置きて心得べし。やのてにそはの一格なり。

(大意) 秋の夜は長きものなれど、その秋の長夜の千夜を、假りに一夜になして、八千夜ねば、あく時のあらんかといふ意なり。つまり、長き夜も、相率ひてねる時は足れりとせずとの義なりかへし。

秋の夜の千夜をひとよになせりとも

詞のこりて鳥やなきなん

(語釋) 千夜をひとよになせりともは、前の千夜を一夜になすらへてあるを承けたるなり。○此の歌は、語釋も、大意も、聞てえるが如し。

いにしへよりも、あはれれてなんかよひける

(語釋) 一度絶えたる中なれども、女のこりて、昔よりも殊に男によくつとめたるがゆゑなるべし。このあはれは、男の女をめづる意なり。

(廿二段)むかし、おなかわたらひまける人の子ども。

(語釋) おなかは、田舎にて、都に遠ざかりたる處をいふ。○わたらひは、古く活の字を調める義にて、生活の事なり。田舎に往來して、産業を營むをいふ。○子どもは、童男、童女、ふたりをいふなり。○

さてこゝに、親のおなかわたらひする事をかけるは、女のおやなくなりてといふ所にかけて、ゆゑあることなり。此の物語は、すべて、かゝる處に注意して見るべし。

井のもとにいで、あそびけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかばし、ありけれど、男は此の女をこころえめとおもひ、女も此の男をこころえめとおもひつゝ、おやのあはすすることも聞かでなんありける。

(語釋) 井のもとに云々、男も女もをさなければ、もろ共に、井のもとにいで、遊びけりとなり。○井の本は、古書に據るに、多く楡木を植るがつねなりしかば、遊ぶにたよりよかりしなり。○あそびけるを、今言にがといふてゐるなり。○はぢかばしは、男も女も、互に耻ぢ合ひてなり。幼年の時、親しく遊びたれど、さすかた、成長しては、互に遊ぶことを耻ぢらひて、見ぬやうにならねれども、いふ意なり。○男は、此の女を云々は、久しく相見ねども、おとなき時に遊び馴れて、思ひかはしたる心のかはらぬをいふ。○親の合はすこととは、女の親は、他の男に合はせんといふなり。○さて親とは、母おやをいふなるべし。かゝる事は、母のとりはかるものなればなり。さてこのとどりの男のもとより、かくなん

(語釋) 隣の男の許より、左の歌を女へ贈れりとなり

つゝおつゝ井筒にかけしまろがたけ

おひにけらしなあひ見ざるまに

(語釋) つゝおつゝ井筒には、筒井筒にて、筒井は、筒の如くに、丸く掘りたる井をいふ。覆下て

なり○たかやすは、高安なり。さて生活のため、田舎わたりひらきける間、河内國、高安の女を見そめて、通ふやうになれるよしなり。言すくなは、意をこめて、養ひる女なり。能く心して、其の意をまやまらぬやうにすべし

さりければ、此のもとの女、あしとれもへるけしきもなく、出だしたて、やりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらんと思ひうたがひて。

(語釋) さりければ、さあられぬなり○あしとれもへるけしきもなくは、詞に出だして、怨まきはぬはもとよりたてこゝろ意を、その辭にこめたるなり○男云々、あまらた、女の心のうつつきが故に、男は却りて、他の男に、心をうつせるを疑ひてなり

せんざいの中にかくれおて、かのかふちへいぬるかほにて見れば、此の女、さようけさうじて、うちながめて。

(語釋) せんざいは、前栽にて、庭前に植ゑたる草木をいふ。後園に對してはさ語なるべし。庭のうち、草木の蔭などに隠れ居たるなり○いぬるかほは、行くなりなり。かほは顔にて、櫛子をさ○けさうは、假粧にて、顔つくりするをいふ。夫の見ぬ所にては、身なりをへつゝあぢ、女のたてなみたるよしなり○ながめては、心配して、物れもあぢまをさること、前栽へへ入り。うづきは、例の添へたる言なり

風ふけばあきつしらなみたつた山

よはにや君がひとりこゆらん

(語釋) あきつしらはなみは、沖の白波なり。さて一二の句は、たつ田山をさへかひたる事にて、他悉なし○よはは、夜半にて、夜中の意なり○一首のころは、龍田山のやまをさの道はがわかくて、晝だてゝるして聞くに、山の此方にて、日くれて、よはにや君が獨りゆらん、さへへるこゝろも、さへへるこゝろも、思ひ給はんが、いとほしとなり。女の情、さもあるべし。但、この歌、しらなみとさへは、盜賊を白波とさへは、うれをもこめて、さへへる恐ろしき處を、夜こゆるが悲しとさへへるなるべしとさへを説きおれと、盜賊の事まで、こめたりとさへは、さへも聞てゆべければ、なほ、原とのみ見る方、あたやかなるべし

とよみけるを聞きて、かぎりなく、かなしとれもひて、かふちへも、さへをさへ、かよはずなりけり

(語釋) 歌よむを、前栽の中にて、聞きけるは、昔は、歌をよみては、聲あげて語りてさへありける故なり○かぎりなくかなしと思ふは、男もなほけ知れるものなり○しなり○さへをさへ通はずとは、今言にあまり通はずなほさへに同じ

こてまれ／＼かの高安にきて見れば、はじめころ、心にく／＼もつくりけれ。

(語釋) 心にく／＼は、今言に、れくゆかしくなほいはんが如し。さて此の高安の女は、始の中は、心れくゆかしくも思ひたれととなり

今はうちどけて、髪をかしらにまきあげて、をもながやかなる女の。

(語釋) 髪をかしらにまきあげて云々、昔は、すべて女は、垂髪なりき。宮中の式に預る宮女、また

は、齊宮などは、髪あげするを禮としたり。そのゆゑは、髪を垂れて、供御などに觸るゝを恐れたるなり。但、うれば、美しく擧げゆひて、恭しきさまなり。この頭に巻きあぐるは、賤しく無禮なるさまをいふ。似たる事ながら、大差あり。混ぶべからず。賤しき女は、立ち居ひまなく忙しきにより、背に垂れたるをも、額髪をも、一つに頭に巻きあげて、假りにゆふ事ありき。こゝなるも、やうなり。顔にかゝれる額髪をあぐれば、顔の長く見ゆるものなれば、ながやかなる女のこといへるなり。手つから、いひかひを取りて、けこのうづはものにもりけるを見て、心うがりて、かずなりにけり。

(語釋) いひかひは、飯匙にて、今の杓子なり。〇けこは、筥子にて、飯を器をいふ。萬葉にも、家にあれば、筥にも飯をなまあり。〇心うがりては、其のさまの下賤なる様子を見て、男は心たうしと思ひて、其の後は、行かすなりにけりとなり。

とりければ、かの女、やまどのかたを見やりて、君があたり見つゝを居らん伊駒山

雲をかくし雨はふるとも

(語釋) 見つゝをのとは、助辭なり。古今集の歌に、「ぬれてをゆかん」とあるを。に同じ。一首のころは、聞こえたるが如し。但、この歌は、萬葉集に「君があたり見つゝもをらん伊駒山、雲をかくし雨はふるとも」とあり。唯この句のをもをにかへて、記者の加へたるものなり。といひて、見いだすに、からうじて、やまど人こんといへり。よろこびてまつに、

たびく過ぎぬれば、

(語釋) からうじては、今言に、やうやく、又、ヤットなどいはんが如し。〇やまど人とい、彼の男をいせむなり。

君こんといひし夜ごとく過ぎぬれば

たのまぬもの戀ひつゝをる

(語釋) ものゝは、物ながらの意なり。頼みにはならじと思ひながら、心にかゝりて、戀ひつゝを居るといふ意なり。〇一首のころに、來んと聞こえつるに、來ぬ夜の多く過ぎぬれば、今はさるおとづれのあれど、思ひたのまれぬものながら、猶も戀ひしたひつゝ、月日の經ゆくとなり。といひけれど、男すまらずなりにけり。

(語釋) 男すまらずは、男道はずといはんが如し。〇此の段、女の心はべの勝れたると、分れるとの差別を書きわけたり。すべて、此の物語は、男も女も、意はへのあはれにすやれて、賤しき舉動をなすぬをよしとして、かきたるものなり。

(廿三段) むかし男女、かたおなかに住みけり。男みやづかへしにとて、別を惜しみて、ゆきけるまゝに、三とせとざりければ、まぢわびたりけるに、又、いとねんころにいひける人に、こよひはあはんとちざりたりけるに、

(語釋) 評釋にいはく、日本書紀の孝徳天皇の卷に、有妻妾爲夫被放之日、經年之後、適他恒理、而此前夫三四年後、食求後夫財物爲己利者甚衆と見えて、前夫の食るをあしとのたまへるなり。女は

ひとりば、世にあり経がたきものなれば、三年の後、異男にあは、かゝ古よりとがめなかりき。又、
 雜合云、雖已成、其夫没落外蕃、有子五年、無子三年不歸、及逃亡有子三年、無子二年不出者、並聽改
 嫁、これは、今の二の巻、戸令第八に見えたり。さてこのなるは、宮仕へしにきて、ゆきたるにて、合
 のとは異なれども、かゝる御定もある事なれば、三とせの後とは女のおもへるよしなり。古意に、
 女をほめて、男をわるしといはれたるは、いみじき言なり。三歳みさうけるも、身を心にまか
 せぬ宮づかへなればなり。別を惜しみて、行きけるといへるは、男のはかれがたくしたるにて、其
 の淺からぬ心をおもはば、三年こそすとも、なるやうこそあらめて、猶、まつべきに、異人におはん
 と契りけるは、女のおやまりなりけり。没落外蕃、又逃亡などの同じ類にはあらす云々もある説を
 よしとす

彼の男來たりけり。此の戸、あけ給へとたゞきけれど、あけて、歌をなん、よみて
 出だしやりける

(語釋) 戸をあけて、歌をよみて出だせるは、三年をさうけるを恨み、又、この男を入れては、今夜
 あはんと契りたる人に逢はんに、便あしければ、まづ、歌をよみて、出だせるなり
 あら玉の年の三とせをまぢわびて

たゞこよひこそにひ枕すれ

(語釋) あら玉は、年の枕詞〇まぢわびて云々は、待つにせんかたつきて、女の身のよるへんを、
 今宵は、異人と、にひ枕するとの意なり〇にひ枕は、新枕にて、男女、はじめて逢ふをいふ。かゝ

今夜のうらさを明らかに云ひ出たるは、違なる事にて、思ひめぐらすはまもなく、ひさうき田舎の
 女の、さかにも体よきまはは、得いはぬよしなり

といひいだしたりければ

梓弓まゆみつき弓とじを経て

わがせじがごとくするはこみせせ

(語釋) こゝも、次の歌も、はじめて二句は、弓をたて入たさへなるなり。此の歌は、神樂下り入る如
 く、神樂歌の「弓とさへはひにななきもの」を梓弓、まゆみつき弓にてあらうら「もさ歌ぞ、本哥
 下して、歌めるなり。此本歌の心は、おしなべて、弓とさへは、名に「な」はなきものを、こまか
 かわけて「な」時は、梓弓、まゆみ、つき弓、しなへ、こゝあるなれと「な」を認なり。たて入念なるへし。
 これをとりて、この歌は、夫婦とさへは、ひととほりのやうなれども、宮づかへたも出づるほどの
 事にて、種々のうき事をも忍びつゝ、年を経て、わがうるはしく、中よくせるやうに、君も又のち
 の夫に、うるはしくせよといへるなり。さてわが年頃うるはしくして、何事もしのひ過さし、よし
 を述べて、女の心みじかく、異男にあはんと契りたるを、深く怨むるこゝろ見えたり。本歌が、たゞ
 へ歌あれば、やがて、たゞへに用ひたるなり。されば、返歌も、初二句は、弓をたて入たさへり。照し
 合はせて見るべし。かゝとせば、弓の名を三つまで重ねたる事と聞かせ、此の歌に、女のいたく耻
 ぢくやみて、深く慕へるにも叶ふべし
 といひて、いなんとしければ、女

あはでぬる夜うひぢまひりける

(語釋) 秋の朝、野の笹わくる袖は、いたく露にぬるゝものなれども、うれよりも、つれなき人にもあはでぬる夜は、涙にぬれまざるとなり○ひぢまは、ぬるゝをいふに同じ○此の歌は、古今集卷の三下あり。但古今集には、「あはでこし夜う」とあるを、こしには、あはでぬる夜をなほして引きたるなり

いろこのみなる女かへし
(語釋) いろこのみは、好色の意なり。逢はじともしひ放たずして、男の心を極ますまじき、前下ひて、此の女の色でのみなる事を、いたく知らせたる文なり

みるめなきわが身をうらとせしらねばや
かれなであまの足たゆくくる

(語釋) 上の句は、我が身を、みるめなき浦とせしらねばやと、上下に打ちかへして見るべし。みるめなき浦とは、逢ひ難き身といふことなり。浦は、たゞみるめによれる詞のみなりと心得べし○一首の意は、逢ひがたき我が身を知り給はねばにや、夜ごとと、あしのたゆみに來たり給ふにたり。それを、みるめのなき浦に、海人のみるめをかりにくるに譬へたるなり

(廿五段) むかし、男、五條わたりなりける女をええずなりける事と、むびたりける人の、返事に

(語釋) 新釋に、いはく「これは、ある人、男のもとに、君は五條わたりなりける女を、え得ずなり給ひける事かなと、とあらひいへるなり云々○わびたりけるとは、こゝには、とあらふ事といふなり

り。男の女を得ずして、詫ひ居るをとあらふ詞なるゆゑに、それをむわびたりけるとはいひしなり。たとへば、家の内に、よるこひある時は、嬉しく思ひ居るものなれば、人の訪問するをも、よるこひにくるなごいふが如し
れもほえず袖にみなどのさむくかな
もろこし船のよりのばかりに

(語釋) おもほえずは、思ひもかけずの義なり○袖に涙のさむくとは、涙のあかき事をいふ。さむくは、涙によせたるなり○もろこし船は、唐船なり○よりしばかりは、よりしほどいふ詞なり。よりしのは、過去の詞なり。さて唐船のよるは、大濠にて、ことに、浪もさわぐことなれば、泪のあかきよしに寄せたるなり○彼のとあらひし人を、唐船に見なし、心のうれしさを、感涙のあかきよしにいひなしたるなり

(廿六段) むかし、男、女のもとに、ひと夜いきて、又もいかすなりければ、女のおやはらたちて、手あらふ所に、ぬきすをとりて、なげすてければ、

(語釋) ひと夜いきて云々は、男は女の許へ通ひ初むれば、三夜は、必、つゝけて通ふがならはしなり。然るに、一夜ぎりにて、通はずなりぬれば、人目も見ゆるしく、又、かゝるうはきなる男に逢ひそめたるは、女の考の至らざるゆゑなれば、女の親が、立腹したるよしなり○手あらふ所に云々は、朝、むすめの起きて、手洗ふ所に、親の來て、昨夜も、男の見えざりきとて、立腹せるなり○ぬきすは、貫錢なり。盥の上に掛くる簀にて、手洗ふ水の外へ飛び散らぬ用意のものなり。此の盥の上の簀

を投げたるは、顔洗ふ時は、殊に昨夜の事を思ひ起すものなればなるべし
たらひの水に、なくかげの見えけるを、みづから

(語釋) 盥は、水を手にとり、さかゆる時、したに置きて、水をうくる器をいふ。○なくかげの云々、
篋は、竹を編みたるものなり。親が、その篋を投げすてたれば、女の哭く影の、盥にうつれるなり。○
みづからは、娘をいふ。上には、親の事をいへるが故に、こゝはことさらに、娘の歌なりとことわり
なり

我ばかりものおもふ人はまたもあらじ

と思へば水のまたれもありけり

(語釋) 我が顔の盥にうつれるを、かくれるかた、いひなしたる、情の切なること思入し。此の歌
は、語も大意も、聞てえたるが如し

とよめりけるを、彼のこそりける男、きゝて

(語釋) こそりける男は、一夜のみにて、來すなりたる前の男をいふ
みな口にわれやみゆらんかはづさゝ

水のそこれてもろ聲になく

(語釋) みなくちは、水口にて、田へ水を壺き入るゝ口をいふ。盥の水は、水口の水のたまれるに似
たれば、たとへていふ。○此の歌は、心なき蛙さへ、水の底にて、ひどりはなかず、もろ聲に鳴くなり。
まして、我が心は、そなたにゆきて、君と共になくなれば、其のわが影の、たらひの水に見ゆるべき

あらんどの意なり

(廿七段) むかし、色このみなりける女、出で、いけければ、いふかひなくて、男

(語釋) いふかひなくては、今言に「フガイナイ」なほいはんが如し。女は、顔、好色のものにて、男
を厭ひて、出で、行きしに、男は之を悟らず、かへりて、それを慕ひて、歌を贈るべきなり。其の男
の心を、即「いふかひなし」とはいひしなり

などてかくあひかたみともなりぬらん

水もらさじとちきりしものを

(語釋) あひかたみは、逢ひ難きを、かたみといひかけて、かたみとなれば、汲める水は、もりてあ
となくなるを以て、詞をしたてたるなり。さてかたみは、かたまともいふ。竹籠の事なり。○一首の意
は、なに故に、かく逢ひがたくはなりぬらん。變らじと契りしものを、其の契を、女の捨ればせまじ
きを、誠にあやしき事とて、獨りとする意なり

(廿八段) むかし、東宮の女御の御かたの花の賀に、めしあげられたりけるに、近
衛づかさなりける人

(語釋) 東宮は、春宮とも書く。皇太子の御事なり。こゝは、東宮の御母女御を申すなり。女御は、中
宮に次ぐ女官にて、今の権典侍などの如し。○御かたとは、女御がたの御人の賀の義なり。○花の賀と
は、花の頭ある賀をいふ。○東宮の女御云々、近衛づかさなりける人とは、暗に二條の后と、兼平朝臣
との事をほのめかしたるなり

花にあかぬなげきはいつもせしかども

けふのこよひに似る時はなし

(語釋) 花を賞して、飽かぬ歎息は、常にすれば、今日の今宵は御質のわざのためたく、おもしう
さる添へば、花にあかぬなげきは、格別なりとの意なり。さて裏には、彼の女御を慕ひ奉れども、及ば
ぬ事よと、歎息するよしを、含めたるなり

(廿九段) むかし、男はつかなりける女のもとに

(語釋) はつかなりける女とは、男は度々慕ひたく思へど、女のいと稀れに、僅にのみ逢ふよしな
り。はつかは、わつかともいふ。僅の字の義なり
あふことは玉の緒ばかりおもほえて

つらきこころのながく見ゆらん

(語釋) 玉の緒ばかりとは、玉の緒の短きといふより轉りて、暫時などの意に用ふ。こころ然り○一
首の意は、逢ふ事は、玉の緒の短きが如くなるに、いかなれば、我につらき君が心の長く見ゆる事な
らんとなり。逢ふ事の短ければ、それに應じて、つらき心も短かくあるべきに、例のおろかに詠み
出でたるは、却りて情の切に見ゆるなり

(三十段) むかし、男、宮のうちにて、あるごたちのつばねのまへをわたるに

(語釋) 宮のうちとは、内裏をいふ○ごたちは、御達また御等の字をあつ。婦人の尊稱なり。こゝ
は、宮中にて、よき女房をいふなり○つばねは、局なり。部屋をいふ○わたるは、通ることなり

何のあたにかおもひけん、よじや、草葉のならんさが見んといひたれば、男

(語釋) 此處も、諸説あれど、新釋の説よろしからん。其の大意にいはいはく、局の前を男のわたるを見
て、うちなる女の、女のあたかたきにか思ひけん。しかくいへるなり。此のいへる詞の意は、我を
急れて、何とも思はぬ男は、にくけれど、よじや、腹たてすして、草葉のはては、霜かるゝやうになら
ん、男のありさまを見んといへるなり。草葉のしげるを見れば、ほどなくかるゝと、人の早くおどろ
かるに譬へたるなり。よじは、アリサマといふ意なり。群の字の義にあらず云々と、此の處、こと下
詞を響きたれば、誠に解しがたけれど、暫くこの説に據るべし

つみもなき人をうけへば、わすれ草

おのがうへにぞおもふといふなる

(語釋) うけへは、先祖の意にて、人の上を祈りて、あしくなす事をいふ。もとは、よきにもあしき
にもいへど、此の頃は、既にあしき方にのみへり○たのが上とは、己が身の上の意なり。さて除草
の己がうへにおおとは、人に除らるゝをいふなり○一首の意は、罪もなき人をいひて、あしくなす
んとすれば、却りて、おのが身の上にあしき事ありとの意なり
といふを、ねたう女もおもひけり

(語釋) ねたうは、嫉くの音便なり。罪もなき云々の歌よみけるを聞きて、女も嫉く思ひけりと
なり

(卅一段) むかし、男、ものいひたる女に、年ごろありて

(語釋) ものいひける女とは、たゞ物を言ひたるのみならず、逢ひたる事のあるをいふ
いれしへのしづのをたまきくりかへし

むかしを今になすよしもがな

(語釋) しづのをたまきは、倭文の麻環なり。倭文は、わが國にて、太古より織りたる文ある布なり。
その倭文を織る料の卷子を、麻環といふ。續麻にて外を圍く、内を處に巻きたるものなり。よてしづ
しへのしづのをたまきは、繰りかへしといはん料の序なり。かかは、願ふ意の辭なり。かは、必、漏
音によむべし昔めひたる女に、中絶えて、年へてのち、戀ひしくおもひて、又、あひたきよしそ
ひたる歌なり

とらへりけれど、何とおもはずやありけん

(語釋) 中絶したる男なれば、今更だ、あひたきよしといふとも、願ひべきにあらねば、女の何とも思
はずやありけん、記者の詞なり

(卅二段) むかし、男、津の國、うばらの郡に、住みける女に、かよひける。此のたび、
かへりなば、又はこじと思へるけしきを見て、女のうらみたれば、男

(語釋) 津の國は、攝津の國なり。うばらの郡は、和名抄に、攝津國、免原とある是なり。かよひけ
るにて、句を切り、下に、かといふ辭を入れて心得べし。外は、聞てえたるが如し
あじへよりみちくるしほのいやまじし

君にこころをおもひますかな

(語釋) あしへは、薩邊にて、若は海邊に生ずるものなれば、磯にしほのみちくるを、若邊よりとは
しふなり。このよりは、たそひあて 同 〇 さ ま じ し は、愈増の義にて、見るく多くなる事なり
か〇かかは、歎息の辭なり。さるは、かくまふも、思のかかくなるものかなといひて、心かはりする
ならんと、女の疑ひ怒ひは、辭言ふと諫むる意を、かくめたるなり。〇一首の意は、若邊にみちくる磯
の、見るがうちた、いやまじし、ますことく、君に心をおもひますかなとなり
かへし

こもり江におもふこころさしかでか

舟にすこをのさして知るべき

(語釋) こもり江は、山陰にこもりたる江なるべし。〇さしては、推し測りての意なり。〇君は心の中
に、こめたる思は、さしかでか、推量して、知ることを得べきとさし、縁に、舟にすこをのさしては、さ
へるなるべし

おなか人のことばにては、よしや、あしや

(語釋) 田舎人の歌としては、よしと覺ゆといふ意なり。しかし、實に此の歌は、記者のよみたるな
れば、よしとも定めず、あしやといふ詞を添へたるなり

(卅三段) むかし、男、つれなかりける人のもとに

さへはえにいはねばむねのさわがれて

心ひとつになげくころかな

(語釋) えには、不得なり。万葉に、不知をシラニと云ふ如く、不ぞと云ふは、古の二格なり。今言「しはんとすれば、言ひ得ず」の義なり○一首の意は、人のつれなきを、深く恨みて、いはんとすれば、詞には言ひ得ず。又、うの上しいはねば、胸の静まる時なく、心一つに歎く比かなと、歎息したるなり

おもひくへて、いへるなるべし

(語釋) かく切なる歌を贈るは、容易の事にあらず。思案に思案を重ねて、いへるなるべしと、記者が、男の心中を推量して、いへるなり

卅四段) むかし、男、心にもあらで、たえたる人のもとに

(語釋) 心にもあらでとは、男の心の變れるはあらで、故ありて絶えたるをいふなるべし玉の緒をあむをによりてむすべれば

絶えての後もあはんとぞおもふ

(語釋) あむをば、あむといふ結の名なり。これは、能くよりと云ふのへて、結ぶなり○一首のころは、玉の緒を、能くよりと云ふのへて、あむといふ結にむすひ堅めたるが如き二人の中なれば、たとひ、今は故ありて、中絶せるも、つひには、又、もとの如く逢はんと思ふとなり

卅五段) むかし、男、あすれぬるなめりととひごとしける、女のもとに

(語釋) とひごとは、問言なり。久しく音信し給はぬは、忘れ給ひしゆかと、女のいひあこせたるに、男の答へたるよしなり

谷せばみ峯までは入る玉かつら

絶えんと人をわがおもはなくに

(語釋) 谷せばみは、谷の狭ばさなり○玉かつらは、玉峯にて、萬の事なり○おもはなくにば、思はぬといふに同じ○一首の意は、谷かせばらに、峯まではひのぼれる玉峯の、長くつらきたるが如く、行末ながく通はんを、われは思へるに、忘れたるなるべしと、問言し給ふは、却りて、そなたの情薄きに似たりと、餘情をもたせるなり○さて、此の歌は、万葉集、十四の巻に「谷せばみ峰にはひたる玉かつら、たえんのころわがおもはなくに」とあるを、少しなほして、例の記者がつくりたるなり

卅六段) むかし、男、いろこのみなりける女にあへりけり。うしろめたくやおもひけん

(語釋) うしろめたしは、今言に、「心モトナシ」又「心ニカ、ヤ」などいふに同じ。好色なる女に逢ひたるなれば、男は不安心にや思ひけん。左の歌を贈れりと、記者の詞なり

われならでと紐とくなあさかほの

夕かげまたぬ花にはありとも

(語釋) あさかほは、朝の間だけ、花さきて、夕日のかげもまたで、萎むものなり。さるかはりやすき花にはあれど、我ならでは、下紐とくことなかれとなり。これにて、一首の意明らかなり○毛髪などに、女を聲にたとへたるは、ほめたる方なれど、こゝは、かはりやすきをたとへたるなり

かへし
ふたりして結びし紐をひとりして

あひ見るまではとかじとぞおもふ

(語釋) 歌のこゝろ隠れたる所し。但、萬葉集に、「二人して結びしひもを一人して、われはとき見ただだにあふまでは」とあり。それをつくりかへて、こゝに似つかはしくこゝらへて、返歌となせるなり。この例、前にも多し

(卅七段) むかし、紀の有常、ものへいきて、久しうかへらざりけるに、いひやる

(語釋) 紀の有常は、前に「へり」の「へり」きてとは、其の事を尋きて、何處とも名どあひびや言なり。「物する」などのものと同じ。其處へゆくを、ものへゆくといふなり。○親友なる、有常は、外へゆきて、久しく歸らねば、戀ひしと堪へずして、いひやりたりとなり
君によりおもひならひぬ世の中の

人はこれをや戀といふらん

(語釋) この歌も明らかなり。君をこひ慕ひて、はじめて思ひならひぬ。世の中の人、かやうの事をや、戀といふなるべし
かへし

なればねば世の人ごとは何をかも

戀とはいふと問ひし我しも

(語釋) ならはねばは、習はねばなり。○何をかもは、何をかマアの意也。○我しものしもは、助辭なり。○一首のこゝろは、前の歌に、「世の中の人、これをやこひといふらん」といふを承けて、世の中の人ごと、戀といふは如何なる事といふにかと、今までは、習はねば、人に問ひしわれも、君が戀の師となりける事よとなり

(卅八段) むかし、西院のみかどと申すみかどおはしましけり。

(語釋) 西院のみかどは、淳和天皇を申す。西院は、また、淳和院ともいふ。四條の北、大宮の東なり。ありきとぞ。もとは、福大后の家なりしなり

其の帝のみこれ、たかいこと申すいませかりけり。

(語釋) たかいは、崇子内親王にて、淳和天皇の御女なり。此のみこは、承和十五年五月十五日に、御年十九にて、みまかり給へるよし、續日本後記に見えたり。御母は、橘姫子、正四位上清野の女なり。○いませかりけりとは、おはしましけりといふに同じ

そのみこうせたまひて、おほんはふりの夜、其の宮の隣なりける男、御はふり見んとて、女車にあひのりて、出でたりけり。

(語釋) おほんはふりは、御葬なり。其の御葬送の作法を見んとてなり。○女車にあひのるとは、男が女に同車したるなり。これは、かくれて見に出づるさまなり

いとひささう、おて出で奉らず。うちなげきて、やみぬへかりけるあひだに、

(語釋) 眞淵翁の説に、輜車を挽きて出づるが、いとあそきを、待わひつゝ、歎息して、今は見すし

てかへらんとする間になりといはれたるが如し

あめのまたの色でのみ源のいたるといふ人、これももの見るに

(語釋) あめのしたの色このみとは、天下第一の好色家といふ意なり。この詞、他書にもほし〇源の至とは、何人とも知りかたし〇もの見るには、前に御葬見んとてあれば、こゝは、たゞ、かくいひて、やはり、御葬を見ることが知らせたる文なり

此の車を、女車と見て、よりきて、どかくなまめくあひだに、かのいたる、螢をとりて、車にいらたりけるを、

(語釋) どかくなまめくとは、此の車は、女車なれば、好色家のつねとして、しるくとも、なまめくしきよまして、懸想せりとなり

車なりける人、此のほたるの、ともす火にや見ゆらんとおもひて、けちなんとす。さてのれる男のよめる

(語釋) けちなとは、消すといふに同じ〇車なりける人とは、女をいふなり。何となれば、下「男のよめる」とありて、殊に男のことを擧げたればなり

いでいなばかきりなるべしともこしき

年へぬるかどなく聲をきけ

(語釋) いでいなばは、御葬の御車を挽き出でなば、これが、かきりの御門出なるべし。身の火つきで、終りたまふも、齡へたまふものか、かく弱くかはするを、人々の哭音を聞けと、なまめく

至下示したるなり〇ともこしきは、燈籠にて、皇女の死に給ひしをいふ〇年へぬるかとは、年へぬるかかの意にて、御年経たまひて、御老年のことならば、止むを得ざれば、また、二十にも足り給はずして、かくれ給ひぬる事なれば、人々の悲しみ歎く聲を聞け、かゝる折に、女車を見て、けちなかゝるは、折を知らざる事よとの意を含めたるなり
かのいたるか
いとあはれなくぞ聞こゆるともこ火の

きゆるものとも我はしらすな

(語釋) 前の「なく聲を聞け」とあるを承けて、まことと、悲しく歎く聲を聞こゆる。まことと、いきて、君はしへど、佛説にも、常住不滅を説けば、きえはつるものとも、我はしらすとなり〇なば、御辭なり〇古意には、此の歌を脱したり

どなんかへしたりける。天のしたの色でのみの歌にては、なほすありける。

(語釋) なほすありけるとは、尋常にありけりとなり。なほは、なほくしなをいふに同じ。尋常といふ義なり。此の返歌、天下第一の好色家の言まはるに似ず、なまめくの、世の中の人の如くに覺ゆとなり

「至は順が祖父なり。みこの本意なし」

此のことなき本をよしとす。後の書き入れたるものなるべし

(卅九段) むがし、わかきをのこけしうはあらぬ女をおもひけり。

(語釋) ひじうはあらぬ云々、ひじうは、異じくの音便にて、わるくもなして、義なり。勝れてよじをいふ意にはあらず

さかしてするおやありて、おもひもぞつくるとて、此の女をほかへおひやらんとす。

(語釋) さかしてする親とて、かしてだてする親の意なり。今言、リコサフリスルの意なり。其のゆゑは、此の若き男が、今かたらはんとする女を、逐ひやる親なれば、かくいへるなり。こゝによりて見れば、此のけしうはあらぬ女であるは、此の男の家を、めしつか女なりしなり○おもひもよすするとは、かくておかば、思ひつきて、離れがたくやならんと、行末を危くおもふさまなり。さこそいへ、まだれひやらす。人の子なれば、心のいきほひなくて、えとよめず。女もいやしければ、すまふちからなし。さるあひだに、おもひは、いやまじりにまゐる。

(語釋) さこそいへは、今言に、サウハイドなどいはんが如し○まだおひやらすとは、逐ひやる親は、いへど、また事の上を見ても、そのまゝにおくよしなり○人の子とは、いまだ、我が代にはあらで、父が家事をとりをる事を知らせたる文なり○心のいきほひなくて云々、かく家事萬端、父の賄ふ事なれば、愛情をかかれど、女をとりむる勢力なしとなり○女もいやしければとは、下婢なることを知らせたるなり○すまふは、負けじと争ふことをいふ。こゝは、家を出るじと、踏みてらへん力なしとの意なり○さるあひだに云々、女を逐ひやりませず、父が事の上を見てをる間となり。

なり。すべて、他人に制せらるゝ時は、殊にまざるが、戀のならひなればなり

にはかた、おや、此の女をおひうづ。男、ちのなみだをながせども、とらむるよしとなじ。おて出で、いぬ。

(語釋) ちのなみだは、いたくなげきたるをいふ○おて出で、いぬとは、親めしつか人に入らひつけて、其の女をつれて出でゆかしめしなり。其のゆゑは、次の文に「かへる人につけて」とあるより知られたり

女、かへる人につけて

(語釋) おて出で、いぬし人の、かへる人につけて、男のをもへ、女が歌おれくれるなり
さうしてめでちくりはこしと人をいふ

あかぬわかれのなみだ川まで

(語釋) なみだ川は、かゝる名の川あるにはあらねど、飽かぬわかれの、涙を川のやうにながして、我がなげき居るよしを知らせたる意なり○一首のこゝろは、何處まで、おくりたるぞ、思ふ男の問ひたらば、涙川の邊まで、送りてかへれりと、答へよとなり
男、なくなくよめる

(語釋) なくなくは、泣きながらなり。送れるものゝ、かへり来て、右のうたを語るを聞きて、あはれに堪へず、泣くなく詠めるよしなり
いとひてはたれかわかれのかたからん

ありてはなほさるけふはかなしも

(語釋) 新釋にいはく、此の歌は、互にいとひては、たれか別のかたからん。わかれやすかるべし。かくおもひかはして、いとほぬ中は、わかれのかたければ、さきに、親のおひやらんとして、またおひやらざりし時にまゐりて、今日はおなじもといへるころなり。此の歌は、なげきのころをそへたり云々。此の説よろし。諸説、おほかた、解き得ず。とよみて、たえいりければ、おやあわてにけり。なほざりておもひてころいひしか。いとかくしもあらじとおもふに、まことにて、たえいりたれば、まどひて、願などたてたり。

(語釋) なほざりとは、尋常、又、ひと、ほりなどの義なり。○いひしかは、疎めいひしかにて、親は、ひと、ほりの事と思ひ、いひけりとなり。○かくしもあらじとは、かうはあらじなり。絶え入るやうの事は、あらじと思ひしに、誠に絶え入りぬとなり。○願など云々、神佛にやわんかけて、いかに、此の人、たすけ給へと祈りきとなり。

けふの入相ばかりに、たえいりて、又の日の、いぬの時ばかりになん、からうじて、いき出でたりける。昔のわか人は、さるすけるものおもひをなんしける。今の翁、まことに、しなんやは

(語釋) 入相は、日没の比をいふ。○からうじては、今言下、ヤットなど譯すべし。○昔のわか人は云々、記者の評なり。凡、わかき人は、ものを深くおもひします、心のうつりゆくものなれど、昔は、人

の情ふかかりしかば、さるすけるものおもひをなんしける。今の世は、人情、おのづから、あまければ、深くものを思ふ翁といへども、まことに、爲なんやは、しはせじとの意なり。

(四十段) むかし、女はらから、ふたりありけり。ひとりは、いやしき男のまじりき、ひとりは、あてなる男のとくあるもちたりけり。

(語釋) はらからは、同胞にて、こゝは姉妹をいふ。○まじりきの下に、「持じ」といふ意を含めて見るべし。○あてなるとは、貴人をいふ。あては、上品などの意なること、前下に入り。○とくは、徳の意なれど、中古の書には、金銀財寶に富みたるを、「とくあり」といへり。こゝも然り。

いやしき男もたる、しはすのつごもりにて、うへのきぬをあらひて、手づから、はりけり。ころごはいらたしければ、さるいやしき男もならはざりければ、うへのきぬの、かたをはりやりてけり。

(語釋) もたるは、持ちたるなり。此の下に、おの辭を加へて、見るべし。○しはすのつごもりは、十二月の晦日なり。元日の用意に、袍を洗ひたるなるべし。○うへのきぬは、和名抄に、袍(和名字倍乃岐沼)一名朝服著禰之袷衣也とあり。手づから洗ふは、貧乏して、召使もなきよじなり。○ころごはいらたしは、かかれこれと、心配はするけれども、もと、賤しき生ひたせであらねば、かゝる賤しきわざになれず、あやまちて、袍のかたを破りきとなり。○やるは、破るの古語なり。せんかたもなく、たゞ、なきになきけり。

(語釋) たゞなきになきけりは、極めてせん方なきよしと、あらはせる文なり。外の事は、何とせ

す、ナイテバカリ居ッタとなり。明日の料にと思ひし、唯、ひとつのを破りたるなれば、まこと
に、かなしかりぬべきわざなり

これを、かのあてなる男きよて、いと心ぐるしかりければ、いとさきよらなる、ろう
ろうのうへのきぬを、たゞかた時に見いで、やるとて

(語釋) 心ぐるしかりければとは、今言に、氣の毒なりければなほいはんが如し〇ろうろうは、縁
袂の音を、なだらかにいへるなり。さて、この縁袂は、六位の人のきる袍なり〇たゞかた時に見
で、云々は、彼の十二月の晦日のことにて、今は、明日の料なれば、いとさきよらなる事を
と、又、此の贈れる家には、かゝる物も、かねて、設けてありける富人なる事とを、知らせたる文なり
むらさきの色こそきはめはるに

野なる草木もわかれざりける

(語釋) 拾穂抄に、紫を女にたとへたり。籠のかかき時は、うのゆかりまでも、あはれに思ふとな
り。野なる草木とは、紫のゆかりと見れば、いづれも、むつまじとなり。あはるは、目も通かなる
なり。又云、妻を大切におもふゆゑに、其のゆかりまで、あはれとおもふなれば、こゝろくるしき事
を、聞きすべしがたると、此の袍をまわらすとなりといへり。此の説にて、大意聞てえたり〇又、古
意に、此の歌は、古今集に妻のおととをもちて侍りける人に、うへの衣をおくること、よみてやり
ける。業平朝臣とはしがきして、歌は右にたがはず。これは中將の妻の妹を妻として在りける男
も、共に紫着るべき人にて、むらさきの袍をおくるゆゑに、歌に紫のとよみて、下は、其の紫草のた

ある、同じ野の草木をあげて、皆ながらうつくしまるゝにたとへたるのみなり、云々といはれたり。
合はせ見て、うのこゝろをささるべきなり

むらさきのこゝろなるべし

(語釋) これは、古今集に、よみ人しらす。むらさきの一もとゆゑにむらさき野の、草はみなからあ
はれとぞ見る」といふなり。この歌を畧きて、引きたるなり。さて前の歌をたしかに知らぬよし
に取りなして、むらさき野の歌のこゝろなるべしと、記者の釋したるなり。さてこの歌の意は、みな
からは、皆ながらなり。大意は、一本の紫あるがゆゑに、廣き野の草木まで、皆、うつくしまるゝ心
地すとのこゝろなり。一本は、わざとせまきいひて、いとひろきに對せるのみなり

(四十一段) むかし男、いろこのみとしるゝ、女をあひしれり。されど、にくゝは
たあらざりけり。

(語釋) 色このみとしるゝは、好色の女とは知りながらの意なり〇あひしれりは、相互に知りあ
ふにて、なじみになれる意なり〇されどにくゝ云々は、好色なるは、かはりやすく、あしければ、
又、にくからぬ所もありとの意なり〇はたは、諸説あれど、ま亦の義に解して、難なかるべし。但、又
といふよりは、すこし軽く用ふる例なり

しばしば、いきければ、なほ、いとうしろめたく、ごりとして、いかで、はた、えあるま
じかりける中なりければ、

(語釋) なほは、今言下、ヤツバリの意、うしろめたきは、心もとなく、不安心なるをいふ。厭、道は、女の心かはりするわけもなく、さては、不安心なる事なき筈なれど、やはり、不安心に思ふは、たのみ難く見ゆる女なればなり、○さりとて云々、さりとては、然しながらなほはんが如し。厭、かよへと猶不安心に思ふほどの女ならば、通ふことを止むべきに、然しながら、思ひきる間からたもあらざりければの意なり○いかではたえあるまじければは、行かでも亦あることを得ざればの意に心得べし。はたの語釋は、前に委し

ふしか、三日ばかり、さほる事ありて、えいかでなん

(語釋) 二日三日ばかり用事にまへられて、行く事を得ずとなり、しばしく通ひても、女の心のかはらん事を心配せるに、まして、二日三日ゆかぬ事なれば、使をやりて、歌をおくり、いかに返事するやと試みたるなり

出で、こころさだに、いまだかはらじを

たがかよひちと今はなるらん

(語釋) 出で、こころは、男が女の家をなり。すなはち、出で、歸り來し、我が足だに、いまだ、消えずあらんを、うなはは、心かはりて、異男を通はし給ふべければ、誰か通路を、今はなるらんとの意なり

ものうたがはこころ、よめるなりけり

(語釋) 記者の詞なり。この歌をおくれるは、女の心の、まこと、あだに見ゆるがゆゑに、二日三日

日のほかに、變りやせんとてなりと、おくれるよしを釋したるなり

(四十二段) むかし、かやのみこと申すみこおはしましけり。そのみこ、女をおぼしめして、いとかこしく、めぐみつかうたまひけり。

(語釋) 賀陽親王は、桓武天皇、第七の皇子にて、齊衡二年に、三品より二品に進み給ひき○女をおぼしめしとは、女に御心をかけ給ふをいふ○かこしくは、能くといふ意に心得てよろし○つかうはつかひの音便なり。女に御心をまめ給ひて、よく恵みつかひ給ふゆゑに、よき女の、あまた、参りまじらふ意をこめたる文なり

いとなまめきてありけるを、わかき人は、ゆるさざりけり。

(語釋) いとなまめきてとは、大勢つかひ奉る女の中に、殊に勝れて、醜麗なる女をいふ。其の殊に勝れたる若き男は、ゆるさずして、彼是と言ひ寄りきとなり、

われのみと思ひけるを、又、人きゝつけて、文やるとて

(語釋) 通ふ男の、我ひとりと思ひたるを、是よりはやく言ひかはしたる男のありて、其の男が、我のみと思ひ居る男の事を聞きつけて、うらみの文やるなり。これは、一人の女に、二人の男の言ひよるなり。古意に、一人の女に、三人通ふなりといはれたるは、いかにほとゝきすのかたをつくりて

(語釋) 文やるとて、時鳥のかたをつくりて、文にそへたるなり。さるは、女を子規によらへたる歌、文の中に、かきてあるゆゑなり。是、古の風流のわざなりと、新釋にいへるにて、明らかなり

ほどいぎすながなく里のあまたあれば

猶うとまれぬおもものから

(語釋) なほうとまれぬは、やはりうとまるゝといふ意なり。此の歌は、五四と、句を顛倒して、意をとるべし。子規よ、汝が鳴く里のあまたあれば、なつかしく思ふものながら、猶、うとまるゝといふ意なり。是は古今集の夏の歌にて、たゞ、子規のうへのみなるを、こゝにかくはしがきを作りて、人々に心かよはする女にたとへたり

といへり。この女、けしきをとりて

(語釋) けしきをとるとは、今言に、機嫌をとるといはんが如し。男の機嫌を女のとるなり
名のみたつこでのたをさはけとぞなく

いほりあまたにうとまれぬれば

(語釋) しでのたをさとは、郭公かくこうの異名なり。駿の田長の義、勸農の意にて、鳴く鳥なれば、各うとらふ。○名のみたつは、子規は、あまたの里を鳴きわたるといふ名のみたつたるにて、實はさにもらず。あまたの人にもとまれぬれば、かなしむに、今やなくといへるなり。さて其の裏の心は、又、異人にもいふやうにのたまへと、さやうの身の上ならず、君にうとまれし悲しむた、こゝなげとなり。下の句に、あまたに疎まれぬればといひて、君に疎まれじかなしむになくといふてゝるを、命めたるなり。○いほりは、田長といふより、其の人の住む家の多きを、詞の縁にさへるのみなり
時はとつきれなんありける。男か(と)

(語釋) さつきは、陰曆五月なり。時をかきたるは、歌の中の郭公をたすくるのみ。是、記者の詞なり

いほりおほきこでの田長はなほたのむ

わがすむ里に聲したえずば

(語釋) 前の歌を承けて、よめるなり。一首の意は、此處、彼處に、鳴きわたる子規は、うとまれぬれば、我が住む里に聲たえずば、やはり、たのみにすべしとなり。田長は「の下た」うとまじければ、も「といふ詞を加へて意をとるべし

(四十三段) むかし、男ありけり。あがたへゆく人に、うまのはなむけせんとして、よびたりけるに、

(語釋) あがたへゆくとは、京より任國へ行くことをいふ。○うまのはなむけとは、馬の鼻向にて、もと、旅ゆく人の、馬の鼻をうなたへ向けて、見おくるより出でたる語なり。うれよりうつりては、たゞ、戯別する事にも用ふ

うとき人あらざりければ、家とうじして、益さゝせて、

(語釋) うとき人にしのは、助辭なり。親しき中なりければ、妻まで出だして。離別の益さゝせりとなり。○家とうじは、家、戸、主を音便にさへるなり。戸は家なり。じは主の聲にて。「一家の内をつかまはる主婦をいふなり

女のとうぞくかつけんすとす。主の男よみて、裳のこことゆひつけとす。

(語釋) かつきは、纏頭の意なり。こは、かつがせんの意にて、たくらんとすとの意なり○はすは、妻につけをするなり○さてかやうにかけるは、あるじの男が、妻にかはりて、よめる歌なることを知らせたる文のさまなり

出で、ゆく君がためにとぬきつれば

我さへもなくなりぬべきかな

(語釋) もなくは、裳なくと、喪なくとを兼ねたり。喪は、すへて、よからぬ事をいふ詞なり○一首の意は、君がために、我が裳をぬきたれば、裳のなくなりたりといふが、詞の上にて、妻の心は、君が出發を祝ひて、我が身まで、禍事なくなりぬる事よとの意なり。事もなきをまたよみて、意がわし。味はひて知るべし

此の歌は、あるが中に、おもしうければ、こゝろをためてよまずば、腹にふかきあちはひもいでこじ

(語釋) 右の歌は、深く意を含めたる歌なれば、注意して、解せずば、味なからんと、記者の釋したるなり。さて此の詞なき本もあり。それもあしからず

(四十四段)むかし、男ありけり。人のむすめの、かじづく、いかで、此の男にもものはんと思ひけり。うち出でんことかたくやありけん

(語釋) かじづくは、恐付にて、畏れ敬ひて、大切にする意なり。さてかじづく人の娘の義にて、大切にする人の娘の意なり○いかで云々は、今言に、ドウツツして、此の男にあはんと思へど、娘心には

つかしくて、いひ出で難くやありけんとなり。さて心の中に、思のむすはれたるは、さはゆる、戀の病となれるよしなり

ものやみれなりて、こぬべき時に、かくこそ思ひしかとらひけるを、おやきしつけて、なくなくとつげたりければ

(語釋) ものやみとは、何病ともなく、煩ふをいふ。乃、氣鬱病なり○かくこそ思ひしかとは、死ぬべき時になり。娘がこれの病氣は、彼の男を慕ひしたために、かくなりけるなりと、側の下婢などに語りけるを、親の聞きつけたるなり○なくなくとつぐるとは、親は娘にさる事ありきとも、つゆ知らずして、かく今はの時になれるが悲しく思ひつゝ、告ぐるよしなり

まどひ來たりけれど、死にければ、つれくごと、こもりをりけり

(語釋) まどひ來たりとは、娘の息のある間、一目おはんとて、足をそらた、飛びくるさやまをいふなり○かく急ぎ來たれど、かひなかりしかば、つれくとなす事もなく、まどひしく思ふことありきとの意なり

時は、みな月のつこもり、いとあつきころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてや、すゞしき風吹きけり。螢たかくとびあがる、此の男ふせりて

(語釋) みな月は、陰曆六月をいふ○つこもりは、晦日をいふ、月ヨモリの義なりとぞ○あそびは、管絃歌舞の類をいふ○よひは云々は、宵の間は、柩の前にて、笛をき、琴ひきなどして、遊びをするをいふ。人の死になる時に、管絃歌舞するは、我が國、古來の風俗なり。今も神葬に、音樂あるは、此の

遺風なるべし

とみ螢雲のうへをさすぬべくは

秋風ふくとかりたつげこそ

(語釋) つけてせは、告げよと願ふ意なり。雁は、秋風にうらはれてくるものなるに、今、夜あけて涼しむの、はや秋風の吹きたちたる心地すれば、雁につげこそと、螢にまつらるなり。懸断た、魂は冥漠に歸するものなれば、螢の高く飛びあがるにつけて、魂にまたたき歸りことを告げよとす。心を、雁は春かへりても、秋は又來るものなれば、ようへて雁につげこそとよめるにや。此の男みあせりてとしかには、此の意もあらんやうに覺ゆとすへり。雲のうへをさすぬべくはとみを思ふに、實に雁にようへて、魂にかへりてとみを意ある歌なるべきや
くれがたき夏の日々らしながむれば

そのことなくものづかなじき

(語釋) くれがたきとは、夏の日は長きに、殊に前文にある如く、「つれく」ともりたる「なれば、」へるなり○ながむとは、今は眺望の義にのみへと、古は物おもふ事とす言なり○ものづかなじきは、何となく悲しきとすこと、前にへるが如し○一首の意は、相親しむに女たあらば、往事を思ひ出で、彼是を悲しきとすはなれど、我をこひて死にたる事なれば、この心のいとほしむに、夏の日の日々らし、思ひつゝけて、何となく悲しとなり

(四十五段) むかし、男いとうるはしき友ありけり。かた時とらず、あひ思ひける

を、人の國へいきけるを、いとあはれとおもひて、わかれけり。月日経て、おこせたる文に。

(語釋) うるはしき友とは、親友のことなり○あひ思ひけるを、かの意に心得べし○人の國とは、他國をいふ。こゝは、京都の人より、他國をいふなれば、田舎をいしたるなり○いとあはれとは、今言に、甚、のこりおしいなといはんが如し

あたましう、えたいめんせで、月日へにける事、むすれやし給ひけんといたく、思ひわびてなん侍る、世の中の人このうは。めかるれば、むすれぬべきものにてこそめめれ

(語釋) あたましうとは、今言に、ナシカラスなといはんが如し○えたいめんせでは對面する事を得ずての義なり月日へにける事は、ことかなとす意にて、歎息の意を含めたるなり○思ひわびてとは、おもひにせん方なきとす○今言に、思案にくれてなとすはんが如し○侍る、こゝにては、居マスといふ意に見るべし○めめるは、巨離^{カタ}にて、離れて相見ぬとす○すべて、こゝは、友だちよりおこせたる文の詞なり

といへりければ、よみてやる
めかるともおもほえなくにわすらるゝ

時しなればおもかげにたし

(語釋) おもほえなくには、覺えぬとすに同じ○時しのは、助辭にて、意味なり○一首のこゝ

いろは、我は目かるとも覚えぬに、いかで、かやうにのたまふぞ。よてめかるとも、たげえずとら
は、此方には危らるゝ時なければ、つねに面影にたつゆゑなりとなり。第二句、おもほえなく下
に、詞を含めたるなり。味はふべし

(四十六段) むかし男、ねんごろに、いかでとおもふ女ありけり。されど、此の男
を、あだなりとさきて、つれなごのみまじりしとらる

(語釋) いかでとれどもは、今言に、トウヤして、あは、おもほえなく下同に、おたは、離りやすきと
らるること、前に發して、いへるが如し

大ぬさのひく手あまたにきてゆれば

おもへてこそたのまざりけれ

(語釋) 大ぬさは、臍斷下、顯昭の説を引きて、藏する下、陰陽師のまじたる申下したるしてなり
はらへはてぬれば、これを、かのく、ひきよせつゝ、なづるものなりとらるるが如し○一首のこ
ろは、大ぬさのひく手あまたなるが如く、あまたの所に通を君なれば、ねんごろにのたまふとば、も
とからす思へど、えたのみにし侍らず。それがため下、よろしく、つれなく申すなりとの意な
り

かへし男

おほぬさと名にこつたてれなされても

つひたよるせばありてまものを

(語釋) 新釋に、歌のおもては、大ぬさはひく手あまたなりと、名にこそたてれ。川にながれて、つ
ひたよるせのありとらるるを、ひく手あまたなりとて、いとあへき事ならずとらるる意をさくめて、
いひ發したるなり。又、たごへたる下の意は、あまた所に通かて、名にこそたてれ、見給へよ、ゆく末
に、つひたよる所は、あるものを、いとひ給ふは、心得ずとらるるなり。其の上る所は、君なりとら
でおもはせたるなり。よてなかれてもいとらるるは、つねのてまとは異なり、もは軽く添へたる下て、
ながれてもいと意なり、したの意は、行末にいとあためたる下ても知るべし云々とらるる。この
説にて、よく聞てえたり

(四十七段) むかし、男ありけり。うまのはなむけせんとて、人を待ちけるに、こさ
りければ

(語釋) 文意も、語釋も、よく聞てえたり

今やしるくるときものど人またん

里をばかれずとふへかりけり

(語釋) 此の歌、一二の句、くるしきものと、今やしるるといふべきと、それにては、五七のことは下
叶はぬゆゑに、あまのまにしたるなり○一首のころは、來ぬ人を、まつ事のくるしきものと、今や
しる。此のくるしきと思へば、人まつらるる里をば、絶えずとあへき事なりとらるる○かれずは、離れずな
り

(四十八段)むかし、男、いもうどのをかしげなるが、琴ひきけるを見をりて

(語釋)をかしげなるとは艶にうつくしきをいふ此の外の語釋聞てえたるが如し
うらわかみねよげに見ゆる若草を

人のむすばんことをしぞおもふ

(語釋) うらわかみは、未若みなり○ねよげは、寝よげなり○若草は、愛つらしくなつかしきもの故に、夫婦にもたとへたれば、妹弟にもいへるなり。又わか草なれば、行末に、人のむすばんことを思ふとなり○ことをしぞおもふのしは、例の助辭なり。一首のころは、かくばかり、共寝しよげに見ゆる若人を、人のものとなさんが、惜しく思ふとなり○すべて、この歌は、未といひ、根といひ、結といふも、草の縁語にて、したてたるなり
かへし

初草のなごめづらじきことのはぢ

うらなくものををもひけるかな

(語釋) 初草は、若草といふ。初草のやうにたゞを放て、めづらじきをうかへれり○うらなくは、心の裏につゝむ事なきをいふ。此の歌の意、諸説、おほわたとを得ず。新釋のみよふし。其の大意にらば、此の歌の意を、たゞ言にていはず、いかなれば、かくめづらじき事そのたまたま。かねて、兄弟の事ゆゑ、うらなくへたてなく、思ひまわらせけるかな。かゝる心ある君と、かねてしりな

は、うらなくは思ひまわらすまじきものぞ、なごめづらじきをうかへれり○うらなくは、くやみて、嘆息したるなり。けるかなの例、昔、さやうにやありける云々と、此の歌にて、聞てえたり

(四十九段)むかし男ありけり。うらむる人をうらみて

(語釋) うらむる人とは、女をさせり。女の方より、あたなりと怨みたるを、そこらあたなれとらみて、よみてやれるよしなり

鳥の子を十づゝとをばかどぬとも

いかゞたのまん人のころを

(語釋) 鳥の子は、鶏の卵をいふ○十づゝとをとは、百なり○一首の意は、雞卵を百かゝぬるは、至難のわざなり。しかし、この至難の事は、重ぬる術ありとも、あたにわたりやすき人の心を、とらとめん事は、術も力も及はじとなり

とらへりければ

朝しゆはきえのこりてもありぬべし

たれか此のよをたのみはつべき

(語釋) 此のよとは、男女の中をいふ言なり。こは、夫婦となりて、未ながく、頼みとする事かき得べきか、否、たのむ事を得ずとの意なり○一首の意は、朝露は、はかなく消ゆるものなり。こかし、千萬のうち一つは、消えのこる事もあらん。然るに、世間のあたにわたりやすき男の心は、千

萬の中に「つも、かはらぬをいふはなし。君も今は」いかゞたのまん「なまのたまへを、種なくか
るべければ、頼みにしたたりとも、未とげぬ事ならんを、歎きたる意を含めたるなり

また男

吹く風にこそこのさくらにはちぢらずとも

あなたのみがた人のこころは

(語釋) こころは、去年なり○前の歌に、朝つゆのたをひをとりて、巧に入れば、此の歌も、深くた
くめるよしなり。一首の意は、去年の柳の花の、吹く風に散らすある事は、もとよりあるまじきこ
なれど、もし、それはありとも、あゝ、たのみがたし。人の心はとひ入るなり○この歌は、六帖に、在
原のとき春のうたに「ちぢらずして去年のさくらにはちぢらずとも、人のこころをいかゞたのまん」とあ
るを、少しなほして、こゝに合はせたるなり

又、女かへし

ゆく水に數かくよりもはかなきは

おもはぬ人をおもふなりけり

(語釋) 數かくとは、一二三の數の文字を書くをいふ○はかなきは、今言に、ヤクニタノヌな
いはんが如し○二首の意は、流るゝ水に、數書くは、忽、きえて、跡のたまらねば、まこと、はかな
き事なれど、ちぢりよりも、思はぬ人をおもふは、すこしのしるしも見えねば、まゝりてはかなき事よ

となり○このうた、古今集には、戀に入れたり

あたくらべかたみにまける男をんなの、しのびありきしけることなるべし

(語釋) あたくらべは、互ひにまけじと、あだなるあるまひをなすことなり○かく互に、たのみ
きよしの歌なとよみかはすは、男女のあたくらべして、しのびありきしける事なるべしと、肥者の
詞なり

(五十段)むかし男、人のぜんさいに、菊うゑけるに

(語釋) ぜんさいは、前裁にて、庭園をいふ
うゑしうゑば秋なき時やさかざらん

花ころちぢらめ根さへかれちや

(語釋) うゑしうゑばのしは、助辭にて、植ゑ植ゑはなり。戀ひ戀ひて、ぬれくつてなごらふと阿比
く、重ねていふは、其の事をおもくいふにて、こゝは、よく植ゑばなごらふほどの意なり○一首のこ
ころは、能く植ゑたれば、秋のなき時はなければ、年々下、必、さくへし。花は散るべけれど、根さ
は、枯れじとなり○根さへは、根とさとをいふ義なり

(五十一段)むかし男ありけり。人のもとより、かざりちまきをまおこせたりける返
事なり

(語釋) かざりちまきは、飾履なり。チマキは、和名抄に、以菰葉糝米、以灰汁糝之、合糝也。

五月五日喉之とあるこれなり。昔もたまきは、こもたつしむ事なれど、こゝなるは、あやめにて包みたりきと見ゆ。唐土にては、あしの葉、竹の葉にて、つゝみ、我が國にては、今は竹の葉にてつゝむなれば、中昔の頃、あやめ下つても包むことありしなるべし。されば、歌下もあやめかると詠めるなり。又飾といふは、五色の糸して、くゞり巻きたれば、さへるなるべし

あやめかり君はぬまにぞまどひける
われは野に出でゝかるぞむびしき

(語釋) 君はは霧を賜はんとて、あやめかり下つて、あしこの沼にまきひ給ひ、我はまた、蓬子まきおらせんとて、野に出で、獵したりと、君が勞を謝し、また、我が勞をも譽びたるなり。古人は、實績なれば、我が勞せる事をもあげて、人にいひたぐるがつねなり

とて、まじをなんやりける

(語釋) 聞こえたるが如し
(五十二段)むかし、男、あひがたき女にあひて、ものがたりするほどに、とり鳴きければ

(語釋) あひがたき女とは、何か事情ありて、たやすくは、逢ひがたかりし女なり○とては、難むいかでかく鳥のなくらん人忘れす

おもふてころはまた夜ふかきに

(語釋) 人しれずは、人に知られずの畧語にて、歌詞なり○一首の意は、何とて、かく鳥は鳴くことならん。また曉には至らじ。心のうちには、まだ夜あかしの思ふにとなり

(五十三段)むかし、男、つれなかりける女に、いひやりける

(語釋) つれなしは、強顔などの字をあつ、なつかしからぬたて、よそ／＼しく、氣つよくソシテ顔するさまをいふ

行きやらぬ夢路をたどるたもとに

天つ空なるつゆやおくらん

(語釋) 行きやらぬは、行くことの出来ぬなり○一首の意は、つれなき女なれば、現に行きてあふべきよしもなし。せめて夢になりとあはんとて、こなたの心はゆかんとすれども、女の方にてつれなければ、たましひ通はず、女のもとへ行きやらすして、終夜ゆめぢをたどりて、目をめて見れば、涙をもたばえぬほど、袂のぬれたるは、夢路には、空の露やおくらんとかこてるなり

(五十四段)むかし、男、おもひかけたる女に、えうまじうなりての世に

(語釋) えうまじうなりての世とは、女を我が物とせんと、彼是、周旋したれども、え得られぬやうになりたる時の意なり

おもはずはありもよすらめ、言のはの

をりふしごとれたのまるゝかな

(語釋) この歌も、諸説とを得じ。新釋よりし。其の説に「はく、拾穂、腋斷など、古今集なる、よしの川よしや人こそつらからめ、はやくいひてしことは念れじ」といふ歌を同じ心なりとて、言のはとは、はやくたのめおきたる、言のはのやうにいひ、古意にも、其の意にわかれたれど、うはあやまりなり。あやうの意にはあらず。一首の意、まことには、女の心下あまはすあめめ、たまはか下、通ふ文のことば、よそながらあひ見る時の言の葉なごの、こなたを思ふやうにきこゆれば、其のそりあしごごに、たのみにする事かな、たのみてもかひなし、得らるゝ女にはあめめを、うちまげきたる意を、かなのてにはにこめたり。かくとかがれば、はしの詞にもあはず。言の葉のそりあしごごに、つよきたる詞の意にも、更に叶はざるなりと、此の説にて、聞こえたり

(五十五段)むかし、男、ふして思ひ、おきておもひ、おもひあまりて

(語釋) ちして思ひ、おきておもひは、思のいと切なるさまなり。つきの歌は、たゞ、涙のあかきよしの女をいへれば、この歌のめはれをわかめんとて、このはし詞を加へたるものなるべし

我が袖は草のいほりにあらねども

くるればつゆのやどりなりけり

(語釋) この歌は、大やう聞こえたるが如く、草の庵は、露しげきものなるが、我が袖は、うの草のいほりにあらねど、暮るれば、戀のおもひまがらうて、涙のかわく時なく、いはゆるつゆのやどりなりけりとうち歎きたるなり

五十六段)むかし、人、まねぬものおもひする男、つれなき人のもとに

(語釋) 人しれぬものおもひは、人にかくいひ出づることの出来ぬ物おもひなり。こゝは、身分に叶はぬ、高貴の人を戀ひしたひたるよしなり。そのゆゑは、歌に我から身をも、くだきつるかなとありて、及ばぬ戀なる事を知らるゝなり

こひわびぬあまのかるもにやどるてよ

われから身をもくだきつるかな

(語釋) こひわびは、及ばぬ戀にて、せんかたつきたるよしなり。われからは、誰の別讓た、やどる虫なり。されば、二三の句は、われからをいはんための原なり。○やどるてよは、やどるるといふの約言なり。○一首の意は、身分をも願みず、及ばぬ戀にせん方つきて、心はもとより、身をも碎きつるよ。はてく、かひなき事に、からきめ見ることよと、歎息せるなり。○此の歌は、古今集、題しらす、典侍藤原直子のうたに「あまのかる藻にすむ虫のわれからと、ねをころなかめ世をばうらみで」であるを少しかへて、はし詞をも作りたるなるべし

(五十七段)むかし、心つきなき色このみなる男、長岡とらふところへ家しくりてきりけり

(語釋) 心つきなき色このみとは、似合はしからず、相應せぬあまの好色家をいふ。されば、隣の女あまも、らみつきすきもの、しわみややな、あひけりたるよしなり。○長岡は、山城の國、この訓部たも

りて、桓武天皇の三年より、十三年まで、都なりし地なり

うこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもありけり。

(語釋) 宮ばらは、宮原にて、殿ばらなをいふに同じく、宮たもといはんが如し。こゝは、宮たちの二三人も、一所に住み給へる宮殿のさまなり。舊説に、宮腹にて、后、また、皇女の腹に生れ給へる御子をいふといへるは、わろし〇こともなきは、難なきの義にて、今言に、大抵よろしいなをいはんが如し。すべからざるをいふにはあらず〇女どもありけりは、宮つかへして、ありけるなり。さて一人ならぬことは、女どももあるにて知るべし

おなかなりければ、田からすとて、此の男、見をりけるに、

(語釋) 田舎の事なれば、めしつかぬ奴僕等に、田をからすとて、此の男、門下といふ、見まはり、萬事指揮し居けるにたり

いみじのすきものゝきはぢやとて、あつしりりきければ

(語釋) 此の處も、新釋の説よろし。其の要は、はく、すべからざる好色の人のしわざとて、たはふれいひて、あつまり入り来るなり。いみじとは、ものゝ勝れたるをいふ詞なり。すかものは、好色の人をいふ。やはよといふに同じ。さて此の男は、色このむといふまきとあるに、田からすとて、出で、とかく行ふは、艶だち色好む人のすべきわさならねば、女どものわざを隠れて、いみじのすきものゝしわざよといへるなり。ざるを、拾穂、臆断など、皆、いみじの云々をいふ詞を、男の家居のおもろきをほめ興する意にぞかれたるは、いたくたへり。家居のことならば、すきものゝすまひ

やとこそいはめ。しわざといひては叶はず。又、家居をほめられたらんに、男のたひて、おくにかくるゝゆゑもなしと、此の説、まことに、いはれたり

此の男、なびて、おくにかくれければ、女

(語釋) 門に出で、いらく指揮するたるに、いみじのすきものゝしわざとて、女下といはれたれば、耻ぢて、奥へ逃げ隠れたるなり

あれにけりあはれいく世のやどなれや

すみけん人のおどつれもせぬ

(語釋) やどなれやは、宿なればにやの義なり〇一首の意は、荒にけり。ア、幾世經たる宿なればにや、昔、すみけん人の、絶えて訪ひおどつれもせぬならん。それゆゑに、かくは荒れたるならんとの意なり。さて實は、男のかくれて見えねば、人すまで、年經しやどの荒れたるよしにて、隠れていへるなり

とらひて、あつまり來おてありければ、此の男

(語釋) 一旦は、男はちて隠れたれど、女ども入り來て、隠れる歌よみかけて、ここに居れば、男もあつかに、まげに心たこりて、隠れかへしたるよしなり。「來おてありければ」をあるに、心ぞつけ

むぐら生ひてあれたるやどのうれたきは

かりにもれにのすたくなりけり

(語釋) ひぐらは、葎の字を訓す。生ひ茂る草なり○うれたきは、日本紀に、慨哉の字を訓める意にて、憂はしきをいふ詞○すだくは、多く集まるをいふ。水鳥のすだくなをいふも、同じ語なり○あれにけりも、女の上めるを承けて、御歌のとほり、むぐら生ひ茂りて、荒れはてたるやどのうれはしきは、かろめにも、かろしき鬼の多集なりといひて、彼の女どもの群り來たるを、鬼にたとへて惡み贖れたるなり

どなんいひ出だしたりける。此の女ども、ほひろはんどいひければ

(語釋) ほひろはん云々は、はじめ男が門に出で、とかく指揮しそりける事なれば、已等も穂ひろけん。伴ひて田へ出でたち給へと、再、たはふれかけたるなり
うちむびてれちほひろふときかませば

われも田づらぬかまじものを

(語釋) 此の歌の意は、穂ひろはんといひて、いざなひ給へとも、贖れぬそひぐらにし給ふ事なれば、もろともた、え出でず。もし、世にわひて、落穂ひろひ給ふときくならば、我も田づらぬ行きて、拾ひてまぬらせんものと、贖れていへるなりと、新釋にいへるが如し

(五十八段)むかし男京をいかか思ひけん。ひんがし山にすまんどおもひりりて
ぞみわびぬ今はかぎりの山里に

身をかくすべきやどもとめてん

(語釋) すみわびぬは、都に住み詫びたりとなり○やどもとめてんは、宿求めたしとなり○一首の

意は、おほかた聞こえたる如く、憂事ありて、都に住む事がいやになりたれば、かわて身の終は、山里に思ひ居りたる事なれば、其のかぎりの山里に隠遁して、人に知られぬ宿求めてんとなり。其の故は、人に知られぬ宿ならば、さまで、憂事もあるまじければなり

かくて、ものいたくやみて、しにいたりたりければ、れもて水をしきなどして、さきで、

(語釋) ものいたくやみては、何疾といふ事なく、重くわづらへるよしなり。憂事に、あまり心勞せるより、氣鬱病など、引きおこせるさなり○しにいたりるは、痛く胸にさしてみなをきて、息の絶えたるよしなり○おもてに水をしきは、面に水灑ぎにて、絶息せるものを驚かし醒めしめんがためたは、今もする事なり

わがうへに露うおくなるあまの河

とわたる船のかしのこづぐか

(語釋) とわたるは、門渡にて、あまの河の濠をいふ○あまの河は、天上の川なり。銀河などいふこれなり。○かいは、楫にて、水をはねて、船をやる具なり○一首の意は、我が一度死にたるに、顔の上における露にて、蘇生せり。されば、此の露は、この世のものにはよもあらず。天上のあまの川の門わたる舟の甲にやあらんとれもへるまゝをよみたるなり
とらひてまゝ、いさいでたりける

(語釋) むきた、「さき出で」といひて、又、こゝにかくいふは、重複せるやうなれど、重ねていひて、

詞をさむる文法、古文にはまゝある事なり

(五十九段)むかし男ありけり。宮づかへいそがはしく、心もまめならざりければいへど、うじまめれ思はんといふ人につきて、ひとの國へいれけり。

(語釋) まめは、眞實の意なる事、前に委しくいへり○いへど、うじまめは、家刀主にて、一家の主婦なる事、前にいへり○男、宮仕に多忙にて、おのづから、女の許へ疎遠に、殊にそれを眞實の志も見えざりき。然るに、已はかやうに疎遠にはせじ。眞實にたもといふ人のありて、それが、田舎へ行くと、つきてはきけるなり

此の男、うじの使にて、いきけるに、

(語釋) うじは、豊前の國、宇佐八幡宮をいふ。此の官は、古來、おもくおめ給ひしかば、御代のはじめには、必、勅使を立て給ふ例なりき。さらでも、事ある時には、勅使をつかはさるゝなりある國のまじりの官人の、めにてなんあるときにて。

(語釋) しゅうは、祇承の字音を、なだらかに訓めるなり。勅使を祇承する官人にて、今の世に、馳走役人などいはんが如し。さてこれは、國司をはじめて、郡司、驛長などまをいふべし。此の男のもとの妻、今は此の祇承の中の官人の妻にてありと、男の聞き傳へてなり

女あるじにかはらけとらせよ。さらすば、のまじといひければ、かはらけとりて出だしたりけるに、さかななかりける。たちばなをとりて

(語釋) 女あるじは、其の家の主婦、乃、妻をいふ○かはらけは、杯をいふ○とらせよとは、手に取

りて、飲みてとらせよの意なり○さかなのさかは、酒なり。なは茶にまれば、魚にまれば、酒のめはせにするものを廣くいふ詞なり。こゝは、菓子すなはち橋を酒肴に出だしたりけるなり。されば、此の橋を取りて、女に與ふとて、うれによせたる歌をよみたるよしなり

とつきまじはな橋の香をかげば

むかしの人の袖の香する

(語釋) とつきまじは、五月待なり、橋は五月をまじて、花とくものなればいへり○はな橋の香をかげばは、今とりて興あるは子なれども、子によりて、花によせていへるなり○むかしの人は、昔、わが親しみし人をいふ○一首の意は、橋の花の香をかげば、昔あひ見し人の袖の、香に能く似れば、うれにつけて、むかしの人を戀ひしく思ふとなり○此の歌は、古今集に、四月の郭公と、五月の郭公との間に入れられて、何となき昔人の香を思ひ得たる歌なるを、こゝには、右の詞を作りて、其のさかなにせる橋によりて、もとの妻によみて興へたる事になせるなり

とひひけるに、思ひ出で、尻になりて、山に入りける

(語釋) 評釋にいはいはく、とひひけるに、思ひ出で、とは、昔、わすれぬ意なる夫の歌を聞きて、女が心みじかくて、別かれし事をくやしうも、恥づかしうも思ひ出でたるなり。しか見ざれば、尻になりて、といふ詞につゝかす。古意に、此の使、もとの夫ならんとは、思ひもよらざりけるに、かくよみたるを聞きて、ふと驚きはちて、尻になれるなりと、とかれたるは、いかゞ。たとひ、歌よむをきかずとも、夫とせし人を見まがふやうなく、歌をきいたりとて、いかでか、ふとあせろく事の

あらん云々といへるは、いとよし

(六十段)むかし男、つくじまでいきたりけるに、これはいろこのむなり。すきものぞと、すだれのうちなる人の、いひけるを聞きて

(語釋) つくしは、筑紫にて、九州の古稱なり。これは云々とは、此の人、色好むなりといひて、又くろかへして、好色家なりといへるなり。○男の通るを、簾中に居る女の、此の男を見知りたるが、他の知らぬ女にいひ聞かせたるよしなり。うれを男が聞きて、歌よみかくるさまなり。そめ川をわたらん人のいかでかは

いろねなるてふことなかるべき

(語釋) いかでかはのは、軽く添へたる言なり。いかでかの意に見るべし。○てふは、といふと約めたる詞歌なること、前にいへり。○そめ川は、筑紫にある川なり。○一首の意は、此の筑紫に來て、染川を渡りたらんに、いかで、色に出でざる事を得んやといひて、これは所がらなりと、却りて、其の人をうちかへしたるなり。○此の歌は、拾遺集に、題しらす。業平朝臣をしてあげたり。されど、拾遺集は、すべて、おぼつかなき事多ければ、或は此の物語より、業平朝臣をしたらんも知りたし

女かへし

名にしおはゝあだに予あるべきたはれ嶋

浪のぬれきぬきるといふなり

(語釋) ぬれきぬきは、無き名を負ひたるをいふ。浪のぬれきぬとつゞけるには、浪は物とぬらす

ものなれば、島の縁語にいへるのみ。○此の歌、諸説區々なり。その中、古意と、評釋との説、おほかたよろし。其の大意にいはいはく、染川をわたる故に、色にならたるとたまへと、たとへば、たはれ島も、たはれといふ名におほは、あだにあるべき島なれども、更にあだなる事なし。されば、たはれといふは、なき名なりと人もいふ事なり。染川も其道理にて、ものを染めて、色になす事はなし。染といふは、なき名なるを、此の川を渡りたるゆゑに、色にならたりとのたまふは違へり。もとより、色なる君なりと、打ちかへしていへるなり云々

(六十一段)むかし男の年ごろおとづれざりける、女、心かしくやあつざりけん。はかなき人のことにつきて、ひとの國なりける人につかはれて、もと見し人のまへに出で來て、ものくはせなとせけり。

(語釋) 年ごろおとづれざりけるとは、男の心かはりて、音信せざりしにはあらざ、なにか事情ありて、疎遠に打ち過ぎたりしなり。其のゆゑは、男、いにしへのにははひはうつらといふ歌よみたるに、女は答もせず、なきたるにて知るべし。○はかなき人のことにつきてとは、かく疎遠なる男と、あてにして居らんよりは、田舎へ行きなば、またよき事もあるべしなと云ひて、人の誘ひたるなり。さて其の誘ふ人のいふ事の、たしかならず、浮きたる事なれば、はかなきとはいへるなり。○ひとの國とは、他國の意なり。こゝは、都よりいふなれば田舎を指せるなり。○もと見し人とは、彼の事情ありて、年ごろ、音信せざりし男をいふ。○ものくはせなとせとは、此の女、人の家に使はるゝ下婢なる故に、客人の前に出で、給仕したるなり

ながき髪を、きぬの袋に入れて、遠山すりの長きあを、ぞきたりける。

(語釋) ながき髪を云々、背に垂れたる髪を袋に入るは、衣服をよごさじとてするわざにて、しき女のさまなり○あをを、襖にて、あはせの衣がつねなれど、綿を入れるもあり、衣服の上にはある物にて、今の世の羽織の如きものなり。さて襖は、うちくには、身分よき人も着るとあれど、人の前などに用ふるは、下賤の者に限り。殊にこゝは、下婢の事なれば、布にて作れる襖なりしなるべし。又、襖は、大抵、男の着るものなるに、便利なれば、こゝは女なれども、着たりとなり。またたけ長きを着たるも、女なればなるべし○遠山すりとは、草の汁なきて、遠山のかたをすれるなり。我が國にては、古來、草摺の衣を賞せる風俗なりき

よよりこのありつる人たまへど、あるじにひければ、れこせたりけり。男われをば、しらすやとて

(語釋) よよりは、夕さりなどいふと同じく、夜といふに異ならず○ありつる人たまへとは、男が女の主人に向ひて、是の下女を興へ給へといひしなり○われをば知らずやとは、我をば、見捨てたるか。なにがしなりと、男が下女に問ひかけたるなり

いとこへのにはひはらつらとくら花

ちれるがごとともなりけりかな

(語釋) いらは、いられと探す意を含める詞なり○ことは、如くの意なり○一首の意は、昔のにはひやかに、美麗なりと容貌は、何處へ消え失せたるや。散れる櫻花のにはひ無きが如くなりけり

かく衰へしめたるは、わか、年比、音信せざりしゆゑに、つまらぬ人にそのかかれ、今は人に召し使はるゝ身もまでなりける事よと、悲しく思ふところをこめたるなり。かく解かされば、歌の意をかからず。はるかなきいと詞に、心をつけて、此の意を悟るべし

とらふを、いとほづかじとおもひて、いらへもせで、おたるを、なごいらへもせぬとらへば、なみだのこぼるゝに、目も見えず、ものもいはれずとらふ。又、男

(語釋) いらへは、答なり。今の世に、返事とらふに同じ。耻づかしくして、答もせざりしを、何ゆゑと、又、問はれて、涙のこぼるゝに、目も見えず、ものもいはれずと、答へたるよしなり、これやこのおれたあふみまのがれし

年月ふれ、とまよりがほなる

(語釋) これやこのは、物二つにわたる時の詞なること、既に前に委しくいらへり○まよりがほなるとは、つれなきのまよりがほなるの意にて、答せぬを、かくしひなしたるなり○一首の意は、これが彼のわれを厭ひて、逢身アヒミのがれし、年月ふれを、思ひなほらす、つれなきのまよりがほなる人かとの意なり○これやこのとらふは、終の句にいらひ愛したる人かとの詞へかけられり。いらひのこしたる詞へかけんとて、なるとは結びたるなり

とらひて、きぬを袋に入れて、遠山すりの長きあを、ぞきたりけり。いらしぬらんととも知らず

(語釋) きぬは、衣服をいふ○とらふは、取らせ下して、興あるとらふ○いらしぬらんととも知らず

く、逃げ出で、ゆくへしれずなりぬとなり。いたく、恥ずたるさま見るやうなり

(六十二段)むかし、世てらうあるおうな、いかで、このなまけあらん男にあひ見てしがなとれもへど、いひ出でんにもたよりなければ、まことならぬゆめがたりを、むすこ三人をよびあつめて、かたりけり。

(語釋) 世てらうは、色好む心をいふ。○おうなは、嬖にて、老女をいふ、若き女と混るべからず。老女にて、猶、色このみなりけるなり。○このなまけあらん男とは、下の在五中將を指せるなり。このは、今の彼のときふに同じ。○あひ見てしがなは、逢ひ見たしとなり。かなは、願望の意なり。○いひ出でんにもたよりなければとは、老女なれば、在五中將を戀ひ慕ふよしを言ひ出でんも、似つかはしからず、便なきなり。されば、夢語にして、ようながら、三人の子に語り聞かせ、暗によく夢ときせしめんの意にて、話せるよしなり。

ふたりの子は、なまけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、よき御男より、いでこんどあははるに、此のおうな、けしきいとよし。

(語釋) ふたりの子は、太郎と、二郎となり。○三郎は、第三の子なり。○よき御男よりいでこんどあははせるは、母の暗にさやうなる夢をつくりて、話せる下ごころを知りて、解き合はせたるなり。抑、夢合といふことは、昔よりありて、そのわざは、夢を解く人の言によりて、凶夢も吉夢となり。吉夢も凶夢となる事ありといふ。故に今こゝの三郎が母の吉夢に解きなしたれば、母はさてこそ、我が心に叶ひたれと思ひて、氣色、甚、よしとなり。

こと人は、いとなまけなし。いかで、この在五中將れあはせてしがなとおもふところあり。

(語釋) こと人は、異人にて、在五中將ならぬ人といふ。○なまけなしは、はじめに、在五中將は、情あかき人なるよしいへれば、在五中將にくらべては、異人は情なしとなり。

狩りしありきける道に、いきあひにけり。

(語釋) 狩りしありきしは、在五中將なり。

馬の口をとりて、かうくなんちもふといひければ、あはれがりて、いきてぬはけり。

(語釋) 馬の口をとりとは、中將の乗りたる馬の口を、三郎がとりとめてなり。さて馬の口をみづから取りて云々といふは、中將の氣色をとる意を含めたる文なり。○かうくなん云々、かうくは、今言に、カヤウカヤウといふに同じ。さてこゝは、異人は情なしと、三郎が思ふよしを、中將にひたりとも見らるべく、又、かくかくなん、我が母の思ふと、中將に告げたりとも解せらるべし。古説にも、兩様あり。いづれにてもありぬべし。○あはれがりて云々、例のなまけあかきこゝの一端を知らせたるなり。

さてのち、男、見えざりければ、おうな、男の家にいきて、かいまみけるを、男、ほのかれ見て

(語釋) 一度來てねたるのち、中將見えざりしかば、老女、心配して、家にゆきて、中將の様子を伺ひけるを、中將ほのかに見てなり○かひまは、物の間なをよりのぞき見るをいふこと、既に前に委しくいへり

ももとせにいとせたらぬつくもがみ

我をこふらしたれもかげに見ゆ

(語釋) ももとせにいとせたらぬは、年若たるをいふこと、甚しくいふ意なり○つくもがみとは、髪につくもの花に似て、短きをいふ。つくもは、和名抄に、辨色立成云、江浦草、和名、豆久毛とあることなるべし。江浦草は、あまのいふものにて、藍の類なり。此の草の花、老人の頭の髪みじかきに似たれば、此の江浦草の花に似たる髪を、つくも髪といふなり○一首の意は、老女の甚しく年若いて、短き髪その儂の見ゆるは、我を戀ひしたる様子なるが、あはれなりとなり○下の句は、おもかげに見ゆ、我をこふらして、顛倒して意をさるべし。又、此のうたは、老女の來たるを見て、しらぬよしによみしなり○ももとせにいとせたらぬをいひて、いたく年の老いたるをいひ、又、つくもがみといひて、その老髪を知らせたり、これはわろくいふたはあらう、憐みおもふ方に心得べきなり。又、儂に見ゆるは、心の通ひくれば、夢に見ゆる如く、戀ひしたるがゆゑに、心の通ひ來て、儂に見ゆるならんこのころなり、能く味ひていふべし

といひて、うまにくらおかせて、出でたつけこきを見て、うばからたらちともしらす。はじりまひて、家にきてうちふせり。

(語釋) 我を戀あらしおもかげに見ゆといふ、なほひある歌をうたひて、すてたま、馬に鞍をかせて、出づる様子なれば、老女は、必、わか許に行き給ならんとて、つねの道をゆくに暇なく、判牒の生ひしげれる野路をさみわけて、我を念れて、急ぎかへりゆとなり

男このおうなのせしやうに、このびてたてりて見れば、おうな、うちなげきて、ぬとて

(語釋) 男も娘のかいまみたるやうに、娘の家に來りて、このびて見ればの意なり○ぬとては、驚きなり

さむころに衣かたしきこよひもや

變ひしき人にあはでもがねん

(語釋) さむころは、延喜式に、廣席、狹席など見えて、狹き席をいふ○衣かたしきは、獨ねのことなる事、前下りへり○この歌は、古今集に、上の句は、同じく、下の句は、我をまつらんちのはしひめとあるを、例のつくりかへて、こゝに入れたるなり。實に、こゝには能く叶ひて、あはれなる歌となれり○一首の意は、狹き筵に、夜の衣をかたしきて、今宵も戀ひしき人にあはでも、まろねするこどかどうも歎きたるなり

とよみけるを、男あはれと思ひて、その夜はねにけり。

(語釋) 右の歌を、女のうたひけるを、戶外に立てる男の聞きて、あはれさに堪へず。内に入りて、いねたりきとなり

世の中のれいとして、思ひおもはぬ人あるを、此の人は、そのけぢめ見せぬ心な
んありける

(語釋) れいは、例の義なれど、こゝは、ならはしなといはんが如し。思ひおもはぬ云々、世の中の男は、たほかた深く思をかくと、冷淡なるとあれど、此の人は、さるけぢめなく、まことに、物のあはれを知りける人よとなり。たとへば、若くうつくしき女を愛して、衰へたるを退けるは、なべてのならばしなれど、此の人は、さる偏頗の事なりきとなり。これ物のあはれを知るといふことにして、すべての物語書の骨體なり。殊にこの物語は、物のあはれを知らせんとてしくみたるものなれば、かゝる人を、最、人からよきやうに記せり。その心して、全篇の意を味あへし。けぢめとは、差別また、區別などの字の意なり

(六十三段) むかし、男女、みそかにかたらうわさもせさりければ、うつくなりけん、あやしきによめる

(語釋) この條、いたく省察せる文にて、うち見たる處にては、意をとりがたし。語説あれども、辭釋の説いと詳らかなり。其の要にいはく、これは、たかき宮づかへする女の、男をこゝろみんとて、名をかくして、文おこせるに、男は、いひよりてあひみんと思へど、女は、しばしてゝるみんとて、密

々にかたらあわさるへせさりければ、さきに文おこせるは、宮づかへする女房とは知らるれど、名をかくせるゆゑに、うつくの局よりなりけん、知られねば、ここのさまあやしむ下、歌よみてやるなり。さるは、文のつかひはする人あらめど、女のかたより、口がためして、うつこもさしはらるること。さて、昔、男女の文おくるは、けさう心ありての事なれども、今の世のさまとは異にして、花、紅葉につけて、あはれなる歌をも書きてたくりて、其の返事のやうを見てゝるむる事をもありき。されば、文おこせたりとて、頼むべきにあらず。こゝもそれなり。此の段は、いたく事すくなに書きて書ける文なれば、心をやりて見されば、さき得がたし。さるき註をも、わろし云々。又、いはく、臆断に、みろかにかたらあわさるせねば、女の常にすむ所、うつくにかありけんも知らず、あやしむ一跡みてやるなりといへり。これは、大かた、本文のまゝにひて、更にさける所なく、いと拙し。古意に、こはもといひかはし、女の、宮の内なほにあるが、其のあり所もいひ知らせねば、且、女の心をあやしむなりといはれたり。もし此の説の如くならば、うつくなるらんとあるべきなり。けんといへるに叶はず。師のいはれたるは、けんといふ詞さか。うつくなるらんとあるべきなり。もし、又、けんを助けていはく、物語の地の詞として、うつく下への事なりけんを見るべしといはれたり。けんをいかよといはれしは、古意の説によられたるゆゑなり。又、地の詞としてといはれしも、いかよ。うつくなりけんあやしむにさつときて、男のおもふ意をいへる詞なるをや

ひかよとあしむとあしむのさ

吹く風に我が身をなさは玉すだれ

(語釋) 玉すだれとは、簾の美麗なるをいふ。○ひまは、隙なり。すきをいふ。○一首の意は、我が身を形も色もなき、風にまよはば、玉簾の隙を求めて、宮づかへせる女房の局の中に入りて、文おこせるは、何處のたれといふ事をするべきに、風に身をなす事かなはねば、心にまかせずと、歎きたるなり。○此の歌は、樂葉の旋頭歌に、いきの緒に、われは思へど、人めおほみ、ころ吹く風にあらば、しはく逢ふべきものを、又、玉だれの、をすのすけきにいらかよひ、こねたらちねの、母がとはさば、風を申さん又、妹がぬる床のあたりに岩くまゐる、水にもがもや入りてねなましなをあるによりて、例のつくれるなるべし。

とりとめぬ風にはありとも玉すだれ

たがゆるさばかひまもとむべき

(語釋) とりとめぬは、手に取りとめぬをいふ。○一首の意は、たとひ、色も形も見ぬ風になりたまふとも、玉だれの中へは、誰もゆるさねば、隙をもめて、入るやうの事は、得したまはし。ならぬ事なりといへるなり。

(六十四段)むかし、みかどの時めきつかはせたまふ女の、いろゆるされたるありけり。大みやす所とて、いますかりける、御いとこなりけり。

(語釋) 時めきつかはせは、女に時を得させて、仕ひ給ひしなり。すなはち、御寵愛の感なるをいふ。

○いろゆるされとは、禁色をゆるさるるにて、これも時めきて、寵愛したまひしを、知らせたる女なり。さて禁色には、染色と、織物と、二種ありて、其位にあらざれば、着ることを得ざるなり。延喜式に、凡、諸禁色者、總雖下衣不聽服用とあるは染色なり。又、同式に、有禁色者邪(謂綾羅錦綺之類)とあるは、文織物なり。されば、此の二つをゆるさるるを、色ゆるさるるといふなり。○大みやす所とて、いますかりけるの、いますかりとは、たはしましけりといふに同じ。さて源氏物語などの例を考ふるに、皇子を生み奉れば、皆、みやす所といふ例なれば、こゝは、天皇の御母君ゆゑに、かくいへるなるべし。此の大御息所は、まづは、清和天皇の御母后(明子)を申せるにて、いとは、高子(後二條后)の御事なるべし。在原なりける男とは、業平朝臣を思はせたるなり。されど、業平の高子を相知れるは、文徳天皇の御時にて、清和天皇の高子を寵し給ふ比は、此の朝臣、四十餘の歳にて、官位共に昇れること、史に見えれば、此の時のことにはあらず、例の書きひがめたるなりけり。

殿上にとむらひける在業なりける男の、まだいとわかかりけるを、此の女、あひしりたりけり。男、女がたゆるされたりければ、

(語釋) 殿上にとむらひは、つねに、殿上に祇候せるなり。○いとわかかりけるは、すべて、物語にわかしていふは、極めて幼稚の時をいふ。こゝも、いまだ、十三四位の時なれば、女方にゆきいすることをゆるされて、ありつととなり。○女がたは、女方の意にて、女の住める局をいふ。○あひしるとは、夫婦のかたらひするをいふ。時代をあらぬまにかきひがめたることは、前々にもいへるが如し。女のある所にいきて、むかひをりければ、女いとかたはなり。身もほろびなん。か

くなせとどいひければ

(語釋) 女の云々は、男が女の居る所に行きて、對坐し居りければなり。さるな心にも甚はこめて、つねに、女の處にありけるなり○いとかたはなうは、甚だ見ぐるしなといはんが如し。かたはは、片羽にて、すべて不具なるをいふこと論なければ、こゝは、見ぐるしといふほかに解すべし。かゝる日我が室に来て、對坐し給はんは、いを見ぐるし。さては、わが身はもとより、御身も、共に滅びたすはんとなり○かくなせろは、かくし給ふ勿れなり。女がかく男に注意したりとなり○さるほろひなんは、名はもとより、身もの義に見てもよろしけれど、やはり、我が身はもとより、御身もの義に見る方がたやかなるべし

思ふにはこのぶることぞまげにける

あふにしかへばさもあらばあれ

(語釋) 思ふには、行きてあひ見んと思ふをいひ、このぶは、人目いかゞとこのひかくるゝをいふ○あふにしかへばは、逢ふに換へばなり。しは、例の助辭なり○さるあらばあれは、今言に、サウモアラバアレといふ義にて、たとひ、かくありともよしなるといふことなり○一首の意は、相見んと思ふ心と、人目いかゞとこのぶ心と、心中に争ひしが、遂にこのぶ方の心まけて、人目もはゝからずかく毎日來て、對坐し居るなり。かくては、身もほろひんとしたまへと、逢ふに換へば、よし、身はほろひても、をしからずとなり。かくいひて、前の身もほろひんとするに答へたるなり○此の歌は、古今集に「あふに思ふることまげにける、色には出るじとたまひしものぞ」といふ上の句をとり「いさかよはなぞはつゆのあたものぞ、あふにしかへばをしからなく」といふ下の句を少しかへて、例のつくれるなり。さるを、新古今集に、この歌を、業平朝臣としたるは、いかゞ。歌のなまぢの、本末、少しとこのぶはぬ心地するを

とらひて、どうしておりたまへば、いとさうこには、人の見るをも、このばで、のぼりおければ、此の女、思ひわびて、里へゆく。

(語釋) さうしては、曹子にて、此の女の部屋をいふ○おりは下りにて、臺盤所より、曹子に下り、給ふなり。一本にをりあり。さらば、居りなれども、たりとある本。よろしかるべし。臺盤所は、禁秘抄に、臺盤所三間、北間朝餉、方敷黄端疊、東倚子其南女房、簡入袋と見わたる所なり○いとさうしては云々、臺盤所に居るうちは、さすがに、はれの所なれば、少しは、たしなみて、對坐し居たるに、曹子にては、いとさうしては、人目もはゝからねば、女もせんかたつきて、わが里へゆかれたりとなり。わびての語釋は、前にくはしくいへり

なれば、なれのよきこととちもひて、いさかよひければ、みな、人きゝて、わらひけり。

(語釋) なたのは、今言に、ナンソレがなといふに同じ。一本に、なたと、なんに作れり。それもあしからず○よきこととは、女の里へゆくは、よき事を男のおもふなり。女がわが里へゆきしを、かへりてたよりよき事を思ひて、通ひきとなり。此の他は、聞こえたるが如し

しとめて、どのもつかさの見るに、くしはとりて、おくれなげられてのぼりぬ。

(語釋) つとめては、朝はやくなり。晨の字などをあつ〇どのもつかさは、主殿司にて、毎日、早朝に宮庭の洒掃をつかさどるものをいふ。早朝に、宮庭をめぐりて、下部どもの掃ひ清めたるあそを見分するものなれば、その官人に見つけられたるなり〇くしはとりて云々、靴は従者または下部なとのとるべきものなるに、みづから、取りたるは、しのびて、昨夜、女の里へゆき、今かへる處にて、さる従者などもなきさまなり。又、宿直したる殿上人の靴は、奥に入れたく所なれば、そこへなげ入れたるなり、たゞ、脱きすておきては、宿直したるやうに見ねばなり。かやうにして、殿上人のぼりぬとなり。こゝは、三代實錄に、業平のこゝをこゝして、放縱にして、かゝはらすなどあるは、かゝりて、かけるなるべし

かくかたはにじつゝありわたるに、身もいたづらになりぬへければ、つひにぬるびぬへこととて、この男、いかんせん、わがかゝる心やめたまへと、佛神にも申しけれど、いぢまごりたのみれば、つゝ、なほ、わりなく、こひごうのみれば、えければ、

(語釋) かたは下のみは、見ざるしくのみなり。女にはなれぬやうにするをいへり〇ありわたるとは、日を経るをいふ。女につけまごひてのみ日をおたりきとなり。かくては、女の身も、わが身も罪なはれて、戀もかなはずなり、又、つひには、滅ぶることにも至らんとなり。されば、この戀やむやうにて、神佛に祈願せられ、彌、まごりて、止むへくもあらずとなり〇わりなくは、むりに、あながちになどの意なり

おんやうじ、かんなきまよびて、戀ひせじといふ、はらへのごとして、なんいさける。

(語釋) れんやうじは、陰陽師なり。中古には、何事にも、罪、けがれなどのある時は、陰陽師、神巫などをたのみて、祓といふ事をする風俗なりき。こゝも、身のほろふるまを、戀するは、なにか物のたゞりなどにて、心の惑へるにやとて、祓をするなり〇はらへのごとは、祓の具にて、祓するにつけて、神に供ふる物をいふ。此の供物は、祓の大小によりて、差あり。大祓には、馬、釜、麻、布、人像など、さまざまの具を出だせり。こゝは、私の祓なれば、さる物までは、供へざるなるべし〇いさけるは、鴨の川邊に行きけるなり。祓は、水邊にて行ふべきなればなり

はらへけるまゝに、いぢまかなしき事、かすまごりて、ありしよりけに、こひしくのみおぼわければ

(語釋) いぢまかなしきこと云々、祓のしるしなきよりなり〇ありしよりけにのけは、萬葉に、殊、勝、異などの字を訓める意にて、ありしよりも、殊にまごりての意なり。祓せぬうちよりも、まごりて戀ひしとなり。けは、清音によむべし

こひせじとみたらし川にせしみるき

神はうけずとなりけけるかな

(語釋) みたらし川は、何處にても、社のはどりにある川をいふ詞なり〇みるきは、身邊にて、身の

罪けがれを拂ひ清むるをいふ。○この歌は、聞ておたるが如く、戀のやむやうに、みたらし川に、み
らせざるを、神も受け給はず、いよく戀ひしくなりぬる事よと歎きたるなり。○此の歌、古今集に
逢はぬ人を戀ふる篇に入りて、よみ人しらすに、下の句、神はうけずもなりけらしなどあるを、少
しかへて、例のつくれるなり

といひてなん、きりける。

(語釋) きりけるは、祓の場所より、家に還り來にけるなり

此のみかどは御かほかたちよくおはしよとして、曉には、ほどけの御名を御心に
いれて、御こゑは、いとたふとくて、申し給ふを聞きて、

(語釋) 此のみかどは、時に清和天皇を指し奉れるなり。三代實錄に、天皇風儀甚美、端嚴如神、性
寬明仁慈、溫和慈順、好讀書傳、潛思釋教、鷹犬之遊、漁獵之娛、未嘗留意とあるをもてかけるな
るべし。○曉には云々は、曉のおこなひとて、佛名を唱ふをいふ。帝の御心に入れて、たふとき御心に
て、佛名を申したまふは、女心には、殊に毎く聞きなせるなるべし。女の佛の道に入りやすきは、む
かしも今も同じ風俗なればなり

女はいたうなきけり。かゝる君につかうまつらで、すくせつたなくかなしき事、
この男にばたされてとてなん、なきけり。

(語釋) 女はいたうなきけりと、まついひて、再、うのなしゆあよしくはしくいへるは、一つの文
法なり。かゝるたふとき君に仕へ奉ることの出來ぬはりのれこるは、前世の因縁ならんとな。

○すくせは、宿世の字音にて、前世と云ふと同じ。さうかゝるめでたき君に仕ふる事を得ざるは、
前世の因縁とはいひながら、此の男にばたされての義なり。○ばたされは、被り絆なり。和名抄、調度
部鞍馬の具に、絆、釋名云、絆(和名保太之)半也、物使半行不得、自絆也とあるものにて、馬のほ
だしよりあこりて、行くべき方へゆかれぬ妨となる物をいふ

かゝるほどに、みかどきこしめしつけて、此の男をながしつかはしてければ、彼
の女をば、いとこのみやす所まがてさせて、殿のくらにこめて、まをりたまひけ
れば、くらにこもりてなく、

(語釋) ながしは、流罪にせるなり。當時の流罪は、近流、(越南、安藝)中流、(信濃、伊豫)遠流、(伊
豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐)の三等ありき。こゝは、都近き越南の國なるべし。前に身もぼろ
ひ、身もいたづらになりぬべしといふは、こゝをいへるなり。○彼の女をば云々、彼の五條の皇太夫
人のれはする宮をも去らしめて、倉にこめて、戀らしめたりとなり。○まがては、罷出にて、尊所より
賤所へゆくをいふこと、前にいへるが如し。すなはち、殿中を出だして、倉にたこめられたればいふ
○しそりは、木の枝などをしそりたどめるが如くして、人をこらしむるをいふ。すなはち、いため
くるしめる事なり。○落窪物語にも「この北の方にこめて、ものなくはせり、しそりこらしめて」
など見えたり

あまのかるもにすむむしのわれからと

ねまころなから世をばうらみじ

(語釋) 上の句は序にて、一首のこゝろは、かく倉にこめられて、わひしきめ見るも、皆、わが身のあじき事よりこれるなれば、音を泣くべし。世の人をば、怨みじとなり○あまのかるもにすむ虫の解は、前に委しくいへり○此の歌は、古今集に、典侍直子朝臣の歌とあるを、例のこゝにかり用たるなり。まことに、あはれかめし

となきをれば、此の男、人の國より夜ごとけきつゝ、笛をいとおもしうくふきて、聲はいとをかじうて、歌をぞあはれに、うたひける。

(語釋) 人の國とは、他國の義なり。此の男は、流罪に處せられて、近くも越前なるべきに、夜ごとに都へ來たること、もとよりあるべからず。かゝる事は、例の虚實うちまじへて。作りなせるなり○歌をうたはれうたひけるは下にある、「いたづらに行きてはきぬる」の歌をいふ。ながされたる國より、しのび來て、もし女の聞きもやするを、ひられて、笛をき、聲をもしうく、歌うたふことなり、女のうたを前に出だして、男のうたをかくに出だしたる、まことに、あはれかめし

かゝれば、此の女、くらにこもりながら、それけうあなるとはきけど、あひ見るべきにもあらでなん

(語釋) 女は、笛の音のねもしく、うたを聲のあはれなるを聞き、此の男なりとは聞き知れど、倉にこめられたる身の、出づべくもあらず、歌よめるよしなり

さりとともと思ふらんころかなしけれ
あるにもあらぬ身をば知らずして

(釋語) さりとともは、サウアリともにて、我は流罪に處せられたれど、毎夜々々、いく度も、かゝうたうたひ、笛をきたらば、女もき、知りて、逢ふこともあるべしと、男の思ふこゝろを承けては、さるなり○あるにもあらぬは、ありてもなきが如き身といふ義なり「一首の意は、おほかた、聞こたるが如く、毎度いたづらにしのび來たまふが、まことに、悲しき事よ。我はくらにこめられて、あれども無きが如き、身をも知らでとなり」と思ひをり、男は女しあはねば、かくしありきつゝ、うたふ。

(語釋) とれもひをりは、女のなり。右の歌は、女の心中に思ひをるのみにて、もとより、倉の中なれば、うたふべきにあらず。故に此は、女の心を知るによしなく、いつまでも、女にあままでは、うたひありくなり、女しのびは、例の助辭なり○かくしありくとは、前の笛をきうたうたひて、女に逢ふまではと、ありくをいふ

いたづらにゆきてはきぬるものゆゑに
見まほはごたらしきなはれし

(語釋) 物ゆゑには、ものながらの義なり○つゝは、いひまほして、このこゝろをうくめたるなり○一首の意は、かひなき事に、ゆきては歸りきぬるものながら、逢ひ見んとおもふところに勝はれつゝ、なほ、度々ゆく事よとなり○この歌は、古今集に見えたるうたなるを、例のよきほとのところだ、用ひなせるなり

「水尾の御時なるべし。大みやす所は、染殿の皇后なり。五條のきさきとよ」

(語釋) 此の一段のさま、水尾(清和)帝の高子を寵し給ひし時のさまにかきしかば、「水尾の御時なるべし」といひ、且、その頃に、大夫人と聞ゆるは、御母染殿の後なれば、染殿の皇后なりとかけり、されど、寔に高子のいふこと申すは、文徳天皇の御母、五條后なれば、いと子といふによりて、五條の後といふ説もありとて、後人の註せるが、本文となれるなるべし。さて業平朝臣と、高子と、相知りたるは、文徳天皇の御時なるべし。いかにとなれば、業平は、仁明天皇の御時、正六位上にて、文徳實録には、一所も見えず。清和天皇の貞觀四年に、正六位下より、從五位下に轉じて、右近衛權少將となり。同五年、左兵衛佐と見えてより、官位、いよく、昇進せり。然れば、此の文の如きこと、清和天皇の御時に至りては、あらざりける証にて、文徳天皇の御世にありし罪なりしを知るべし。さて染殿后も、貞觀六年に、皇太后となりたまひ、高子も、同八年に女御となりぬ。然るを、大みやす所といふこと、例の物語とはいひながら、實をたづぬれば、田村天皇(文徳)の御時の事にて、田村の御母后、五條后のまだ大みやす所と申せる時の事とおもひ定めて後、この物がたりの時代をも、人をも書きまぎらしたるを知るべしと、古意にいへり。

(六十五段)むかし男津の國にゐる所ありけるに、あに弟、ともだちなどひきおて、なにはのかたにいさけり。なごをを見れば、船どものあるを見て

(語釋) しる所とは、領地の義なること、前に委しくいへり。攝津の國に、領所あるによりて、兄弟朋友うちつれて行きしとなり。こゝは、難波の浦へ、眺望にゆきたるなるべし。○舟どもとは、多くの舟あるといふ。

なにはづをけふとらみつの浦とて

これや此の世をうみわたるふね

(語釋) みつの浦は、三津の浦なり。故に「こゝ下」といへり。三津を數の三つに取らせるなり。三津浦は、日本紀、齋明天皇の巻に、發自難波三津之浦とある所なり。又、三つに見るをかけては、いへるなり。○一首の意は、難波津を、今日見るに、三つの浦とて、舟どもかすくあり。これや、此の世をわたるありまならん。こゝの海わたる舟はといふ意なり。まことに、波間を舟は、世をわたるにたふべきものなればなり。○うみをわたるを、古人の説に、世を倦みといふにかけたりといふ説もあれど、こゝまで、深く見るにも及ばざるべし。たゞ、海渡るの義にてあるべし。

これをあはれがりて、人々歸りけり

(語釋) この歌を、人々めで、歸りにきとなり

(六十六段)むかし男、せうほうして、おもふとちからしつらねて、らつみの國へ、き

らつきはがり、に、いさけり。

(語釋) せうほうは、逍遙の字音なり。逍遙は、日本紀に、アソフと訓みれるが如く、心をやりて遊ぶをいふ。○思ふとちは、今言に氣のあへるといふに同じく、睦しき人々をいふ。○かいつらねは、かきつらねにて、かきは、添へたる詞なり。ひきつれての意なり。○きらつきは、陰曆、二月をいふ。衣更着の義かぞや

かふちの國、いこまの山を見れば、くもりみ、はれみ、たちねる雲やます。あした

るべし。此の條は、古今集、戀の三下、業平朝臣の、伊勢の國にまかりける時に、齋宮なりける人にいとみそかにもひて、又のあした、人やるすべなくて、思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりけるとて、この二首あるを、かく詞をかへて、一條とせるなり。さて狩の使の事は、史には、使の人々をも、前の事をも、委しく記したれど、業平朝臣をつかはされし事見えす。此の朝臣、もはらざる事すべき年齢は、清和天皇の御代なれど、此の御代には、狩の使はとめられて、一度も此の事なし。陽成天皇の元慶八年に、再ひおこされたれど、此の朝臣は、既に卒せり。されば、例のあらぬさまに、時代を作りなせるなり。

かの齋宮なりける人のおや、つねのつかひよりは、此の人、よくいたはれといひやりけり。おやのいふ事なりければ、いとねんごろに、いたはりけり。

(語釋) 齋宮は、いにしへ、天皇の御即位ある毎に、内親王、又は、女王の、いまだ、嫁し給はざるを、選ひて、伊勢の神宮と、加茂神社とに、奉祀せしめ給ひぬ。共に之を齋王といひ、其の居所を、齋宮といふ。又、伊勢なるを、齋宮といひ、加茂なるを、齋院といひき。おやは、母おやなるべし。いははれは、今言と同じく、大切にせよといふ義なり。○此の齋宮なる人を、ある説に、怡子内親王に、文徳天皇の皇女、惟喬親王の御同腹、御母は、紀の名虎の女、静子なりといへり。此の女にも、惟喬の親王、紀の有常、業平のしたしく交れるよし見ゆれば、殊に、ねんごろにせよと、母のいひやれると有るなどを以て考ふれば、より所あるに似たり。然るに、古意なきに、いたく、之を辨じて、齋宮は、皇女なるが上に、最、神聖なるべきものなるに、業平と通せるやうの事はあるべからずといへば、

じめにもいへるが如く、當時は、男女の間、まことにみたりがましく、淫猥の氣、天地に満ちたる時なれば、其風俗をにくまば、別論なれど、ひとり、業平のみ責むべきにあらす。かゝる風俗の世には、又、皇女といへども、臣下と通じ給ひしことをなして、もいふべからず。當時を評するに、今日の如く、男女の間の關係、整然たる倫理を以てせむるは、酷といふべし。當時、かゝる事ありたりとて、何ばかりの事かあらん。されど、いかし男ありけりやうに書きたりたる一條の物語なれば、之を以て、必しも、人をおし、時代を考ふべき、必要なしといは、もより別論なし。あしたは、かりにいだしたて、やり、ゆふよりは、こゝにかへりことせけり。かくなんごろに、いたはりけるほどに、いひつきけり。

(語釋) 出だしたて、は、齋宮の御心つけ、用だしやり給ふなり。○ゆふよりは、夕至の義なり。○こゝにかへらせけりは、齋宮へかへらせ給ひしなり。狩の使は、國司のものとやどむるかつねなれど、母よりよくいたはれといひ、おこされしければ、特別の御もてなしたて、齋宮の殿にやどし給ふよしなり。○いひつきけりとは、ねんごろに、いたはり給ふをたよりた、いひよりつきて、密事いひたまひしよしなり。

二日といふ夜男、われてあはんとといふ。女も、はた、あはじともおもへらば、これいといふ人めしげければ、あはず。

(語釋) 二日といふ夜とは、今言下、二日メノ晩な夜といはんが如し。○われてあはんは、わりなくあ

はんの義なり。わりなくは、道理なしの約言にて、無分別になどいふに同じ。古今集の俳諧歌に、よひのまに出で、いりぬるみか月の、われてもの思ふ比にもあるかまよひを歌ふ、わりなくもの思ふといふ意にて、こゝもかまよひをまなり〇はたは、又の意のかるき詞をいふ説きまつ、よろしからん。この事、なほ、前に委しくいへり

つかひさねとある人なれば、どほくもやとさす。女のねやも近くありければ、女人をじづめて、ねひとつばかりに男のもとに來にけり。

(語釋) つかひさねとは、使の中に、主とする人をいふ。掣さね、客さねをいふも同じ。日本紀に、主帥をかみさねと訓みたるによるに、これも、使主とかく意なるべし〇どほくもやとさす云々は、齊王、すなはち、内親王の御ねまも、殿中のおくまりたる間なるべく、又、此の勅使をやとし給ふ所も、どほくはなれたる室にはあらで、いはゆる、上段の間なるべし。されば、女の間も近くありければとほへるなり〇しづめては、殿中の人々をねさせて、後のこゝろなり〇ねひとつとは、昔は、一時を、四つにわかちて、子一つ、子二つ、子三つ、子四つとやうにいひき。他の時もさかり。いはゆる、子の一刻をるに、男の室へしのび來にけりとなり

男はた、ねられざりければ、どのかたを見出だしてふせるに、月のおぼろなるに、人のかげするを見れば、ちひさきわらはをさきれたて、人たてり。

(語釋) 男はた、ねられざりけりとは、女の事の心にかかりてなり〇どのかたは、戸の方ともいへければ、外の方の意なるべし。こゝは、男かもしも女の來たらんかと、外の方の月を見ながら、はしちかく、かりに倚り臥し居たるまなり〇ちひさきわらはを云々、れとはは、心れき給へば、少女をつれ給へるよしなり。いかに殿中なりとも、貴女は、ひとりあるき給はねば、しのびながら、少女を供につれ給へりとなり。又少女は、あそびにつれ給ふべきに、さきだたてゝとあるは、少女は、殊に殿中をあるきて、勅使のやせれる室なきを、かねて、能く知りたりけんゆゑに、さきだたてゝしるべせしめられきとなり

男、いとうれしくて、わがねる所にゐていりて、ねひとつより、うじみつまであるに、まだ、何事もかたらひあへぬほどに、かへりにけり。男、いとかなしくて、ねだなりけり。

(語釋) わがぬる所にゐては、我がれくなる間へつれゆきてなり〇ねひとつより云々は、前にいへるが如く、子の一刻より、丑の三刻までなり〇まだ何事も云々、相思を男女の逢ふは、秋の長夜も短きならひなれば、まして、春の夜とて、いまだ心に思ふかたはしをだに、語らぬうち、女はかへりにけりとなり

つとめて、いぶかしくければ、わが人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて、待ちをれば、明けはなれて、こぼしあるほどに、女のもとより、詞はなくて

(語釋) つとめては、朝の將に明けはなれんとする頃をいふ。最の字をさめつ〇いぶかしくは、罵

葉に、醒惚の字をイフカシども、オボツカナシども調める意なり。なごりをしめて、男ねすなり下ける事なれば、心の中に、思のむすぼれて、我よりたよりやるべきか、又、彼方よりたよりあるなら、まづ間の、とやかくに、心の亂れて、はれぬをいふ○あけはなれては、夜の明けて後をいふ。例のわらはが文以て來たるなり。男、披きて見れば、文の詞はなくて、歌のみありきとなり。さて文の詞のなきは、思の切たて、いかたともいふべきよしなきはまなり。

君やこじわれやゆきけんちもほむす

夢かうつゝかかねてどめてか

(語釋) 一首の意は、昨夜、相見しやうにたほゆるは、君が我が許へ來ませる下か、或は、かのれは、君のもとへ行きたか、其のうつれなるかを覺えず。さては、夢にてありしかとなり。はかなく別れて、後朝の切なる心、とありぬべし○夢かうつゝかとは、夢かたしあか主たて、うつゝかとは、軽く見るべきこと、新釋の說のことし。漢文の緩急なをいふも、急の意強く、緩の意ゆるし。かゝる例は、和文にも、漢文にも、あることなり○萬葉に「うつゝか君が來ませる夢たかむればまはるる戀のしづきて」とあるを、本歌として、つくれる歌なるべし

男、いといたう、なきて、よめる
かきくらす心のやみにまどひなき

夢うつゝとはこよひのためよ

(語釋) 下の句、こよひのためよを、古今集には、世人のためよとあり。こゝはなほして引けるなるべし○一首の意は、昨夜のことは、我はたかきくらす心に、君のおほせらるゝ事を、定むべくもあらねば、今宵來て、うつれども、定め給へとなり○心のかたかくに亂れて、暗くなるを、やみにたどへていへるなり。これも心の切なることあらはなり

とよみてやりて、かりにいでぬ。野にありけど、心はうらたて、こよひだに、人しづめて、いととくちはんと思ふに、

(語釋) かくて、獵に出で、野を踏みわけ歩けど、女を思ふ心の切たて、うかくと、心の空なるよしなり、萬葉に「わさもてが夜戸出の姿見てしより、心空なり土はあめども」などあり○こよひだにとは、昨夜はあまほどもなかりしかば、せめて、今宵は、人をはやくねさせて、あはんとおもふよしなり。人しづめては、人をねしづましむるをいふ

國のかみ、いつきの宮のかみかけたる、狩の使ありとききて、夜ひと夜、酒のみしければ、もはら、あふ事もいせで、あけば、尾張の國へことんとすれば、男も女も、人しれず、血のなみだをながせど、いあはだ。

(語釋) 國のかみ云々は、伊勢の國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたるをいふ。かけたるは、兼ねたるの義なり。尾淵翁の古意に、欠けたるを見られたるは、つたなし。兼をかけたいふは、常のことなり。この國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたる人が、齋宮に來たりて、勅使を饗應して、終夜酒筵を張りきとなり

り。此の酒宴のために、逢ふ事も出来ず、さればとて、明日は、尾張の國へ越えんとすれば、悲しみのあまりに、血の涙を流して、わかれぬとなり。○もはらは、何事にもあれ、其の事のみするなり。こゝは、一向に、又、少しもなごいさほどの事なり。

夜、やうく、あけなにとするほどに、女がたより、出だすさかつきに、うたを書きて、出だしたり。とりて見れば、

(語釋) 夜漸々あけんとする頃、女の方より、杯のおもてに、歌をかきて、出だせりとなり。

かち人のわたれどぬれぬにじあれば

(語釋) かち人は、徒歩人なり。○えにじは、縁に、江をわたるなり。○歩下てわたると、ぬれぬほど

の水は、いと淺きを、二夜とだに逢ひかたき、淺き縁なりといへるなり。たゞ一夜、かりうめのもきり下て、かくわかれまらするは、まことに淺き縁よとなり。

とかきて、末はなし。其のさかつきのうらに、つら松のすみして、うたの末をかきつぐ

(語釋) 末は、歌の下をいふ。歌の上下を本末とも、つねにらふ。まて下のなきは、男につきてよとの意を示したるなり。又、杯のうらに書きたるは、おもてに、本のかきてあるが故なり。○つら松云々新釋にいはく、つら松は、續松を音便下しかし。へる下て、たゞ松と同じものなり。このすみしてかけるは、よるの道は、さきにたつ人、松をもして、ゆくことにて、江家次第、二十の巻、童五位元服の條

にも、五位二人取續松明、並前行とあり。こゝも、夜をこめて、出でんとするゆゑに、とも人の、松をもして、庭にまち居るべければ、其のれちたるすみをひろはせて、書けるなり。旅上をひして、はし近く出で居たるさき見るが如し。そりふしあたり、硯もなく、いそぐゆゑに、あまるべし。膝斷、古意など、つら松といふ名の意のみひいて、うのすみしてかけるゆゑをさきとられたるは、あそをかなり云々

またあふ板の關はこねなん

(語釋) こは、又、いかたもして、逢ふ時もあらんと、女を慰めていへるなり。其の中に、都下かへりても、逢坂をまたも越えて、伊勢に來たりて、逢はんといふ意をこめたるなり。抑、この贈答は、互にしげき人目を忍びて、はかなきちきりにてわかるゝなげきを、江の水の淺きといひなし、又、あひ見んと慰むるを、逢坂の關をゆるに擬へなど、すべてかくし詞にて、巧にしくみたるなり。こゝに歌の末といふは、七々の句なるゆゑに、かりに末といへるにて、實は連歌ともいふべきにて、あまののく思ふ心を述べたるなり。されば、あながち、本末を合はして、一首の歌とはいふまじきなり。契沖法師は、一首の歌にせんとして、かにかくに説きなされたるは、なかくにわろし

あぐれば、をばりの國へ越えにけり
(語釋) 越えとは、國の境を出づるをいふ。伊勢より、尾張へ行くに、山もなければ、越ゆるは、河を越えたるなるべし。といふ説もあれど、いかゞ、河にはわたるこそいへ。越ゆるは、いふまじきなり。たゞ、國境を出でたるを、こゝには越ゆるといへりを見る方、おだやかなるべし。

(六十九段)むかし男、かりの使よりかへりきけるに、大淀のわたりにやどりて、
いづきの宮のわらはべにひかけける

(語釋) 大淀は、延喜の神名式に、伊勢の國、多氣郡に、竹大與村の神社ありて、即、齋宮の同じ郡に
て、遠からぬ所なり。かつ齋宮くだり給ふ時、まづ、こゝにはらひして、齋宮へ入りたまふ例なり。あ
る説に、伊勢、尾張の道のわたり口なりとあるは、いかゞあらん。こゝは上の條の同じ度にて、尾張
より京へ歸るとて、伊勢を又經るに、大淀といふところに宿りたれば、齋宮より、御使のあるが中
に、彼の心じりのわらはべもありしかば、それらひひかけたりとあり

みるめかるかたはいづこぞとて

われにをじよあまのつりおね

(語釋) みるめは、見る目を、海松めにかけて、さて海松のある所は、海人のよく知れるものなれ
ば、釣舟の竿もて、さし教へよといふ、たとひ歌なり。彼の見し後、あひ見るよしもなく、わびしま
に、齋宮に又あひまわらせんには、いかかしてよからん、一度みぢひきせる童女なれば、かうくし
てよからんと、吾にをしへよとなり。それを、海邊にての事なれば、その物もたとひたるなり。
又しのびたることにて、人に知られぬやうに、いへるにてもあるべし。この歌は、小野篁の「人には
つげよあまのつりおね」の歌をたもひて、例の記者のつくれるなるべし

(七十段)むかし男、伊勢の齋宮に、内の御使にてまねりければ、彼の宮にすき

こといひける女、むたくしことにて

(語釋) すきことは、舊説に、好色の事をも、又、榎子といふ女の名なりともいへり。何れにても
こゆれど、こゝは、好色の意に見る方よるしからん。常に好色なるからず、勅使にさすきことといひ
かけたるなり。この女は、齋宮の侍女なり。さてすきといふ言の原義は、すべて、物どこのまじうす
るをいふ。それより轉りて、好色、また、風流などの義ともなりぬ。○むたくしこととは、齋宮の御使
を、勅使へつたるとはあらざ、侍女がむたくしことにて、よめる歌なりといふ意なり。

大宮人のみまははは

(語釋) ちはやふるは、神といふ語の冠辭なり。○かきは、忌垣の約にて、みだり、人の入るま
垣をいふ。即、神のいます所の垣は、みだりに、人の入るまじきものなれば、たとへていへるなり。○
大宮人とは、殿上の大内に居る人を、ひろくいふ稱にて、こゝは、勅使をさしていふ。○一首の意は、
大宮人のせちに見まほしければ、神の御禁制なる、忌垣も、みだりに越えて見んと思ふなりよし、た
りありて身のほろふるも、いとほじとなり。さて神といふは、齋宮をしたとていへるなり。齋宮の
したひたまふ君を、むたくしに慕ひまつることをなれば、齋宮のたより必あるべしと、それをあそぶ
る意を、含めたるなり。これをはしがきた、むたくし事にてとは、かけるなり。○さてこの歌は、万葉
に「ちはやふる神のしがきもこねぬべし、今はわが名のまじけくもなす」と、又、同集に「ゆあかけて
はあやしろもこねぬべし、あまほゆるかも戀のしげきた」などあるに上りて、例の記者のつく

なせるものなるべしとおぼゆ

男かへし

こひしくばきても見よかしちはやなる

神のらさむる道ならなくに

(語釋) 道ならなくには、今言に、道デナイノニなるとはんが如し○一首のこゝろは、男女相慕ふは、神の禁じ給ふ道ならぬに、神の思垣も越えぬべしなをやうた、ことごとしくいふべき事ならねば、戀ひしくば、來てあひ見よかしとなり

(七十一段)むかし、男、伊勢の國なりける女に、又もえあはで、隣(ト)の國へ行くといひて、いみじう恨みければ、をんな

(語釋) こゝの女とあるは、上の齋宮にて、一夜あへる人をいふと見えたり

大よどの松はつらぐもあらなくに

うらみてのみもかへる浪かな

(語釋) 松を女に、波を男にたとへて、我がつらきにはあらぬを、われを恨みかほ下、かへるかなと、女のいふなり○この歌は、古今集、在原元方のうたに、「あふことこのなきことしよる浪なれば、うらみてのみもかへりける」と、あるによりて作れるなるべし

(七十二段)むかし、そこにはありとさげと、せうそこをだに、らふへもあらぬ

女のあたりをありきて、男のおもひける

(語釋) せうそこは、消息の字音にて、文、また、詞をいふおつねなれど、こゝは、懸想詞といひかゝる事だに出來ぬ女の上となり。さるは、まゐる人などのありて、きびしきゆゑなるべし

めには見て手にはとられぬ月のうち

かじらのごとき君にぞありける

(語釋) 月中桂樹のことは、支那にて、はやくよりいへり。和名抄にも、兼名苑をひきて、月中有河、河上有桂、高五百丈とあり。我が國にては、さるくよりいひきと見ゆ。萬葉集に、「めには見て手にはとられぬ月のうちの、かつらのごときをいかにせん」といふ歌あり。こゝのは、萬葉のそ、少しかへたる例のわざなること、明らかなり

(七十三段)むかし、男、女をいたううらみて

(語釋) 一本に、この詞をおとして、前段につけてたるは、わろし

いはねふみかさなる山はへだてねど

あはぬ日おほくこひわたるかな

(語釋) 岩ねふみかさなる山とは、岩ほなを踏みつゝ、越ゆる山は、深く險阻なるものにして、人の通ひかたきものなれど、さる重なる山は、隔てねど、相思はねば、あはぬ日おほく、戀ひし戀ひして思ひわたるかな、まことと、つれなき、君が心かなと、うらみて、歎息したる歌なり○この歌は、萬葉

集に、「石根をみかたなる山はあらねども、逢はぬ日おほみ戀ひわたるかな」とあるをとりて、例の作者の、少しかへたるものなること著し

七十四段)むかし、男、いせの國なる女に、京におていきて、あはんといひければ、女

(語釋) 男、伊勢の國なる女に逢ひそめしかど、伊勢にては、ながく逢ひかたき事情おこりて、京につれゆきて、あはんといひけるなり

大よどのはまねおふてふみるからに

心はなきぬかたらはねども

(語釋) 大よどの濱に生かてふは、みるの序にて、意味なし。みるは、海松に、見るとかけたるなり。一首の意は、よそながら見るからに、戀のこころは、なき和きて、さまたれば、此の國に居て足れり。京へゆへは、否といへるなり

といひて、まじて、つれなかりければ、男

袖ぬれてあまのかりほすわらつみの

みるをあらにてやまんとはする

(語釋) 海松は、袖をぬらして、海人が、かりては濱にほすものなれば、上の句は、みるといふ事なり。Sへるのみ○一首の意は、見るからに、心はなきぬかたらは、よそながら、あひ見るを逢ふとしてやまんとするに、かゝて、うなたは、薄情なることなれど、恨みたる意なり

女

岩まよりおふるみるめじつねならば

しほひしほみちかひもありなん

(語釋) 此の歌の解、諸抄まちくなり。古意には、こはかく見る事だにかはらであらば、之を朝夕のかひにてころあるべき物なれど、右の大淀の歌と、又、同意なり。まじてつれなかりければと、かけるは、こゝをいふなり。又、海松は、岩に生ひて、かつ色かへぬものなれば、つれなくばといへるは、つれによれる語にもあるべし。しほ干、汝満は、萬葉に「あしづの海しほみぢみつ時はあれど、しづれの時かはが戀ひさらん」とよめるは、時あることをいひ、此の歌には、朝夕に、常にいふ意にていへり。然るを、此の語に泥みて、或は男の心のかはりかはらぬたを思ひ、或は世の中は、かはる事もあれば、逢ふ時もあるんをいふなを思へるは、皆わろし云々を見えたり。又新釋には、いはまよりは、岩まにといふ意なり云々。此の歌、おあるといふまでは、みるをいはんため序なり。みるめは、海松を詞のおもては、意は見る目なり。しほ助辭なり。まじてしほひ、しほみちといふ詞、拾穂抄には、男の心のかはる意にいひ、臆断には今こそえめはぬ時なりとも、又、あふ時のあらんするをまてといふ意と、又、しほのみちひの定めなき如くなれば、さだめなきをたのみて、かひありてあふことあらんやといふ意と、二説に説き、古意には朝夕に、つねにといふ意なりといはれたり。これらの説ども、みなわるし。師説に、岩まより云々、此の歌の四の句、説き得たる人なし。しほひしほみちは、とまれかくまれといふ意なるを、海の詞にて、いへるのみなり。今

はともかくもあれ、未つひには、かひありて逢ふこともあらんとし入るなりと、いはれたり。此の
 説も、なほ、とき得られたるにあらざ。未つひには云々といふことも、此の歌のこゝろに、更になき事
 なり。此の女は、よくなから見るのみにして、逢ふことは、否といひはてたるなり。よるからた、又
 此の歌の、かへして、つらき心は、袖のしづくかと、男のつらき恨みたる歌よめるなり。よく思ふ
 し。おのれ此のうたの意をときあかさん。よくなからたも、逢ひ見ることつねならば、京にさ
 ても、此の伊勢の國に居りても、つづけても、かひありなんといひて、なほ、京にさく事を、うけ
 ひかぬ意なり。かひありとは、見る事のつねならば、うれがひあるなりと、女はあもひていへる
 なり、かひは、是を詞のおもてせしたり。しほひに、貝のあるは、更なり。しほみすた、貝もありな
 んとは、涙の下にあるをいへり。かく見れば、かひもさうあもつたは聞えず。たどつたる意を
 うはら、京にさきて、かひあるは更なり。伊勢に居りても、なほ、かひもありといへるなり。それは見
 ることつねなるゆゑなり。しほひは、しほひのひきまれば、を去りて、京にさく事なり。しほ
 みすは、こゝろにみちてある事なれば、伊勢に居るにたどつたりと、さへはひかこもなり。かくと
 てこそ、一首のこゝろつらぬきてはきこゆれといへり。新釋の説。まことた、こまやかたして、舊註
 にまじり

又男

涙にぞぬれししほる世の人の

しらきこゝろは袖のしづくか

(語釋) 涙にぞぬれししほるは、人のつれなきを、涙の雨の如く、袖にまじりか、はは、堪入がた
 く、ぬれししほるは、まじり入るなり。世の人の、つらき心は云々は、此のしほる袖の雨のおほ
 きは、一とほりの涙にはあらじ。すへて、世の人のつらき心は、袖の涙となる下か。されば、つれ
 なき君が心も、我が涙となりて、かく袖を、いみじく、ぬらすならんといふ意なり。○袖のしづくか
 は、袖の涙といふ意なり。たゞ上に涙にぞ云々であるがゆゑに、「しづくか」といへるなり
 よにぬれことかたき女になん

(語釋) 世の中に、すくれて、逢ふこと難き女になんとなり

(七十五段)むかし、二條の后の、また、春宮のみやすところと申しける時、

(語釋) 春宮のみやす所とは、春宮(皇太子)の御母儀をいふ。女御、更衣なども、御子を生みま
 りば、御息所と申すなり。こゝは、二條の后の、いまだ、皇后に立ち給はずして、御息所と稱せる時
 のことなり。古今集、雜の部に、「二條后、東宮の御息所と申しける時、大原野に詣てたまひける日、
 よめる、在原業平朝臣」とて、下の歌あり

氏神にまうでたまひけるに、

(語釋) 二條の后は、藤原氏にませば、其の氏神は、天兒根命をいふ。この神は、鎌足公常陸の國に
 て生れ給ひしかば、そこにまつりてありしを、奈良の比、三笠山に遷し、又平安の都となりて。此の
 乙訓の大原野にうつし祭られたること、大鏡に見えたり。さるを、はじめて、大原野にうつし給ひし
 は、嘉祥三年に閑院の左大臣冬嗣公なりといふ説あれど、此の公は、嘉祥のまへ。天長三年に、薨じ

たまひぬゆゑに、開院の左大臣云々といふ説は、實録をも見ぬ人のわざなり。さて二條の后を御息所と申しけるは、清和天皇の。貞觀十一年より、同十八年までの間をいふなるべし。(貞觀十一年二月一日、此の御息所の生み奉りたまふ皇子(陽成)太子に立ちたまひ、元慶元年正月一日に、御即位ましめて、其の御息所、高子は皇太夫人にのぼり給へばなり)とあるを、右の年月の間は、此の御息所、氏神詣のこと、實録にも、古記にも見ぬれば、おぼつかなければ、古今集と、此のふみと、かくあるゆゑに、右の如く、東宮の母儀とはいふなり。

近衛つかさになむらひける翁、人々のうくたまはりけるついでに、御車よりたまはりて、讀みてたてまつりける

(語釋) 近衛つかさになむらひける翁とは、暗に業平朝臣を指したるなり。さて業平朝臣は、元慶元年正月(五十一の時)左近衛の中將となりたれば、近衛つかさとはいへるなり。然るに、今年、彼の太子(陽成)も位につき給ひしかば、御母を御息所とはいふまじきなり。又此の業平朝臣、貞觀六年に左近衛少將になりし時のことともいふべけれど、さては、高子を御めやす所を申さぬ以前のことなり。とにもかくにも、時代をかきひかめたるを、例の作者の心しらひなりける。○ふくは、藤原、後世の褒美のことをもいふと、前に委しくいへり

大原やをしほの松もけふころは

神代のことをおもひらじらめ

(語釋) としほの松とは、ここに鎮座し給ふ、天兒屋根神を松に擬していふなり。住吉の神を、住

吉の松など、歌にいふと同じさまなり。○天兒屋根神は、藤原氏の祖先の神にて、天孫降臨の時より、皇室を護り奉り、其功、他の神にすべし給へり。然るに、此の神の御子孫なる、東宮の御息所は、天皇をまもり奉る妃夫人などおほき中に、すべし給へることなれば、此の御息所のまうで給ふを見そなはずにつけて、御みづから、神代のことをおぼし出てたまふなるべしとなり。さて下のころは、松を御息所に比して、はやく密事をおぼし出で、や、此翁に、人より殊に御車より祿たまふならんといふ意をふくめて、よるこふさまたりなしたり。かくとあすては、前の詞がきはいたづらになりぬべし。能く味ひてよ

さて、心にもかなごとや思ひけん、いかにおもひけん、しらずかし

(語釋) さては、といひての義なり。○男、歌にしかよみて、心にもいかばかり、昔おもひ出で、悲しかりけんとなり。右の詞書のみにて、心をうへたるさま、猶めきらかならねば、此詞をうへて、さぞらしむるなり。いかありけんしらすかしとあきたるは、下意ありつらんよしをおもはせしむる例の作者のたくみなり

(七十六段)むかし、田村のみかごと申すみかどおはしましけり、その時の女御、たがき子と申す、いまとかりけり、

(語釋) 文徳天皇、崩御まして、山城の國、葛野郡、田邑の郷、眞原丘に葬り奉りぬ。(この時、天安二年八月)よりて、田村のみかごと申す。○女御かたき子云々は、女徳實錄に、嘉祥三年七月、藤原朝臣多賀幾子爲女御と見え、三代實錄の天安二年十一月の條には、從四位下藤原朝臣多加幾子卒、多加

幾子者右大臣從二位良相之第一女也、少有雅操云々見えたり○いまそかりは、おはしますといふが如く、御座の字をまつること、前に委しいへり

それうせ給ひてのちのみわざ、安祥寺にて、やよひのつごもりたしけり、

(語釋) たかき子のうせ給ひしは、天安二年十一月なること、前にいへるが如し○のちのみわざとは七七日の間の佛事をいふ○安祥寺は、或る説に、山科にあり。五條の后、順子の建てたまへる寺なりといふ。文徳實錄に、齊衡二年六月、詔以安祥寺預於定額云々、三代實錄、貞觀元年四月の條に、緣皇太后御願、置安祥寺年分度者三人云々な見えれば、この頃、おもくあつかはれし寺なることは、更に論なし○やよひのつごもりは、三月の下旬をいふ

人々、さしげものたてまつりけり。たてまつりあつめたるもの、千さしげばかりありけり。

(語釋) さしげものは、棒物にて供物をいふ。之を字意のまゝに、ホウモチといへることも、物語ふみに、これかれ見えたり○千さしげは、棒物の數の多きをいふ

そてはくのさしげものを、木の枝につけて、堂の前たてたれば、山もさらけ堂のまへに、うごき出でたるやうになん、見えける。

(語釋) 神佛、または、貴人に、物をさしぐるには、必、木の枝につく。こゝは、堂のまへの廣きところなれば、特に大なる枝につけたりしならん。されば、まことに、山のうごき出でたるやうに見え

たるなるべし。この文の形容まことに巧なり

其のころ、右大將にいまそかりける、藤原の常行と申すいまそかりて、講のをはるほどに、歌よむ人々をめぐあつめて、けふのみわざを題にて、春のこゝろばある歌、たてまつらせたまふ

(語釋) 常行大將は、天安二年十月、從五位下周防權守より、右近衛少將となりて、多加幾子の身まかり給ふ時は、いまだ官位ひくかりき。こゝは、後よりまきらして、かけるなり。さて此の常行は、右大臣良相公の一男にて、右の女御の兄君におはせり。さてこの人の、右大將になられけるは、貞觀三年のことなり。時代をかきまきらせるは、例のことなり○講とは、法事にて、經を講じなするゆゑにいふ。其間は、人皆、聞き居りて、他事すべきならねば、たはるほどに、歌よませらるゝなり

右の馬の頭なりける翁、めいたがひながらよみける

(語釋) 右の馬の頭は、時に業平朝臣をさせるなるべし。朝臣は、貞觀五年に、右馬頭となりぬ。此の御わざの比は、いまだ翁といふべき年ならねど、例のまきらしたるなり○目はたがひながらは、さしげ物を山なりと、見たがへてよめる歌のこゝろなればなり

山のみなうつりてけふにあふことは

春のわかれをとふとなるべし

(語釋) 此の女御の御わかれと、春(三月下旬なれば)のわかれとを、兼ねていふなり。その御わか

れを吊ふとて、山も入らぬ、此處へうつり来るならんぞ、そなくよめるなり○山もみな云々と入るは、如來の入滅には、海水飛浦、大山崩裂すなど、經文に見えれば、女御の身まかり給ひてを、如來の涅槃にならうへ、且、その捧物を山と見たれば、即、山としてよめるなり○前に入るが如く、女御のうせ給へるは、天安二年十一月十四日なり。辛未のその日より數ふれば、貞觀元年正月二日、四十九日にはあたるを、三月の下旬といひ、春のわかれをよみしなど、昔、日數をもかへたるは例のわざなり。さて此の歌は、作者のよめるなり

とよみたりけるを、今みれば、よくもあらざりけり。そのかみへ、これやまざりけん、あはれがりけり

(語釋) そのかみは、當時の義なり○あはれがるは、おもしがるをいふ○こは、記者のよみてみづから、昔のことになしつゝるなり

(七十七段)むかし、たかき子と申す女御、おはしましけり。うせ給ひて、な、七日のみわざ、安祥寺にてしけり。

(語釋) 前と同じたひのことなるを、こと下、筆をおこしてかけるは、此の昔のつねなり。但こは、山科の事をいはんとてなるべし

右大將、藤原の常行といふ人、いまそかりけり。そのみわざにまうで給ひて、か、され、山志なの禪師のみ子おはします。うの山志なの宮に、瀧おとし、水はしらせなどして、おもじろく、つくられたるに、まうでたまひて。

(語釋) かへとは、歸るふたて、歸途の義なり。この文は、歸途に、山科の禪師のみ子のおはします宮にまうで給ひてと、つゞけて見るべし。さて其の間に、其の宮のまさをいひたるにて、この休歌にも、文にも、多きことなり○禪師のみ子は、法親王をいふなり。この頃、禪師をいふは、法師をいふに同じく用ひたるが如し○瀧おとし、水はしらせ云々、おのづから景色にはあらた、ことごとく作りなしたるなり。下に、島このみ給ふ御子なりとあるに、照應せしめんと、文のたくみなり。必をつけて見るべし

とせむろよそには、つかうまつれど、ちかくは、いまだつかうまつらず。こよひはこゝにさむらはんと申したまふ。親王よろこびたまひて、よるのおまじのまうけさせたまふ。

(語釋) とせむろは、年來の意なり○ようにはつかうまつれど云々、遠ながら心を寄せて、仕へ奉れとの義なり。つかうまつるは、總べて、貴人に對して、そのために周旋奔走する事にもいひ、又は傍に侍して、御物語などすることにもいふ○さむらはんは、侍候する意なり○よるのおまじは、新釋に、御子の夜の御座なり。晝は、おもての方におはし設けて、出で居たまひ、常行大將、止宿になりたれば、夜は、又、うちくの方にて、御酒宴などあるべしとて、夜の御座のまうけをさせ給ふなりといへり。されど、やはり、舊説の如く、常行大將を止宿せしむべき、寢所の設をさせ給ひきとさむろよき○さて山科の禪師の補王は、仁明天皇の四の皇子にて、禪正尹を聞ておしを、貞觀元年

五月に、入道したまへり。こも又、此の女御の後のみわざの頃は、まだ入道したまはざるを、皆、かきたがへたるは、例のことなり
さるに、かの大將出で、人にたばかりたまふやう、

(語釋) 出で、は、親王の御前より、退り出で、なり○たばかりは、たは添へていふ詞にて、た、はかりといふに同じ。慮、また、測などの義にて、考へはかる事なれど、轉じては、人と相談するやうの事をもいふ。こは、その意なり

みやづかへのはじめに、たゞ、なほやはあるべき。

(語釋) みやづかへとは、常行大將が、今夜、親王の御許にあれば、敬ひていへるなり○なほは、黙の字の意なり。なほあるとは、何をもせず徒にあるといふなれば、なほやはあるべきは、其の反響にて、たゞ黙してあらるべきか、あられぬの意なり

三條のおほみゆきせし時、

(語釋) 三條のおほみゆきは、貞觀八年三月廿八日に、右大臣良相の、百花亭へ御幸ありし事をいふなるべし。此の事、三代實錄、十二の卷に見えたり。さて良相を西三條右大臣といへば、三條の大御幸とはいへるなるべし

紀の國の千さどのはまにありける、いとれもころき石、たてまつれりき。

(語釋) 千さどのはまは、紀の國、熊野の邊なりといふ。海邊には、いろく、の雅致ある石おほきものなれば、それを大御幸の時のためにとて、良相公へ、紀人の奉りしよしなり

大みゆきの後、たてまつりしかば、ある人のみさうしのみまへの灣にすゑたりしを、嶋このみたまふ君なり。此の石をたてまつらんとのためひて、御隨身舍人して、とりにつかはす。

(語釋) こも、例の詞を省きたれば、聞こえにくし。新釋の説よろし。其の説に、紀の國は、都に遠ければ、大御幸におくれて、もて來て奉りしかば、かひ無くて、御曹司の前の、みまにすゑかかれたるなり。島このみ給ふとは、庭をつくるには、水のながれ、島山などのけしきあるさまにつくる事なれば、今の世に、庭をこのむといふを、昔は、島このむといひけん。さまに瀧おとし水はしらせなをしてといへる、すなはち、庭このみ給ふしわざなり。庭好みたまふ人は、石をめでたまふものなればとて、奉り給ふなりといへり○御隨身舍人は、常行大將のとも人なり

いくほどもなくて、もてきぬ。此の石、きくしよりは、見るはまされり。これを、たゞに奉らば、すゑなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。

(語釋) たゞには、直ちになり○すゑなるは、漫に、又、不慮になどの意なり。こは、その石を、徒に奉りては、あまり不慮なる心地して、興なしとて、歌よませ給ふとなり

右の馬の頭なりける人なん、あをさき昔をささみて、まさるのかたに、此の歌をつけて、奉りける

(語釋) あをさき昔を云々、古意に、昔昔をこまかにささみて、之を以て、蘇給のかたちの如く、歌の文字を石につけたるなりといへり。この説にて、きこえたり

あかねども岩にうかふる色見えぬ

心を見せんよしのなれば

(語釋) あかねどもは、飽かねどもなり○かふるは、代ふるなり○一首の意は、親王をおもひ奉る心のほども見せまわらせんと思へど、心は色も姿もなく、見せ奉らんやうなし。されば、岩に代へ表して、見せたまつる。これのみにて、足れりと思ふにはあかねどもといふ意なり
となんよめりける

(語釋) 聞てえたる如し

(七十八段)むかし、氏の中に、みこうまれたまへりけり。

(語釋) むかし云々、何の氏ともいはず、打うつけにやくしへるは、此の書は、業平物語なれば、かく書きて、在原氏の中にといふ意なり。と、此の皇子は、行平卿の御じすめ、夏衣女子、貞觀十六年に、清和天皇の御子、貞數親王を生みたまつた事といふなり
御うぶやれ、人々歌よみけり。御おほちがたなりける、翁のよめる

(語釋) 御うぶやれとは、御産屋の祝にの義なり。産家に、三日の夜、七日の夜などいはずは、古よりの例なり○御おほちがたは、御祖父方にて、行平卿の弟、業平朝臣とせざるなり。この時、業平朝臣は、五十一歳にあたるべければ、翁といふもよしめりけり
わが門にちひろあるたけをうゑつれば

夏冬たれかかくれざるべき

(語釋) ちひろは、千尋の義にて、殊に丈たかき竹のことなり○わが門は、我が門と、一門とをかねていへるなり○一首の意は、我が門のあたりは、世にまれなる、千尋の竹を裁ちて、うの陰もひろければ、我が氏族、家親のもの、たれか、このかげにかくれざるべき、皆、かくれて、夏は、すゝみ、冬は、霜雪をおほひて、あたゝかならんとなり。さて裏に、一門に、珍らしく御子生れ給へば、此の皇子の御陰によりて、氏族のもの、ことごとく、御恵を蒙るべしといふ意を、含めたるなり
これは、貞數のみこ、時の人、中將の子となんいひける。兄の中納言、行平のむすめのはらなり。

(語釋) 聞てえたる如し。但、この文は、一本になし。後人の書き入れたるものなるべしと、先聲もいはれたる如く、なき本をよしとす

(六十九段)むかし、おとろへたる家に、藤の花うゑたる人ありけり。いとおもじろうさけりけり。そよひのつごもりは、雨をばふるに、をりて人のもとへたてまつるとて、よめる

(語釋) 雨をばふる、雨のシヨボく降るをいふ○此は、古今集に「三月のつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて、人につかはしける」とて、此の歌あり。こゝに衰へたる家といひ、また、折りて奉るなど、詞をかへて、歌の意をかめたるは、例の作者の巧なり
ぬれつゝぞしひてをりつる藤の花

春はいくかもあらじとおもへば